

戸田講義を賞賛しつつ歪曲する引用が暴かれた！

『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群その 2

2010 年以前の池田名誉会長の著書との徹底比較検証

目次

始めに.....	5
その 1：勝利の経典御書に学ぶ 1 2 巻の諸問題..	6
おかしな講義まとめ：その 1	12
その 2：勝利の経典御書に学ぶ 1 0 巻の諸問題	13
おかしな講義まとめ：その 2	30
その 3：勝利の経典御書に学ぶ 1 4 巻の諸問題	32
おかしな講義まとめ：その 3	38
その 4：勝利の経典御書に学ぶ 1 1 巻の諸問題	40

おかしな講義まとめ：その4	45
その5：教学書「我らは地涌の菩薩なり」の諸 問題.....	46
おかしな講義まとめ：その5	49
その6：勝利の経典御書に学ぶ8巻の諸問題...	50
おかしな講義まとめ：その6	61
その7：戸田先生の講義の合成引用だと思ってい たら、池田先生のスピーチの合成引用と判明した 件・勝利の経典御書に学ぶ11巻の諸問題その2	62
おかしな講義まとめ：その7	72
その8：勝利の経典御書に学ぶ9巻の諸問題...	73
おかしな講義まとめ：その8	77
その8：勝利の経典御書に学ぶ14巻の諸問題そ の2	78
おかしな講義まとめ：その8ー2	82
その9「幸福と価値を創造する仏法」の諸問題	83
おかしな講義まとめ：その9	88
その10「人間革命の宗教」の諸問題.....	89
おかしな講義まとめ：その10	97
その11：勝利の経典御書に学ぶ13巻の諸問題	99

おかしな講義まとめ：その 1 1	106
その 1 2：勝利の経典御書に学ぶ 1 5 巻の諸問題	107
おかしな講義まとめ：その 1 2	118
その 1 3：勝利の経典御書に学ぶ 1 6 巻の諸問題	119
おかしな講義まとめ：その 1 3	127
その 1 4：勝利の経典御書に学ぶ 1 6 巻の諸問題 その 2	127
おかしな講義まとめ：その 1 4	135
その 1 5：勝利の経典御書に学ぶ 1 7 巻の諸問題	136
おかしな講義まとめ：その 1 5	142
その 1 6：『未来の希望「正義の走者」に贈 る』の諸問題.....	144
おかしな講義まとめ：その 1 6	148
その 1 7：『世界広布新時代への指針』の諸問題	149
おかしな講義まとめ：その 1 7	155
その 1 8：『世界広布新時代への指針』の諸問題 その 2	156
おかしな講義まとめ：その 1 8	164

その19：『世界の青年と共に新たな広布の山を 登れ』の諸問題.....	165
おかしな講義まとめ：その19.....	169
その20：勝利の経典御書に学ぶ19巻の諸問題	170
おかしな講義まとめ：その20.....	175
戸田・池田講義書き換えから読み解く現在の創価 学会の新教義.....	176
その一.....	177
その二.....	180
その三.....	182
その四.....	187
「釈迦は無限の過去から無限の未来に続く永遠の 仏」であると、マレーシアの『イスラム国際大 学』で講演した原田会長.....	190
2010年以前に「永遠の仏釈尊」「釈迦の弟子日 蓮」と記述された教義書の諸問題—2010年以降と の決定的な違い.....	203
『釈迦の久遠の弟子、釈迦から遣わされた使徒地 涌の菩薩』という教えの誤りと、その正体.....	208
最後に.....	210
参考文献.....	212

始めに

池田先生が2010年5月に表の舞台から姿を消してから六か月以上が経過したときから、信じられないような内容の講義が、池田大作先生名義で大白蓮華に掲載されるようになった。私の前回の著書「釈尊が舵を取る創価の船?『創価学会教学要綱』を中心にした異様な書物群」では、それらの内容を詳しく分析し、その内容が如何に2010年以前の池田先生と乖離しているかを検討したのだが、戸田先生の講義はどのように引用されているか、という観点にはあまり焦点を絞らなかった。今回は、前回の書物同様に過去の創価学会の教義との矛盾点に言及しつつ、戸田先生の講義がどのように引用されて用いられたかを徹底的に調べてみた。その結果は真に驚くべきものであった。最大の問題は、これらの講義の責任者が、ことごとく池田大作先生その人に押し付けられていることである。執行部はこれらは全て池田先生の手による著書である、と突っぱねるであろうが、これらの書物の内容ほど池田先生という指導者を貶めるものはない。池田門下生の一人として、そこに強い憤りを覚えずにはいられないのである。興味を持たれた方も、或いは、この本に述べられ

たことはデマに違いないと思われる方も、是非この書物に述べられた2010年以降の池田大作先生監修なる教学書群と、戸田城聖全集を自分自身で比較検証していただきたい。2010年以降の創価学会の教学書は全てアマゾンで購入可能である。一方戸田城聖全集は、国立国会図書館のオンラインで閲覧するか、或いは中古本で購入可能である。

なお本書は、一人でも多くの池田門下生が、こうした2010年以降の恐るべき教学改革の事実を知ることが目的としているので、著作権フリーとして公開致します。誰でも事前の許可なく、自由にコピーして友人に配ったり、ブログやSNSに転載したしても構いません。

その1：勝利の經典御書に学ぶ 12巻の諸問題

この教学書は露骨な釈迦本佛論が述べられている。それが次の箇所である。

「地涌の菩薩は「我れは久遠従り来是れ等の衆を教化せり」と説かれるように、釈尊が遙か久遠より指導育成してきた、最も縁深い本化の弟子です。誰よりも師匠と同じく、末

法流布への思いを共有した弟子であり、誰よりも 師匠の訓練を受け切ってきた弟子であるともいえます」

(勝利の經典御書 12 卷, 新尼御前御返事, p. 105)

これはかつて、池田先生が完全に否定されていた教えそのものである。その文証を示す。

「ところが、末法という時代は、釈迦とは無縁の衆生、本末有善の衆生のみが出現して、五濁悪世の時代を形成している というのが、大聖人の 捉え方であり、また、仏法の眼からみた時代相 の深い洞察であったのです。この本末有善の衆生に 対する化導こそは、久遠元初の自受用報如来による下種によらなければならない。その種子の本体は、寿量文底・三大秘 法の南無妙法蓮華經なのであります」

(大白蓮華 1977 年 1 月号, 「百六箇抄」の池田会長講義, p. 24)

つまり池田先生は、今までの教えを信徒になんら説明もなく 180 度反転させ、末法に出現する地涌の菩薩は釈迦に縁の深い弟子たち、などと教え始めたことになる。それでは戸田先生の講義をこの書物はどのように扱っているのでしょうか。それが次の引用箇所である。

「戸田先生は明快に指導されています。「この御本尊は、仏法の最高理論を機械化したものと理解してよろしい。たとえば、電気の理論によって、電灯ができたと同じと考えてよろしい。仏教の最高哲学を機械化した御本尊は、何に役立つかといえ、人類を幸福にする手段なのである」

(勝利の経典御書 12 巻, 新尼御前御返事, p. 88)

この講義には戸田先生の引用元が示されていないが、調べてみると戸田城聖全集一卷, 科学と宗教, p. 104-105)であることが判明する。しかしである。この講義には驚くべきことが述べられているのである。スクショを貼っておいたので、勝利の経典御書 12 巻が引用した箇所、及びその少し手前にある戸田先生の講義を確認してみたい。

涯を感得するためには、観念観法によったのである。すなわち、理の一念三千の実践行動は、観念観法であった。この理の一念三千の法門は、宇宙生命の実体であり、仏の実相である。

さて、釈迦にしろ、天台にしろ、理論体系の完成であって、ごく智慧のある者のみが、仏智をうることであったのであって、過去数十億年において、善根をつんだ者のみが、完成されたのであった。しかるに、釈迦が大集経において予言したごとく、釈迦滅後二千年後においては、釈迦の法華経も、天台の理の一念三千も、その機能を及ばさない。いかんとなれば、釈迦滅後二千年後の末法の衆生は、本末有善の衆生といって、釈迦の仏法にも、他の仏にも縁を結ばない、荒凡夫の衆生である。

ここにおいて、末法の本仏たる日蓮大聖人、凡夫のお姿として末法に出現して、一切経の哲理をジッと見つめられたのである。しこうして、久遠元初の自受用身であり、上行菩薩の再誕であることを自得し遊ばすや、ここに、一切衆生を幸福に導いていく本尊を、出現せしめたのである。この御本尊は、釈迦にとっては法華経の立場になり、天台では理の一念三千になるのである。されば、日蓮大聖人の法華経ともいい、事の一念三千とも申しあげるのである。

この御本尊は、仏法の最高理論を「機械化」したものと理解してよろしい。たとえば、電気

引用箇所少し前にこうある。「釈迦の法華経も、天台の理の一念三千も、その機能を及ぼさない。いかんとなれば、釈迦滅後二千年後の末法の衆生は、本未有善の衆生といって、釈迦の仏法にも、他の仏にも縁を結ばない、荒凡夫の衆生である」（同書, p. 104）

要するに勝利の經典御書 12 巻の主張する「釈尊が遥か久遠より指導育成してきた、最も縁深い本化の弟子」とは真逆のことが述べられているのである。この講義は余りにもお粗末である。引用箇所を明示しないのは、原本との矛盾が暴露することを恐れているためだと思われる仕方がないであろう。そして、このような講義や引用を行っておきながら、次のようなことを主張するのである。

「人は変れど われは変らじ」

現代にあって、大聖人直結の「師弟共戦」の信心は、創価学会の中にしかありません。牧口先生、戸田先生が教えてくださったのです。私も、ひたぶるに実践してきました（中略）私は戸田先生が自分の師匠だ、広官

一流布の師匠だと心に定め、一心不乱に戦い抜きました」

(勝利の經典御書に学ぶ 12 卷, 新尼御前御返事, p. 120)

私見：「人は変われど われは変わらじ」といっておきながら、末法の衆生（当然地涌の菩薩を含む）を、「釈迦の仏法にも、他の仏にも縁を結ばない、荒凡夫の衆生」から、「釈尊が遥か久遠より指導育成してきた、最も縁深い本化の弟子」

へと変更するこの講義の主張は一体何なのであろうか？

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その1

① 戸田講義（科学と宗教）を参考文献の提示なく引用

② 戸田講義（科学と宗教）にある「釈迦滅後二千年後の末法の衆生は、本末有善の衆生といって、釈迦の仏法にも、他の仏にも縁を結ばない、荒凡夫の衆生」を完全無視

③ 戸田講義（科学と宗教）と真逆の主張「（地涌の菩薩は）釈尊が遥か久遠より指導育成してきた、最も縁深い本化の弟子」を展開する

④ 大量の綺麗ごとを並び立てる
「大聖人直結の「師弟共戦」の信心は、創価学会の中にしかありません。牧口先生、戸田先生が教えてくださった」「人は変れど われは変らじ」

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その２：勝利の經典御書に学ぶ 10巻の諸問題

前回の書物で既に言及したことだが、この書物では今までの創価学会の教学とは全く相反する驚くべき三宝の定義が述べられている。それが以下である。

「「三宝」とは、仏宝・法宝・僧宝のことで、教えを説く仏、仏が説く教え、仏とその教えを信じ実践する人々の集い、との敬うべき三

つの宝です。本抄において「**仏宝**」とは、**釈尊を指しておられる**」（勝利の經典御に学ぶ 10 巻, 四恩抄, p. 37、大白蓮華 2011 年 9 月）

「「法」は諸仏が仏となった根源であるから、諸仏の師である。仏の恩を報じようと思うなら、法の恩を報ずべきである」（同書, p. 38）

「ここにおいて「**僧宝**」とは「**法華經の行者**」、すなわち**大聖人のお立場**にあると拝されます」（同書, p. 38）

「大聖人の仰せ通りに広宣流布の実践を貫く和合僧の団体そのものが、僧宝の後継者です」（同書, p. 39-40）

これをまとめると次のようになる。

仏宝＝インドの釈尊
法宝＝南無妙法蓮華經
僧法＝日蓮大聖人と創価学会

そして、牧口先生と戸田先生を称え、次のように主張する。

「この御書を身で読んできたのは創価学会だけです。御書の本当の拝し方を「身をもつ

て」教えてくださったのは、牧口先生、戸田先生だけです。だからこそ、「牧口先生!」「戸田先生!」と、声を大にして申し上げるのです」（同書, p. 40）

では三宝に関して、牧口・戸田先生はなんとされているのか。それが以下になる。

「三宝の御名とはいかん。法華經文上の三宝は、法華經一卷を「法宝」とし、多宝塔中の釈迦・多宝二仏を「仏宝」とし、法華經別付囑の上行菩薩を「僧宝」とするのである。このことは、釈迦仏法においてはいうまでもないことであるが、末法、しかも、文底秘沈の大聖人の仏法においては、これは絶対に取らぬことは、また、いうまでもない」（戸田城聖全集 1 卷, 三宝, p. 337）

「現今の邪宗のやからが大聖人を呼んで、日蓮大菩薩とか、日蓮大師とか、あるいは三宝のなかの僧宝とかなすの重罪、提婆達多にすぎ、良観にもこえ、平左衛門の百千億倍にもあたる」（戸田城聖全集 3 卷, 顕仏未来記を拝して, p. 249）

末法において、大聖人を僧宝とするのは重罪であり、提婆達多、良観、平左衛門の百千億倍の罪を得る、と容赦なく呵責している。そ

れでは牧口先生はどうか。牧口先生の講義には三宝に関するものはないようだが、釈迦と大聖人の仏法を次のように比較されている。

「釈尊の仏法は在世八年、及び滅後正像二千年間流通の白法と名付ける東洋的な生活法であり、日蓮大聖人の仏法は、末法万年に流通する日本的乃至世界的生活法なる大白法である」（牧口常三郎全集 8, 教育乃至生活の根本原理としての仏教の極意, p. 68)

釈迦の仏法は大聖人の仏法よりも劣ると断言されている。これでは釈迦が仏宝で、大聖人が僧宝などと定義できるわけがないではないか。そして次のような結論を導かれている。

「白法が出現すると、釈尊の親しく予言されたのが適確に実証され、『今末法に入りぬれば、余経も法華経も詮なし、ただ南無妙法蓮華経なるべし』、と日蓮大聖人が仰せられたのが現実に証明されてゐる。是は他の総の宗教宗派が、惰性的存在は続けつつも、日出後の衆星の如く、既に現実生活の指導原理としての価値を失ひ、偶々利益を与ふるものがあっても、却って大損害の原因をなすが為に、教育上には属されないのみか、有害無益の存在と見做されてゐるので解るであらう（同書, p. 69)

即ち、釈迦の法華經は末法においては用をなさないものであり、大損害を与える毒藥であるということになる。ようするに「僧法＝日蓮大聖人と創価学会」と解釈することは、牧口・戸田両先生の御書解釈に対して弓を引いているのであり、「御書の本当の拝し方を「身をもって」教えてくださったのは、牧口先生、戸田先生だけです。」（勝利の經典御書に学ぶ 10 卷, p. 40）などというのは、自己矛盾も甚だしいのである。

そもそも、僧宝＝日蓮大聖人と解釈することは、大聖人を御本仏ではなく、日蓮大菩薩として崇めることであり、大聖人を悪しく敬い、国を亡ぼすことに繋がるとスピーチしていたのは、他ならぬ池田先生その人である。そのスピーチを引用しておこう。

「他の門流は、日蓮大菩薩と称している。しかし、これは世間の権力者の命令によるのである。一方、大聖人を仏と仰ぐのは、出世間の法王(仏)の命令によるのである。(仏法者ならば、どちらに従うべきか明らかである)いわんや大菩薩は『僧宝』である。大聖人は『仏宝』であられる」「大聖人は『かかる日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし』(御書九一九三頁)と仰せである。また『教主釈尊より大事なる行者:::日蓮』(御書三六三頁)と。『仏宝』の大聖人を『僧宝』におと

しめるのは、まさに『悪しく敬う』姿ではないか」（池田大作全集 83, p. 302）

又、三宝に関して池田先生は、第二次宗門問題以後、次のように論じておられた。これも重要なので引用しておく。

「私たちが尊崇の対象とする「仏法僧の三宝」のうち、「仏宝」とは日蓮大聖人、「法宝」とは「南無妙法蓮華經の御本尊」、「僧宝」とは日興上人である。歴代法主は含まない。また「僧」とは、広く言えば、三宝を正しく伝え広めていく「和合僧」をさす。現代で言えば、創価学会こそが「和合僧」なのである。広宣流布を忘れた坊主たちが、「僧」であるはずもない。「報恩抄」は、大聖人が「大事の大事どもをかきて候ぞ」と言われた重書である」（池田大作全集 97, p. 426）

池田先生のスピーチの内容をまとめるとこのようになる。

仏宝＝日蓮大聖人
法宝＝南無妙法蓮華經の御本尊
僧法＝日興上人と創価学会

そしてこの類の創価学会の過去の教えとの矛盾に対して、「池田先生は宗門教学を改められた」などという話が、教学要綱擁護派の連中（明らかに牧口・戸田先生の教えを全く知らない輩であると断言してよいだろう）がまことしやかに弘められている。だが、最大の問題は、勝利の經典御書 10 巻の次の引用箇所である。

①「戸田先生は語られました。「われら凡愚といえども、絶対なる大聖人の確信と情熱とにふるとき、信心の火が、いやがうえにも、燃えあがるのを、感ぜざるをえないのである」

②「この（＝広宣流布の）聖業は、だれびとの手によるか。仏意はかりがたきことなれども、創価学会を除いてほかになし。恩師・牧口先生以来の因縁であり、宿命である。いまはただ前進あるのみ。闘争あるのみ」

③「広宣流布をなすのは、学会以外にない。われわれは和合僧なりと、心から叫ぶ団体である」

このような形で戸田先生の講義が三か所引用され、次のような壮大かつ流麗なセリフで終わっている。

「この厳粛なる仏勅の使命を教えてください」

た師の大思を、私は永久に忘れません。この威徳を、世界へ、未来へと宣揚しきっていくのが、人間の道です。弟子の本道です」(勝利の経典御書に学ぶ 10, p. 42)

これらの講義は、出典の明記がなされずに引用されているが、出典元を調べてみると、次の三か所であることが判明するのである。

- ①戸田城聖全集 1 巻, 御書の拝読について, p. 134-135、
- ②戸田城聖全集 3 巻, ただ前進あるのみ, p. 427,
- ③戸田城聖全集 4 巻, 御観念文について, p. 121、

そしてこれらの原本を確認するならば、勝利の経典御書と完全に相反する内容が浮かび上がるのである。①の講義のタイトルが「御書の拝読について」である。御書解釈に関していうならば、そもそも 四恩抄は佐渡以前の御書であり、その時の教えをあのような形で解釈すること自体が誤りであり、これは日蓮仏法を学んだものであれば常識である。それでは戸田先生はなんとおっしゃられていたのか、それを引用しよう。

けのものもあり、また、ある御書には、大小、権実、種脱とあるものもあり、ある御書には、久遠元初の自受用身即日運大聖人とお説きになっているものもあり、また第一、第二、第三の教相をもって説かれ、また種熟脱をもって説かれ、また下種仏法の根底たる三大秘法を説かれているものもある。三大秘法においても、三種ともにこれを説かれているもの、題目のみを説かれているもの、題目と本尊を説かれたもの等々がある。また五重の相対を能化の釈尊を用いて、これをまた六種に説かれている場合もある。すなわち藏通別の釈尊、文上本迹二門の釈尊、文底下種の釈尊と分けて説かれていることに、氣をつけねばならぬ。

この御書は、いかなることを大聖人が説かれているかということ、たえず、以上にのべた分類に注意して拝読しなければ、無意味のものとなる。

しこうして、以上は、教学的立場に立った場合であるが、いずれも信の一字をもって、一切をつらぬいていることを、知らなくてはならない。かつまた、民衆救済の大確信と、燃ゆるがごとき大聖人の情熱が、その根底をなしていることを、読みとらなくては、また無意味になることを知らなくてはならない。われら凡愚といえども、絶対なる大聖人の確信と情熱とにふるとき、信心の火が、いやがうえにも、燃えあがるのを、感ぜざるをえないのである。

(昭和三十年一月一日)

「御書をあらためて見なおしてみよ! お若きときの御書には、天台の学説を強く用いられているのもある。これは、権実相對をもって、お説き遊ばされているのである。ある御書には、内外、大小、権実、本迹、種脱相對を、完全におしたためあり、ある御書には、権実、本迹だけのものもあり、また、ある御書には、大小、権実、種脱とあるものもあり、ある御書には、久遠元初の自受用身即日蓮大聖人とお説きになっているものもあり、また第一、第二、第三の教相をもって説かれ、また種熟脱をもって説かれ、また下種仏法の根底たる三大秘法を説かれているものもある。三大秘法においても、三種ともにこれを説かれているもの、題目のみを説かれているもの、題目と本尊を説かれたもの等々がある。また五重の相對を能化の釈尊を用い、これをまた六種に説かれている場合もある。すなわち蔵通別の釈尊、文上本迹二門の釈尊、文底下種の**釈尊**と分けて説かれていることに、気をつけねばならぬ。この御書は、いかなることを大聖人が説かれているかということ、を、たえず、以上にのべた分類に詮意して拝読しなければ、無意味のものとなる」(戸田城聖全集一卷、御書の拝読について、p. 134-125)

ようするに勝利の經典御書 10 卷の筆者は、この戸田先生の講義を知っていながら、これを完全に無視して、インドの釈尊=仏宝、と

定義し、戸田先生が「無意味のものとなる」と述べられていた講義を堂々と展開していたことになる。この時点で既に、師敵対の講義としかいいようがないのである。

問題はこれだけではない。戸田城聖全集3巻、ただ前進あるのみ、の引用は、都合の悪いと思われる箇所を削りにとって繋ぎ合わせた合成引用なのであり、悪質性が高い。スクショで見ても、その合成引用は一目りょう然である。

三月度支部長会

ただ前進あるのみ

この割合でいって、（注、折伏数が月に九十五世帯であった）一万年もしたら、すごい数になるだろう。

あの朝鮮の動乱をみよ。地獄の苦にあえぐ朝鮮民族を救うは、だれか。あすの日を知らず迷う東洋民族の、いな世界人類に、光明をあたえる力はなにか。日蓮大聖人様のご慈悲をこうむらせる以外に、なにもものではないか。すなわち、広宣流布以外に、手はないのである。

しからば、この聖業は、だれびとの手によるか。仏意はかりがたきことなれども、創価学会を除いてほかになし。恩師牧口先生以来の因縁であり、宿命である。不肖戸田、年来の望みなれども、昨年来、ひとつは法華経の講義により大罪を受け、ひとつは王法ついに仏法に勝たず

演 講

の二大現証により、いっそうの確信を得たり。いまはただ前進あるのみ。闘争あるのみ。もたもたしている弱卒にかかわっていると看でない。弱者は去るべし。

(昭和二十六年三月二十八日 東京・神田の学会本部)

意図的に削除されたと思われる戸田先生の発言が次の箇所である。

「不肖戸田、年来の望みなれども、昨年来、ひとつは**法華經の講義により大罪を受け**」
(同書, p. 427)

戸田先生は、初心者が法華經を理解しやすいように天台の摩訶止観、別の言葉でいえば、釈尊を本仏とする文上の法華經を説いて大聖人の教えに背いてしまい、罰を受けたという有名な話（人間革命4巻に詳しく述べられている）をここで言及しているのである。ようするに、勝利の經典御書10巻の筆者は、この戸田先生の罰の体験を堂々と無視し、平然と文上の法華經を説いて、釈迦を仏宝と定義しているのである。要するに戸田先生の体験を密かに見下しているとしか思えないのである、そして最後の戸田先生の講義、戸田城聖全集4巻、御觀念文について、からの引用であるが、これも悪質な合成引用である。スクショを見れば一目りょう然である。

と私は祈念している。

広宣流布をなすのは、学会以外にない。これにそむけば五逆罪になる。学会を離れてしあわせなものはない。功德のあるわけがない。戸田のやつ、すこしのぼせているなというものがいるなら、言うものは言え。

仏法に五逆罪ということがある。父母を殺す。これは逆罪である。父を殺すとはなにごとか。母を殺すとはなにごとか。逆らうことはともかく、殺すとは憎みてもあまりあるものではないか。次に殺阿羅漢。これは世の指導者、師匠を殺すのが、殺阿羅漢という。次に出血身。御本尊様を破るのはこれで、そまつにすることは五逆罪の一つになる。次に和合僧を破る。心の和合を破壊し、仏の道を破壊することである。

僧というへんだと思うかもしれないが、坊さんだけのことではないのです。わが学会は、和合して、広布へ、日蓮大聖人様の教えを、日蓮大聖人様の指導通りにやろうというのであるから、これを破ろうとするものは、かならず仏法の大きな罰をうける。もし破ろうとするものがあるならば、やってみたまえ。内から外からやってみたまえ。絶対にできぬ。

われわれは和合僧なりと、心から叫ぶ団体である。幹部は結束してこれにあたっている。そして破るものも悪いが、これらのもののみだけでなく、破られたほうにもある。これはみなさ

意図的に削除されていると思われる戸田先生の発言が次の箇所になる。

「僧というとへんだと思うかもしれぬが、坊さんだけのことではないのです。わが学会は、和合して、広布へ、日蓮大聖人様の教えを、日蓮大聖人様の指導通りにやろうというのであるからこれを破ろうとするものは、かならず仏法の大きな罰をうける。もし破ろうとするものがあるならば、やってみたまえ。内から外からやってみたまえ。絶対にできぬ。われわれは和合僧なりと、心から叫ぶ団体である」（戸田城聖全集4巻、御観念文について、p. 121）

僧宝を日蓮大聖人と定義する（実質上日蓮大菩薩とみなす）行為は師弟違背であり、和合僧を破壊する行為である。そうした行為をやっておいて、堂々とその講義を、戸田先生の警告を無視してつぎはぎで引用することは何を意味しているのであろうか。そして、このような悪質な引用を行っておきながら、次のような綺麗ごとが述べられている。

「この厳粛なる仏勅の使命を教えてくださいました師の大思を、私は永久に忘れません。この威徳を、世界へ、未来へと宣揚しきっていくのが、人間の道です。弟子の本道です」

(勝利の經典御書 10, p. 42)

更に、この三宝定義の批判に対する言い逃れができるように、注解にこのような解説を載せている。

「末法の文底下種の三宝とは、「仏宝」＝日蓮大聖人、「法宝」＝南無妙法蓮華經の御本尊、「僧宝」＝日興上人である」（同書, p. 46-47)

だが戸田先生の講義に忠実ならば、この文底教義こそが主として言及されるべきものであり、文上にあらわれる仮の教えは副として扱わなければならない。戸田城聖全集 1 卷の講義「三宝」(p. 336-339)はその具体的な例といえよう。どう言い訳をしようが、戸田先生の教えに背いているのは明らかである。そしてこの言い訳のいやらしいところは、文底読みなどありません、それは宗門教学なので、と言い訳すれば、仏宝をインドの釈迦とし、僧宝を大聖人とみなす解釈が復活できるというカラクリが仕掛けられていることである。現在の創価学会の三宝は、一応は大聖人が仏宝になってはいるが、釈迦こそ根本仏という教えを、戸田先生の教えを全く知らない若い世代に浸透させ、十分に浸透したところで、池田先生の真の教えと称して、仏宝＝イ

ンドの釈迦、僧宝＝大聖人と創価学会（日興上人は排除）とすることが将来的に可能となる。仏法破壊、師弟破壊の画策と思われても仕方がないであろう。創価学会の現在の三宝は一応は次の通りである。

仏宝＝日蓮大聖人
法宝＝南無妙法蓮華經
僧法＝創価学会（日興上人を排除）

だが、御書の文底読みなどというのは宗門教學であり、そのような教えは御書にありません。という詭弁を設ければ、次の解釈が復活するのである。

仏宝＝インドの釈尊
法宝＝南無妙法蓮華經
僧法＝日蓮大聖人と創価学会

今までの議論をまとめておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その2

① 牧口・戸田先生を「御書の本当の拝し方を「身をもって」教えてくださったのは、牧口先生、戸田先生だけです」と賞賛する。

② 戸田講義から三か所、参考文献の提示をせず、都合の良い箇所を合成引用し、都合の悪い箇所を切り捨てる。以下が本書が無視した都合の悪い箇所といえよう。

戸田講義その1 文底読みをしないと御書解説は無意味なものになるという教え

戸田講義その2 文上の法華經を説いて罰を受けたという戸田先生の教訓

戸田講義その3 仏法を外から内から破壊を試みると罰を受けるという警告

③ 戸田先生が「重罪」とされた文上の三宝（身延派と同様）の定義を本文で説く。

仏宝＝インドの釈尊

法宝＝南無妙法蓮華經

僧法＝日蓮大聖人と創価学会

④ 批判をかわすためと思われるが、本来は本文で示すべき文底の三宝の定義を註解に載せておく（文底読みは宗門教学で、御書にありませんといえ、これを否定できる仕掛けである）

： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ：
： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ： ：

そしてこの「インドの釈迦＝仏宝」という定義は、勝利の経典御書に学ぶ11巻と14巻によって更に強化されるのである。14巻の方がより10巻と親和性が高いので、まずはこちらを先にとりあげよう。

その3：勝利の経典御書に学ぶ 14巻の諸問題

この教学書には次のようにある。

「釈尊の願いは、末法の一切衆生の重き病を治すことです。また、南無妙法蓮華經こそが、一闍浮提の大良薬です。そして、大聖人が末法の民衆を救うために立ちあがり、この大良薬を弘められてきた。これらが、すべてそろっているのだから、何も怖いものはないのだ!と呼びかけられているのです。信心とは「確信」最高の師匠とともに!これ以上に誇りある、偉大な妙法とともに!最高の師匠とともに!これ以上に誇りある、喜びと栄光の

人生の道はありません。これこそが創価学会の「師弟の道」なのです。」

(勝利の経典御書に学ぶ 14 巻, 高橋入道殿御返事, p. 78、大白蓮華 2013 年 1 月号)

文脈から、この御文「三事すでに相応しぬ一身いかでかたす からざるべき」(高橋入道殿御返事, 旧版御書, p. 1462)を このように解釈しているのは明白である。

仏：インドの釈尊

法：南無妙法蓮華経

僧：日蓮大聖人

さらにこの主張を補強するために、注釈で新田殿御書を引用し、次のように述べる。

「「新田殿御書」には「経は法華経・顕密第一の大法なり、 仏は釈迦仏・諸仏第一の上仏、行者は法華経の行者に相似たり、三事既に相応せり檀那の一願必ず成就せんか」と、「経」と「仏」と「法華経の行者」が相応すれば、それを支える檀那の願いも成就すると示されている。「仏経」と「行者」と「檀那」で三事を立てている御書もある(「問注得意抄」一七八頁)」

(勝利の経典 御書に学ぶ 14 巻, 高橋入道殿御返事, p. 84-85)

この講義は、仏宝を釈迦とし、僧宝を大聖人と定義する勝利の經典御書 10 巻の内容を補強する内容となっている。そしてこれに対する批判から逃れられることができるようにするためか、問注得意抄 も引用している。しかし全体の議論の流れから、三事の仏をインドの釈尊、僧を日蓮大聖人と定義することを主張しているのは明らかであり、極めて問題のある解釈である。

そしてこの講義も又、しれっと戸田先生の講義を参考文献を提示せずして引用しているが、これがとんでもない爆弾になるのである。まずは戸田先生の講義の引用箇所を示そう。

「また戸田先生は、こうも語られています。
「御本尊があるから大丈夫だ。御本尊を拝んでいるから、自分は大丈夫だ。この確信が胸の奥底から出できたら信心は一人前です」
「『いや、ああしなきゃダメ』『こうしなきゃダメ、どうなることか・・・』などと、そんな心配はいりません。私は御本尊を拝んでいるのだ。今朝も拝んだ。大丈夫です・・・今日から、こうなりなさい。幸せになるに決まっています」」」（勝利の經典御書に学ぶ 14 巻, 高橋入道殿御返事, p. 47)

一方で引用元の戸田先生の講義にはこうある。

「御本尊があるから大丈夫だ。御本尊を拝んでいるから、オレは大丈夫だ。この確信が胸の奥底から出できたら信心は一人前です。

「いや、ああしなききゃダメ」「こうしなききゃダメ、どうなることか・・・」などと、そんな心配はいりません。私は御本尊様を拝んでいるのだ。今朝も拝んだ。いまでも拝むのだ、わが人生は大丈夫だという確信がつけば、大丈夫です。そこまでいっていますか。怪しい人ばかりいるのではないか(笑い)。きょうから、こうなりなさい。幸せになるに決まっています。」(戸田城聖全集7巻, 聖人知三世事講義, p. 618)

多少文章が変わっているが、これは引用時による文章調整であり、問題ないものとみなせよう。問題はここではない。この講義は聖人知三世事講義だが、この講義には実は三宝に関して述べられているのである。それが次の箇所である。

「寿量品で釈迦如来は初めて宣言する。「私はインドで仏になったのではない。五百塵点劫という大昔に仏になったのだ」という。これを、仏の第一番成道という。ここが問題なのです。これから文底へはいつてくるのですけれども、身延あたりは、文底へはいれない

ものだから、ここで迷うのです。ですから、身延あたりの三宝の立て方は、五百塵点劫第一番成道の釈尊を仏の宝にする。南無妙法蓮華經を法の宝にする。大聖人様を僧の宝とする。このように、食い違ってくる。だから誤って、釈迦像をまつるのです」(戸田城聖全集 7 卷, 聖人知三世事講義, p. 609)

即ち、勝利の經典御書に学ぶ 10 卷、及び 14 卷に示されたような、仏宝＝インドの釈尊・法宝＝南無妙法蓮華經・僧法＝日蓮大聖人と創価学会、と解釈することは、「身延あたりの教え」、ようするに五老僧の教えとなるのである。三宝の定義だけではない。五百塵点劫のさらにその先にある「文底」の世界に入れないのが五老僧の教義という戸田先生の講義は、教学要綱、及びその周辺の教義書を直撃しているのである。

教学要綱にはこうある。

「釈尊の本来の真実の境地(本地)は、無限の過去から無限の未来にまで常に存在する『永遠の仏』であることが明かされている」(教学要綱, p. 28)

これは五百塵点劫を有始ではなく無始と解釈する五老僧と同様の解釈から来ているものであり、邪義である。御書にはこうある。

「寿量品に我は過去五百塵点劫のそのかみの
仏なりと説き給う」（法蓮抄, 旧版御書, p.
1045)

そのかみ（当初）とは、古語で「それ以前」
を意味する。つまり大聖人は五百塵点劫を、
無限に近い有限と考えておられたことは確実
である。しかし新版・法華經自我偈講義では、
こうした事実を無視し、旧版を何の説明もな
く改竄し、五百塵点劫を無始とみなすように
仕向けているのである。詳しくは、私の著書
「『釈尊が舵を取る創価の船？』『創価学会教
学要綱』を中心にした 異様な書物群」, p.
188-189 を参照していただきたい。

なお先ほどの講義で戸田先生は、「だから
（身延等は）誤って、釈迦像をまつるので
す」と述べられていたが、実は教学要綱は密
かに釈迦の仏像（一尊四士）を祀ることを許
容しているのである。それが次の文になる。

「（日興上人は）「一尊四士」像の造立は辛
うじて容認された」
（教学要綱, p. 82）

かつて池田先生は、美作房御返事を引用され
て「師を捨ててはならないという大聖人の法

門を奉じながら、大聖人御入滅後は、たちまち本師である末法の御本仏を捨て去るなどということは、世間から見でさえ反論の余地なき、卑劣なる自語相違の所業ではないかと、鋭く五老僧の本質を破折されているわけである」(広布と人生を語る 10 巻, p. 79)

と厳しく批判されていた。それではこれらの書物の自語相違は一体なんなのであろうか。いままでの議論のまとめをしておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その3

① 三事(三宝とほぼ同じ意味)を次のように解釈する。

仏：インドの釈尊
法：南無妙法蓮華經
僧：日蓮大聖人

② 戸田講義(戸田城聖全集7巻, 聖人知三世事講義)を参考文献を提示せずに引用する。

③ しかし同講義(p, 609)にはこうある

身延あたりの三宝の立て方は
釈尊を仏の宝
南無妙法蓮華經を法の宝
大聖人様を僧の宝

釈尊を仏の宝、大聖人様を僧の宝と立てるのは、五百塵点劫以前を知らない身延あたりの邪義という戸田講義の重要箇所を完全無視する

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

池田先生が表にでなくなっからしばらくして、戸田先生の講義に密かに弓を引く講義が大量に現れるのは何を意味しているのであろうか。次の「釈迦が舵を取る釈迦の船」などというのはその異常な講義の代表といえるであろう。これからそれを議論する。

その4：勝利の經典御書に学ぶ 11巻の諸問題

この教学書でも戸田先生の講義が引用されているが、多くの問題が指摘できる。まずはこれを取り上げる。タイトルが「『仏の使い』の誉れも高く 堂々と語りゆけ」で、次のように戸田先生の講義が引用される。

「われらこそは、知来につかわされた尊い身分であると確信すべきであります。自分をいやしんではなりません」
草創の学会の機関紙「価値創造」に綴られた恩師・戸田先生のご指導です。続けて先生は、学会員の使命について、次のように宣言されました。

「『仏の使い』であります。如来につかわされた身であります。大聖人の分身であります。凡夫のすがたこそしておれ、われら学会員の身分こそ、最尊、最高ではありませんか」

(勝利の經典御書に学ぶ 11巻, 椎地四郎殿御書, p. 88)

ここでは一応、学会の機関紙「価値創造」と出典元が提示されるが、この引用では「仏の

使い」「大聖人の使い」（戸田城聖全集 1 巻、如来の事を行ぜよ, p. 304)が省かれているのである。即ち、仏或いは如来とは、原本では日蓮大聖人なのは明白だが、勝利の経典御書 11 巻では「大聖人の使い」という言葉が引用されず、誰のことを指しているのかを曖昧にしているのである。そして次の信じられないような御書解釈に続くのである。

「仏の根本の願いを実現する法華経という船。その舵を担うのが教主釈尊であり、綱手を引くのが多宝如来。中道一実の帆柱をしっかりと立て一念三千の帆を大きく張り、四菩薩が漕ぎ手となり万人成仏へ向かって前進する——なんと壮大な、偉大な船でしょうか。」
（中略）「歴史を創るは この船たしか」
（勝利の経典御書に学ぶ 11, p. 119-120、大白蓮華 2012 年 2 月）

この御書には直弟子の古写本がなく、大聖人滅後 150 年程度が経過した時点での写本しか残されていない。佐渡以降の説もあるようだが、伝統的には佐渡以前に執筆されたとされる。従って文字通り釈迦を妙法蓮華経の担い手とするのは文上の法華経の世界観であり、先ほども述べたように、意味のない解釈である。それを堂々としているのである。現在では船長が船の舵を取ることはほぼ

ないようだが、大聖人の鎌倉時代に船の舵をとっていたのは他ならぬ船長である。従って、**創価学会を船頭するのはインドの釈迦という恐るべき解釈になる**のである。当然この解釈ならば、仏宝＝インドの釈尊と解釈する以外の道はなくなる。

そしてこの講義は、戸田先生の講義を次のように引用して終わっている。

「全人類を仏の境涯、すなわち、最高の人格価値の顕現においたなら、世界に戦争もなければ飢餓もありませぬ。疾病もなければ、貧困もありませぬ。全人類を仏にする、全人類の人格を最高価値のものとする。これが「如来の事」を行ずることであります」

御本仏に連なるこの崇高な精神闘争を繰り広げている戸田先生に出会って、今年(二〇一二年)で六十五星霜。一貫して私は、戦ってきました」(中略)「わが学会こそが、人類の「希望の大船」なりと確信して」(勝利の経典御書に学ぶ 11, 椎地四郎殿御書, p. 121-122)

だが、引用された戸田先生の講義の原本には、引用箇所ของすぐ前にこうあるのである。

「大聖人が開目抄に、「日蓮が法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いただきぬべし」(御書全集 202 頁)と仰せられた深意は、一切衆生をして仏の境涯をえさせようと、一生をかけられた大聖人のご心中であります。これこそ目の前に見た「如来の事」であります。学会のみなさまよ、われわれも「如来の事」を行わなくてはなりません。」(戸田城聖全集 1 卷, 如来の事を行ぜよ, p. 306)

人本尊を説いた開目抄を引用されていることから、文脈から如来とは大聖人のことは明らかである。又、大船とは大聖人の大船でなければならない。

「我(日蓮)日本の大船とならむ」(開目抄, 旧版御書, p. 232)

しかし今述べた戸田先生の講義の箇所が削除されて引用されたならば、如来とはインドの釈迦としか解釈できなくなってしまう。こうした教えを若い会員に教え込みたいのであろうか。

なお、同書勝利の經典御書に学ぶ 11 卷、日女御前御返事, p. 14 では次のように戸田先生の講義が述べられるのだが――

「戸田先生は、妙法に生きる人々の織りなす生命本来の久遠元初の世界について、「晴れぼれした世界で、自由自在に何不自由なく、清く、楽しく遊んでおり、そのときの人々も、みなうるわしき同心の人々であった」と示してくださったことがあります」

この講義の引用元である戸田先生の講義にはこうある。

「大聖人は久遠元初の御本仏でいらせられ、われらも、大聖人より日蓮等の類い、または日蓮が弟子檀那とおおせをこうむった以上、久遠元初 of その当初、御本仏の眷属として、自由自在な境地で、九界の衆生と天然自然のまま、つくろわず、働かさず、ときには怒り、ときには笑い、心のままに、楽しく、清くふるまいつつ生活していたものである」（戸田城聖全集 1 巻、仏土, p. 341）

戸田先生がいわれる「晴れぼれした世界」とは、日蓮大聖人が中心となられる世界であり、釈迦が中心の世界などではないのは確実である。この講義から「釈迦が先導する創価の船」が出てくる理由はないのである。これこそ師弟破壊の典型的な例ではないか。戸田先生を密かに軽視し、読者をミスリードさせる不適切な引用と断じざるを得ない。この講義のまとめをしておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その4

- ① 戸田講義「如来の使い」という言葉を切り取り、如来＝釈迦と解釈できるようにミスリード
- ② 釈迦が舵を取り（船長）、大聖人がその船の漕ぎ手（奴隷）という主従関係（文上の法華経）を説く
- ③ 獄中での戸田先生の悟りである「久遠元初の世界」を、大聖人中心ではなく釈迦中心の世界と読者をミスリードする引用をする。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～
：：～

そして、「インドの釈尊が舵を取る創価の大船」という概念は、教学書「我らは地涌の菩薩なり」で更に強化されるのである。その問題点をこれから述べよう。

その5：教学書「我らは地涌の菩薩なり」の諸問題

タイトルが「釈尊が舵を取る妙法蓮華經の船」で、本文が次のように続く。

「大聖人は、「妙法蓮華經の船にあらずんば、かなうべからず」と仰せです。なぜ「妙法の船」でなければならないのか。一体、それはどんな船なのでしょう。（中略）仏の船は、中道の帆柱に、万人成仏を可能にする希望と変革の法門である「一念三千」の帆を揚げ、「諸法実相」という真理を追い風として受けて、妙法を信受する一切衆生を乗せて進むのです。それだけではありません。釈尊が自ら舵を握り、多宝如来が綱を取り、上行菩薩等の地涌の四菩薩が呼吸を合わせて漕いできると言うのです。これが「妙法蓮華經の船」です。」

（我らは地涌の菩薩なり、生死の大海を渡る船、p. 63-64、大白蓮華 2022 年 8 月号）

この解釈は、御義口伝を無視することで成立している御書解釈である。

「御義口伝に云わく、この「妙法蓮華經」は釈尊の妙法にはあらざるなり。」（御義口伝、新版 御書, p. 1072）

又、開目抄の有名な御文も無視している。

「我（日蓮）日本の大船とならむ」（開目抄、旧版御書, p. 232）

なお、「我らは地涌の菩薩なり」における講義では次のような戸田先生の回顧録が登場する。

「私には、大切にしている一枚の紙があります。戸田先生からの講義の修了証書です。今でもそれを手にした時の、恩師の慈愛の眼差しと、確信の声が鮮やかに蘇ります。この証書こそ、恩師から日蓮仏法という「世界平和」と、「永遠の幸福」の最極の哲理を授かった証となるものだ、私は、大きな誇りと感謝をもって拝受しました」（我らは地涌の菩薩なり、生死の大海を渡る船, p. 56）

池田先生が戸田先生から講義の修了証書を受けとった時に何を学ばれたか調べてみた。恐らくはこのことではないかと思われる。

「光栄にも私は、この十大部講義の修了証書の第一号を、特別にいただいたのである」
(広布と人生を語る 3 巻, p. 284)

それではこの時、池田先生は戸田先生から何を学ばれたのか。釈迦が創価学会という大船の船頭を取っているという類の教えなのだろうか。次の箇所がその答えの一部である。

「(観心本尊抄の)「夫れ一心」の”一心”とは久遠元初の自受用身の一念の心法であり、御本尊の中央におしたための南無妙法蓮華経がその”一心”であるとの深義を(戸田先生は)述べられた」(広布と人生を語る 3 巻, p. 285-286)

ようするに、南無妙法蓮華経即久遠元初の自受用身如来という人法一箇の教えを戸田先生から授かったというのが歴史的な事実であり、釈迦の船などではないのは確実である。筆者は30年以上信心をしてきたものだが、「沈みゆく釈迦のオンボロ船」に乗ったことは一度もないし、今後も乗るつもりは毛頭ないのである。そしていつから南無妙法蓮華経即日蓮大聖人という教えが排除されたのであろうか。現在の創価学会に普及している单法本尊論のさきがけは、勝利の經典御書に学ぶ8巻の講義だと思われる。その内容をこれから検証するが、その前にまとめを述べておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その5

① 釈迦が舵を取り（船長）、大聖人がその船の漕ぎ手（奴隷）という主従関係（文上の法華經）を説く

② 戸田先生の講義に言及しつつ、そこで教わったと推測される南無妙法蓮華經即日蓮大聖人という人法一箇の教えを無視する

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

その6：勝利の經典御書に学ぶ 8巻の諸問題

この書物には次のような問題ある講義が登場

する。

「重ねていうなら、妙法蓮華經は全衆生の仏性を正しく完璧に言い表した普遍的にして完全なる名前であるがゆえに、題目という、ただ一つの音声で、いかなる衆生の仏性をも呼び現す力を持っているのです。他の名号のように、一仏・一菩薩・一聖人・一善神の名前ではありません。すべての仏を仏たらしめた仏種の名であり、あらゆる菩薩が求め修行した根本法の名であり、いかなる衆生にも具わる尊極の生命境涯の名です」(勝利の經典御書に学ぶ8巻, 法華初心成仏抄, p. 92、大白蓮華 2011年5月号)

これは戸田先生の教えと真っ向から対立するものである。

「南無妙法蓮華經とは、法華經の行者の宝号でありまして、日蓮大聖人御自身の御生命であります。されば南無妙法蓮華經とはなにかといわれたならば、末法御本仏の御名前であると申してさしつかえありません。つきつめていえば、日蓮大聖人の御命と断じてさしつかえないものであります。」
(戸田城聖全集5巻, 妙法蓮華經について, p. 271)

次の主張は、あたかも今までの創価学会の教

えと何ら違いがないように見えるが、実は似せているだけで、その概念は全く異なるものである。

「最初に、大聖人は「我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて」と仰せです。唱題は、御本尊への信心があつてこそ、成仏の修行になります。大聖人は、御自身の己心に顕現した妙法蓮華經を御本尊として御図顕してくださいました。」

(勝利の經典御書に学ぶ 8 卷, 法華初心成仏抄, p. 92、大白蓮華 2011 年 5 月号)

今までの創価学会は、南無妙法蓮華經即日蓮大聖人であり、この南無妙法蓮華經の御本尊に祈ることで、自分自身の仏界が日蓮大聖人の仏界に感応し、それによって周りの環境を変えていくというものであった。ところが 2010 年 5 月以降の創価学会の教学は、南無妙法蓮華經と日蓮大聖人が切り離されており、大聖人が自分自身の生命に内在する法を覚地し、それを取り出して本尊とした、というものである。このように解釈することで、有名な御書「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」(經王殿御返事, 旧版御書, p. 1124)も全く違う解釈が可能となり、古い教学を持つ信者には、何一つ教学を変え

ていませんよとアピールしつつ、新しい信者には、人間や宇宙生命に内在する法という、人間に内在しつつも人間を超越し、宇宙を支配する神の如き存在に祈ることで、自分の仏界を躍動させる（大聖人の御生命に感応することではない）という全く新しい新興宗教の教えを埋めこもうとしているのである。以下がその教義の説明といえよう。

「私たちが御本尊を拝していくのも、わが胸中の本尊を湧現させ、「己心の妙法蓮華經」を躍動させるためです。この一点を忘れると、自分からかけ離れた絶対者に”おすがり”する信仰になってしまいます」
（勝利の經典御書に学ぶ8巻, 法華初心成仏抄, p. 98）

特に以下の男子部教学室なる連中のグロテスクな教義は、全く新しい新興宗教としての教義の特徴を良く表している。

釈尊も日蓮大聖人も『拝む対象』ではない。氏は『本仏』と『本尊』の概念を混同しているといえる」（創価男子部教学室）

<https://www.sokayouthmedia.jp/answer/2825023.html>
)

なおここで、宮田教授の極めて興味深い論文

があるので、それを引用しておこう。
宗教学会発言へのQ&A(2016.10.7up)
<https://miya33x.littlestar.jp/qanda-shukyogakkai.html>

「ここでもう一つの誤解について説明すれば、
**久遠実成釈尊本仏論を採用したからといって、
久遠実成釈尊本尊論を採用するわけではない**
ということです。現在の日蓮宗の本尊論は久
遠実成釈尊を本尊とし、その表現形態として、
一尊四土と曼荼羅との異なった表現があるとい
う見解ですが、(中略) **一尊四土と曼荼羅
の両方が本尊の形態であるという現在の見解
に至っていますが、曼荼羅は教主久遠実成釈
尊の悟りの世界を表現したものという見解は
維持しています。私は現在準備中の論文に
おいて、『観心本尊抄』『報恩抄』を根拠
に、「一尊四土」本尊論を主張することは、
テキストの不十分な理解による結論である
ということを論証し、大聖人の本尊論は、
日興上人が継承した曼荼羅本尊論であつた
という結論を出そうとしています。だから
本仏が釈尊であっても、「一尊四土」の久
遠実成釈尊を本尊とするのではなく、あく
までも曼荼羅を本尊とするという創価学会
の立場に変更が必要であるとは考えません。**
」 引用終わり

この論文の問題点は次の二か所である。

「久遠実成釈尊本仏論を採用したからといって、久遠実成釈尊本尊論を採用するわけではないということです」或いは「本仏が釈尊であっても、「一尊四土」の久遠実成釈尊を本尊とするのではなく、あくまでも曼荼羅を本尊とする」

この文脈から導き出される定義は

本仏＝拝む対象ではない
本尊＝拝む対象

となる。このような日本語の定義は私は聞いたことがない。これは身延の大崎ルールを用いて、諸法実相抄の御文「妙法蓮華經こそ本仏」（旧版御書, p. 1358）の御文を無視する議論であり、池田先生思想にはどこにもない。一方で、同宮田論文には「現在の文献学的考察では『三大秘法抄』『御義口伝』によって大聖人個人の思想を議論することはルール違反です」とあり、共通の思想が指摘できる。

宮田教授のこの論文以外に果たしてこのような定義が存在するのであろうか。「本仏」という日本語の定義は weblio 辞書によれば次のようになる。

<https://www.webl.io.jp/>

ほん - ぶつ【本仏】

読み方:ほんぶつ

仏語。

- 1 永遠の昔から悟りを開いている仏。本門の仏。
- 2 一切の仏のうち、根本の仏。真宗では、阿弥陀仏。
- 3 本尊のこと。

そして創価学会の「御本仏」の定義は次のようになる。

「日蓮正宗の教学では、「御本仏」という表現には、日蓮大聖人が根本の仏であり、久遠実成の釈尊も、その仮現（垂迹）であるという含意があるが、創価学会では、「末法という現在において現実に人々を救う教えを説いた仏」という意味で、大聖人を「末法の御本仏」と尊称する」（教学要綱, p. 187）

又、教学要綱は「寿量の仏」を、読者には何ら説明もなく大聖人から釈迦に置き換えている（教学要綱, p. 78）ので、拝む対象でもなければ、永遠の過去から悟りを開いている仏でもなく、根本の仏でもない存在が創価学会の「御本仏」の定義のようである。なんちゃって御本仏。名目だけ御本仏であり、日蓮大聖人を利用して悪しく敬う行為そのものの

ではないか。このような怪しい定義をする宗教を私は他に一つも知らないのである。

そして、もう一つの宮田論文の問題点は次の箇所である。

「一尊四士と曼荼羅の両方が本尊の形態であるという現在の見解に至っています」

一方教学要綱にはこうある。

「日興上人は、本門の教主釈尊であることを示す四菩薩を脇士とする、いわゆる「一尊四士」像の造立は辛うじて容認されたものの、大聖人の真意は文字曼荼羅の御本尊にあり、それを本尊として受持すべきであるとされた」（教学要綱, p. 82）

一応創価学会は法の本尊（文字曼荼羅）が中心であるが、仏の本尊（一尊四士）を密かに認める文を入れており、宮田思想に極めて近いものがある。これは果たして偶然の一致なのであろうか。この思想の問題点は次の通りである—「（日興上人は）「一尊四士」像の造立は辛うじて容認された」、即ち四菩薩を伴う仏像は謗法ではないことになる。かつて身延の坊主と一緒に釈迦の仏像の前で勤行をした大石寺法主日正を池田先生は次のように批判された。

「誘法と同座してはならない。与同罪になることを恐れるべきである

大正十一年(一九二二年)十月、日蓮宗(身延派)、顕本法華宗など日蓮宗各派の管長らと同座したうえ、身延の管長の導師で寿量品の読経、唱題をした法主がいた(日正法主)。しかも、それは、他宗派とともに、大聖人に「大師号」を宣下するよう政府に請願し、「立正大師」号を受けたことの記念行事であった。宗祖と正反対の権力迎合の姿である。その後、身延に大聖人の廟所(墓所)があるとしたためた「念書」を、政府に提出した高僧さえいた」(日開法主、日顕の父御)(池田大作全集 81, スピーチ, p. 320)

しかし、日興上人が「一尊四土」像の造立は辛うじて容認されたのであれば、池田先生のこのスピーチは誤りであり、身延僧と一緒に釈迦の仏像の前で勤行した日正法主は正しい行為を行ったことになる。なぜなら四菩薩を従えた釈迦の仏像は謗法ではないのだから。最近創価学会教学部は、大聖人を神格化するのは誤りという根拠のない主張のもと、人法一箇という言葉が教義書から削除しまくっているが、それならば人法一箇を説いた日寛上人は謗法法主であり、現在の御本尊は邪義を唱えた謗法法主により書写されたものなのか？池田先生が最晩年まで祈られた御本尊は

謗法法主により書写されたものであるならば、本当に驚きである。今すぐ取り換える必要があると思うのだが、彼らはなぜそれを行わないのか？教義的には、釈迦の仏像を造立した大石寺17世法主日精や、身延僧と一緒に釈迦の仏像の前で勤行をした57世法主日正（或いは日顕の父で身延擁護の日開も同様だろう）の方が今の学会教学に近いのではないか。彼らは将来的に御本尊を日寛上人書写のものから、日精か日正、或いは日開のものに取り換えた方が良いと思うのだが、如何なものであろうか。

なお、私の著書「釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした異様な書物群」で既に論じたことなので、ここでは詳しく説明をしないが、勝利の経典御書に学ぶ8巻では、「有供養者福過十号」の意味を曲解させ、釈迦の使い日蓮という身延と同様の教義を密かに構築しようとしているのである。それが次の箇所である。

「如来の使い」は、悪世に生きる衆生から見れば、全く如来と等しい尊貴な「人」となります。現実に法を体現し、弘通している「法華経の行者」こそが、悪世にあって最も大切な存在である。それは、その「人」がいなければ、末法の衆生は永遠に闇に閉ざされたままになってしまうからです。（勝利の経典御

書に学ぶ 8 卷, 上野殿御返事 (土餅供養御書), p. 15、大白蓮華 2011 年 3 月号

そして、勝利の經典御書に学ぶ 8 卷ではあの戸田先生の次の講義が再び引用されている—

「戸田先生は言われました。「あの晴れやかな世界に住んだわれわれが、いままた、この娑婆世界にそろって涌出したのである (中略) たがいに久遠を忘れてしまっていることこそ、悲しい、哀れなきわみではあるまいか」 私たちは久遠以来の異体同心の同志です。元初の生命を呼びさまし、久遠の 団結第一で「弟子の勝利劇」を誓いを果たす地涌のスクラムで前進していきましょう」

(勝利の經典御書に学ぶ 8 卷, 法華初心成仏抄, p. 71)

この引用元は、戸田城聖全集 1 卷, 仏土, p. 342 だが、引用されていない箇所を読むと、「あの晴れやかな世界」とはどのようなものであるかが判明する。既に前に引用したが、もう一度ここで引用しよう。

「大聖人は久遠元初の御本仏でいらせられ、われらも、大聖人より日蓮等の類い、または日蓮が弟子檀那とおおせをこうむった以上、久遠元初のその当初、御本仏の眷属として、自由自在な境地で、九界の衆生と天然自然の

まま、つくろわず、働かさず、ときには怒り、ときには笑い、心のままに、楽しく、清くふるまいつつ生活していたものである」（戸田城聖全集 1 巻、仏土, p. 341）

釈迦の使いなどとして末法に出現したなどと戸田先生は説いていないのである。この戸田先生の講義は、先ほど言及したように勝利の経典御書に学ぶ 11 巻でも引用されているので、更に悪質性が高いといわざるをえない。要するにこの本の筆者は、戸田先生の獄中体験をなんら信じていないと思われるでもない引用である。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その 6

① 戸田講義「南無妙法蓮華経とはなにかといわれたならば、末法御本仏の御名前であると申してさしつかえありません」と真逆の教え「（南無妙法蓮華経は）他の名号のように、一仏・一菩薩・一聖人・一善神の名前ではありません」を展開する。

「戸田先生は、「日蓮大聖人の御生命が南無妙法蓮華經でありますから、弟子われわれの生命も同じく南無妙法蓮華經であります」と語り、こう断言されていきました。「われわれが信心すれば、日蓮大聖人様の所有の根本の力が、われわれの生命に感応して湧いてくるのです。われわれもやはり、ありのままの永遠真如の自分にかわるのです」と。（勝利の經典御書に学ぶ 11 卷, 日女御前御返事, p. 27、大白 蓮華 2011 年 12 月）

戸田先生の発言を「と語り、こう断言されていきました」という言葉で結びつけ、読者には同じ講義であると認識させているが、実はこれらは全く違う講義を合成させたものである。しかも文献の提示がないので、読者には合成引用であることがわからない仕組みになっている。次が私がみつけた文献の引用元である。

「南無妙法蓮華經とは、法華經の行者の宝号でありまして、日蓮大聖人御自身の御生命であります。されば南無妙法蓮華經とはなにかといわれたならば、末法御本仏の御名前であると申してさしつかえありません。つきつめていえば、日蓮大聖人の御命と断じてさしつかえないものであります。日蓮大聖人の御

生命が南無妙法蓮華經でありますから、弟子たるわれわれの生命も同じく南無妙法蓮華經でありましょう」（戸田城聖全集 5 卷, 妙法蓮華經について, p. 271)

「別な立場からこれを拝せば、無作三身如来すなわち根本の仏様であり、永遠に不変の仏の御名をいいます。末法には いって は 日蓮大聖人様であり、日蓮大聖人様御自身所有の、久遠元初のありのままの生命と力とを、大御本尊様にしたためられたのが、法本尊即日蓮大聖人様、人本尊です。すなわち人法一箇であります。われわれが信心すれば、日蓮大聖人様の所有の根本の力が、われわれの生命に感応して湧いてくるのです。われわれもやはり、ありのままの永遠真如の自分にかわるのです」(戸田城聖全集 2 卷, 南無妙法蓮華經とは, p. 11)」引用終わり

ところがでる。更に詳しく調べてみたならば、なんとこれは池田先生のスピーチから合成引用したものであることが判明したのである。その原型となるスピーチを、分かりやすいのでスクショも用いて引用しよう。引用元は

「池田大作全集 80 卷, 全国青年部幹部会、新宿・港合同総, p. 15」であることは明白である。

学会の使命は、ますます世界の命運を決するものになっている。後継の諸君、どうか未来を頼みます！（拍手）

エマーソン「死んだ形式は奴隷のためにある」

ところで、ハーバード大学での講演では、アメリカ・ルネサンスのリーダーであった哲学者エマーソン（一八〇三年―一八二九年）の言葉を紹介した。

「私のうちに神を示すものが、私を力づける。私の外に神を示すものは、私を、いばや縮のよう
に、小さなものとする」（『エマーソン選集』1、斎藤光訳、日本教文社）と。

人間を根本としない形式主義、權威主義は、自分を醜く、卑小なものにしてしまう。

私どもの立場でいえば、御本尊を信する自身の中に「日蓮大聖人」の御生命がわいてくる。自身の生命にある尊極の「仏界」、己心の「本尊」を示すものが、「自分を力づけて」くれる。それが妙法であり、信心である。

日寛上人は「観心本尊抄文段」の中で「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」（『文段集五四八』）と述べられ、私どもが御本尊を信受し唱題する義は、大聖人の御境界を顕された一念三千の御本尊を、わが身に顕すことであることを示

されている。この法理には、何の差別もない。

また戸田先生は、次のように語っておられる。

「日蓮大聖人の御生命が南無妙法蓮華經でありますから、弟子たるわれわれの生命も同じく南無妙法蓮華經であります。ですから『日女御前御返事』には、『此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我々等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり』(御書二四四頁) のようにおおせられているのであります」(『戸田戒嚴全集』第五巻)

「われわれが信心すれば、日蓮大聖人様の所有の根本の力が、われわれの生命に感応して湧いてくるのです。われわれもやはり、ありのままの永遠真如の自分にかわるのです」(同第二巻)

エマーソンについては、コックス教授も、お手紙の中で、こう書いておられる。

「エマーソンは、ハーバード大学神学部での有名な講演や、そのほかでも訴えています。『人間は外発的な權威、あるいは伝統のみで、漫然と宗教を受け入れるべきではない』と主張しました。精神的な方向づけは、すべての人間に不可欠のものではありません。しかし、人間はみずからの体験により、それを検証し、自己のものとしなければなりません」と。

すなわち、宗教とは、權威や伝統、形式といった、自分の外にあるものからのみ、あたえられたものであってはならない。つねに自身の「体験」のうえから、「信じられるのか」「正しいのか」

この引用で何が起きているか説明しておこう。
このスピーチは、次の四つの議論から成り
立っているといっていよう。

①「御本尊を信ずる自身の中に「日蓮大聖人」の御生命がわいてくる。自身の生命にある尊極の「仏界」、己心の「本尊」を示すものが、「自分を力づけて」くれる。それが妙法であり、信心である」

私見：「日蓮大聖人」の御生命・己心の「本尊」とは人本尊、「妙法であり」とは法本尊を簡潔に述べたものだと考えられる。そしてこれらの概念を、日寛上人と戸田先生の講義を用いてこれから補強していくのである。

②「日寛上人は「観心本尊抄文段」の中で「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、**我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり**」(文段集五四八頁)と述べられ、私どもが御本尊を信受し唱題する義は、大聖人の御境界を顕された一念三千の御本尊を、わが身に顕すことであるとを示されている。この法理には、何の差別もない」

私見：「我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人」ようするに人本尊のことを日寛上人は述べているのである。

③「また戸田先生は、次のように語っておられる。「日蓮大聖人の御生命が南無妙法蓮華經でありますから、弟子たるわれわれの生命も同じく南無妙法蓮華經でありましょう。ですから『日女御前御返事』には、『此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり』(御書 一二四四頁)。このようにおおせられているのであります」(『戸田城聖全集』第五卷)

私見：大聖人の生命が南無妙法蓮華經であるなら、我らの生命も南無妙法蓮華經である、という法本尊に関する戸田先生の言及である。

④「われわれが信心すれば、日蓮大聖人様の所有の根本の力が、われわれの生命に感応して湧いてくるのです。われわれもやはり、ありのままの永遠真如の自分にかわるのです」(同第二卷)

私見：本尊とは「蓮祖聖人であると同時に南無妙法蓮華經」それこそが戸田先生の言う「日蓮大聖人様の所有の根本の力」ということができる。即ち人法一箇である。事実、この戸田先生の講義の少し手前にはこのようにある。

「大御本尊様にしたためられたのが、法本尊即日蓮大聖人様、人本尊です。すなわち人法一箇であります」(戸田城聖全集2巻, 南無妙法蓮華経とは, p. 11)

以上の分析から、全国青年部幹部会における池田先生のスピーチは、戸田先生の講義に忠実であり、「日蓮大聖人様の所有の根本の力」とは人法一箇の御本尊であることがわかる構図になっており。参考文献の引用元も提示されており、何の問題もない内容であることがわかる。一方でこのスピーチから、勝利の経典御書11巻の引用方法の悪質さが更に明らかになるのである。次のような方法で合成引用を行っているのである。

①池田先生のスピーチの参考文献を提示しない。

② 池田先生の人本尊に関する発言—「「日蓮大聖人」の御生命・己心の「本尊」とは人本尊」、或いは日寛上人の人本尊に関する発言—「我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」を消去する。

③ 引用元である池田先生のスピーチを記載しない。引用元では明記されていた戸田先生の文献の記述も削除する。

④ 戸田先生の二つの講義を、邪魔な『日女御前御返事』の箇所を削除して繋げ合わせ、あたかも一つの講義であったかのようにみせかける。

⑤ 「日蓮大聖人様の所有の根本の力」を、人と法が分離した単法本尊のように見せかけてミスリードさせ、戸田先生の真意（人法一箇）を隠す。

⑥ 釈迦は自分の生命に内在する法（南無妙法蓮華經）を解き明かしたという説明を戸田先生の引用の前に述べ、釈迦があたかも中心者のようにみせかける。以下がその箇所である。

「日蓮仏法は、この固定観念を打ち破ります。今ここで生きている凡夫の身に即して、永遠にして究極の法が顕れるという生命の真実を見るのです。そもそも「ブッダ」とは「目覚めた人」という意味でした。何に目覚めたのでしょうか。それは、自身が本当に依りどころとすべきもの、すなわち法と、真実の自己です」（勝利の經典御書に学ぶ 11 卷, p. 25)

⑦「晴れ晴れした世界」（勝利の経典御書に学ぶ11巻, p. 14）と、戸田先生の発言を引用しつつ、その引用元を明示せず、肝心な箇所「大聖人は久遠元初の御本仏（略）久遠元初のその当初、（我らは）御本仏の眷属として、自由自在な境地で、九界の衆生と天然自然のまま」云々（戸田城聖全集1巻, 仏土, p. 341）という箇所を読者に見せないようにする。

これがこの引用の裏にある隠された構造である。悪質さという点では先ほど議論した勝利の経典御書に学ぶ10巻のそれと双璧である。仮に池田先生のスピーチは参照していないと強弁したところで、二つの異なる戸田講義を繋ぎ合わせたことは確実であり、戸田先生の結論「日蓮大聖人様の所有の根本の力」をミスリードさせたという批判から逃れることは不可能である。まとめておこう

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その7

① 池田先生のスピーチを参考文献の提示なく引用する

② 池田先生のスピーチ内にある、池田先生自身の発言、日寛上人の文段 戸田先生の二つの講義の中から、「人本尊」を説いた池田先生の発言と日寛上人の文段を削除。

③ 二つの戸田講義を、一部を削除してくり抜き、繋ぎ合わせて一つの講義のようにみせかける

④ これらのつぎはぎ引用により、戸田先生の「日蓮大聖人様の所有の根本の力」の意味を、人法一箇から生み出される力から、法のみによって生み出される力と読者に思わせるようミスリードさせる

⑤ 戸田先生の獄中の悟り、久遠元初の「晴れ晴れした世界」を釈迦中心の世界にミスリード

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

そして、この類の「インドの釈尊」を教団の中心に祀り上げるための講義が、信者にはな

んら説明もなく執拗に繰り返されていくのである。その実態をこれから明らかにしよう。

その８：勝利の經典御書に学ぶ ９巻の諸問題

勝利の經典御書に学ぶ９巻には、密かにインドの釈迦を南無妙法蓮華經を覺地した根本仏にしようとする目的を持ったものと思えない講義が登場する。それが以下である。

「大聖人は、仏とは、黃帝・扇鵠や持水・者婆など、中国やインドの伝説的な名医よりもはるかに偉大な医師であると述べられています。ここで仏を医師に警えられているのは、仏が「不死の薬」を説いているからです（中略）釈尊が菩提樹の下で覺りを得た後、最初の説法で、かつての修行時代の五人の仲間に語った第一声は何であったか。ふしそれは、「不死は得られた」という言葉でした。（中略）この「不死の薬」である南無妙法蓮華經を信じて唱える。それがこの良薬」を服することです」（勝利の經典御書に学ぶ９巻、妙心尼御前御返事, p. 91-93)

文脈から、仏とは釈迦以外にありえず、釈迦を偉大な薬師に譬え、その釈迦が「不死の薬」南無妙法蓮華經を悟り、それを日蓮大聖人が配っているという、釈迦中心の世界観、日蓮大菩薩の世界観になるような議論を展開している。しかし戸田先生はこう厳しく指導されている。

「譬如良医をインドの釈迦と読んではならぬ」（戸田城聖全集 1 巻, 寿量品について, p. 94)

又、こうもある。

「「良医」とは、天台家によれば、単に如来と訳すのであるが、それも釈迦を意味しているのである。しかるに、当流の意においては、久遠元初の自受用報身、すなわち、無作三身如来のことである。この自受用報身は、日蓮大聖人の本地である」（戸田城聖全集 1 巻, 譬如良医について, p. 94)

要するに釈迦を「良医」とすることは、天台の教えであり、五老僧の教義に通じることを戸田先生は述べられているのである。この五老僧に通じる邪義が池田大作先生講義の名の下に大白に掲載されたのは 2011 年、ちょうど東日本大震災後、原発事故で放射能が大量

に漏れ出した時である。これは何を意味するのであろうか。

なお、勝利の經典御書に学ぶ9巻, 妙心尼御前御返事では次のように戸田先生の発言が紹介されている。

「戸田先生もよく、「靈山に行ったならば、『広宣流布の棟梁たる戸田城聖の弟子である』と、胸を張って名乗れ」と言われていました」

(勝利の經典御書に学ぶ9巻, 妙心尼御前御返事(病之良薬御書), p. 121)

「胸を張って名乗れ」とあるが、誰に対して名乗るのであろうか？その点をこの本は曖昧にしているのである。しかし、良医が釈迦なのだから、インドの釈迦と考える以外にないだろう。それでは原本はどうなのか。探してみると次の講義が見つかった。

「このたびこそは広宣流布のさきがけとして、戸田城聖の弟子としてとおしたまえ。靈鷲山会にいったときに、広宣流布の棟梁たる戸田城聖の弟子であるとして、堂々と大聖人にお目通りしたまえ」(戸田城聖全集6巻, 諸法実相抄講義, p. 683)

ようにするに勝利の經典御書 9 卷は、「大聖人にお目通りしたまえ」を削除しているようである。これでは到底「戸田城聖の弟子」として大聖人にお目通りできるはずがない。むしろ、天台の教え、文上の法華經を弘めた「五老僧」の弟子として、大聖人にお目通りするしかないであろう。その結果がどうなるかは敢えて何もいわないでおく。

加えて、勝利の經典御書 9 卷では、次のような戸田先生の発言が紹介されている—

「かつて戸田先生は、真の宗教の条件について、次のような基準を示されたことがあります。

「一切衆生の苦悩を、救うべきものでなくてはならない」

「一切衆生に、真の幸福を享受せしむべきものでなくてはならない」

「一切衆生の生命を、真に浄化せしむべきものでなくてはならない」

「一切衆生に、生命の真実の姿である永遠の生命を、悟らしむべきものでなくてはならない」

(勝利の經典御書に学ぶ 9 卷, 妙心尼御前御返事, p. 93)

この原本を探してみたが、戸田城聖全集にも、池田大作全集にも、この発言を見つけること

ができなかった。だが、「ニセモノの宗教の条件」に関して戸田先生が言及されたものであるならば存在している。それが次の箇所になる。

「時代の進展によって変更しなければならない教義や、矛盾に満ちた宗教は、誤れる宗教と断定すべきである」(『人間革命』第2巻 p. 265)

なお、この箇所はワイド版の『人間革命』第2巻(2013, p. 308)では削除されているのである。これは何を意味するのであろうか。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その8

- ① 戸田先生の教えに背き、警如良医をインドの釈迦と読ませる解釈を展開
- ② 戸田講義を参考文献の提示なく次のように引用—「霊山に行ったならば、『広宣流布の棟梁たる戸田城聖の弟子である』と、胸を

張って名乗れ」―誰に対して胸を張って名乗るかを分からなくしている（原文は「堂々と大聖人にお目通りしたまえ」とある）

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

そして、インドの釈迦を「良医」とする解
釈は、勝利の經典御書に学ぶ14巻で更に補
強されるのである。次はそれを取り上げよう。

その8：勝利の經典御書に学ぶ 14巻の諸問題その2

この教学書にはこうある。

「仏は「医師」に譬えられます。さまざまな衆生の機根を知り、生命の「病」を知って、最も適切な「薬」、すなわち「法」を授け、衆生を苦悩から救うのです。本抄の冒頭で大聖人は、釈尊が、釈尊滅後の衆生に、どのような「薬」を、誰に託して授けたかを、正法・像法・末法と、時代を追って述べられています」

(勝利の經典御書に学ぶ 14 卷, 高橋入道 殿御返事, p. 49)

ここでも釈迦を良医としており、釈迦本佛論を密かに講義しているのである。しかし、その 2 で述べたように、この教学書は戸田先生の聖人知三世事講義を引用しているが、この講義には次のようにあるのである。

「身延あたりの三宝の立て方は、五百塵点劫第一番成道の釈尊を仏の宝にする。南無妙法蓮華經を法の宝にする。大聖人様を僧の宝とする。このように、食い違ってくる。だから誤って、釈迦像をまつるのです。これを、大聖人様は、この次に破折あそばすのです。

「之に依って之を案ずるに委く過未を知るは聖人の本なり」

(戸田城聖全集 7 卷, 聖人知三世事講義, p. 609)

なぜこの御文が身延の釈迦本佛論破折になるのか。この「聖人」とは釈迦のことだからである。聖人知三世事の文脈からそう判明するのである。戸田先生が取り上げた御書をより詳しくみればそれが判明する。

「法華經の迹門は過去の三千塵点劫を演説す一代超過是なり、本門は五百塵点劫・過去遠遠劫をも之を演説し又未来無數劫の事をも宣

伝し、之に依つて之を案ずるに委く過未を知るは聖人の本なり、教主釈尊既に近くは去つて後三月の涅槃之を知り遠くは後五百歳・広宣流布疑い無き者か」

そしてその後こう続くのである。

「日蓮は一閻浮提第一の聖人なり」（旧版御書, p. 974)

戸田先生はこの御文をこう解釈されている。

「これはハッキリ仰せられている。自分は世界第一の仏である」と

（戸田城聖全集 7 巻, 聖人知三世事講義, p. 615)

要するに、この御書は大聖人勝・インドの釈迦劣をはっきりと述べられていると戸田先生は解釈されているのであり、五百塵点劫第一番成道の釈尊を仏の宝とする解釈は誤りとなるという指導である。極めて鋭い指摘であり、なんと素晴らしい講義ではないか！ なお、開目抄（旧版御書, p. 191）にはこうある。

「仏世尊は実語の人なり故に聖人・大人と号す、外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは実語につけたる名なるべし此等の人人に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは・申すぞかし」。

即ち、世間では「聖人」という言葉は乱用されているが、この語の持つ本来の意味は、仏法上では「仏」を意味するのである。大菩薩などではない。創価執行部は、この「聖人」というのは末法限定の聖人と強弁するかもしれない。だが、「聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云う、儒家の三皇・五帝並びに三聖は但現在を知つて過・未を知らず外道は過去八万・未来八万を知る一分の聖人なり」と聖人知三世事にあり、釈迦と同時代の儒家が出てくるので、末法限定ではない。又、「軽毀する人は頭七分に破・信ずる者は福を安明に積まん」即ち、隠された意味として、大聖人を誹謗する罪も、信じる功德も、釈迦をそうする罰や功德よりも百万億倍勝るという意味の御文が引用されているため、これで大聖人勝・インドの釈迦劣が確定するのである。こうした極めて簡潔にして優れた議論を残した戸田講義を完全無視し、釈迦中心の劣悪な議論が勝利の経典御書シリーズで繰り返されるのである。

なおこれは余談でありが、現在の創価学会首脳部は、今までの御本仏の定義は「大聖人の神格化」そして、「同じ仏なのだから大聖人も釈尊も同格の仏」などと主張しているようだが、そもそも教学要綱にはこうある。「それらの釈尊よりも優れた仏格（仏の位）を持つ「寿量の仏」」（教学要綱, p. 78）とあるの

で、ここで仏の位の違いを認めているのである。それならば大聖人と釈尊との間に位の違いがないわけではないではないか。いつものことであるが、2010年以降の学会教学はまことにお粗末なものであり、ここでも自己矛盾を起こして破綻しているのである。

今までの議論をまとめておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その8－2

- ① 戸田先生の教えに背き、譬如良医をインドの釈迦と読ませる解釈を展開
- ② 大聖人が釈尊よりも優れた仏である文証を説ききった戸田先生の聖人知三世事講義を完全無視。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：～：～：～：～：～：～：～：～：～：

その9 「幸福と価値を創造する 仏法」の諸問題

本書には次のような師弟の道が説かれている。

「師弟とは、弟子の自覚で決まります。私も、
徹して戸田先生の仰せ通りに修行しました」
(幸福と価値を創造する仏法, p. 81)

「**「師弟共戦**」とは、弟子が、わが使命の道で戦い、勝って、常に胸中の師匠に報告をすることにほかなりません。私は戸田先生のもと、常にその決心で真剣に戦ってきましたし、**今もその思いは変わりません。たとえ、遠く離れていても、心は瞬時に伝わります。また、時代を超えて、生命と生命は響き合います。空間も、時間も、師弟を阻む壁にはならない**」

(幸福と価値を創造する仏法, p. 82-83)

と大量にきれいごとが並んでいるが、その後
にこのような主張が展開されるのである。長
くなるが必要な部分を引用しよう。

「法華經壽量品において、釈尊は、始成正
覺という述の姿を発いて**久遠実成**という真実
の姿を顕しました。その元意は、釈尊が九界
の衆生（凡夫）から超絶した永遠の仏の姿を
顕したのではなく「人間釈尊に帰れ！」とい
うメッセージであったと、私たちは拝してき
ました。**人間釈尊を手本**として、いまだ人間
自身が気づいていない生命本来の僻大さに目
覚めよと、訴えているのです（中略）凡夫の
身が、**久遠元初**の生命に立ち返り、宿業の楔
を断ち切り、万人成仏を願う慈悲と智慧に満
ち溢れた仏の身となるのです。それは、人間
として最も本然の尊貴な姿です。その姿を戸
田先生は、「**久遠の凡夫**」と言われました。
この人間本来の生命こそ、根源の仏そのもの
の生命なのです」（幸福と価値を創造する仏
法, p. 104-105)

文脈から「久遠の凡夫」とは釈尊と読む以外
の解釈はなくなってしまう。ところが原本を
探すと、次のような文脈で戸田先生が「**久遠**

の凡夫」と述べられていたことが判明するのである。

「これ（法華經）とて、たんなる理念にすぎないのでありまして、仏のみがこの因果をたたき破って、神通の力を現じたものにすぎません。末法のわれらと縁のないもので、われわれ凡夫自身が、近因近果の理法をたたき破って、自然の仏界を開覚する法が、ただいまでは必要であります。よき運命への展開の法をたてられたのは、日蓮大聖人様でいらせられる。（中略）釈迦の法華經にこたえて、實際生活のなかに、過去の因果を凡夫自身が破って、久遠の昔に立ち返る法を確立せられたのは、日蓮大聖人様でいらせられる。すなわち、帰依して南無妙法蓮華經と唱えたてまつることが、よりよき運命への転換の方法であります。この方法によって、途中の因果がみな消えさって、久遠の凡夫が出現するのであります」

（戸田城聖全集 3 卷, 三世の因果, p. 393-394）

文脈から「久遠の凡夫」とは日蓮大聖人と読む以外にないのである。そして決定的なのは次の戸田先生の発言である。「仏とは命であ

りますから、「もとのままの命」と悟りますときに、途中の因果がいっさい消えさりまして、**因果俱時の蓮華仏**が生出するのであります」(戸田城聖全集3巻, 三世の因果, p. 394)

釈迦は五百塵点劫の太古に仏になった存在であるから、戸田先生のいう「因果俱時の蓮華仏」を釈迦と読むことは不可能である。ようするに『幸福と価値を創造する仏法』は、戸田先生の講義を歪めて大聖人を釈迦へとこっそりと変えているのである。そして次のような大量の壮麗な言葉を並び立てるのである。

「私は戸田先生のもと、常にその決心で真剣に戦ってきましたし、**今もその思いは変わりません。たとえ、遠く離れていても、心は瞬時に伝わります。また、時代を超えて、生命と生命は響き合います。空間も、時間も、師弟を阻む壁にはならない**」(幸福と価値を創造する仏法, p. 82-83)

一方では戸田先生の元で真剣に戦い、今もその思いは変わらないなどと述べておきながら、もう一方では平気で戸田先生の講義を破壊するという深刻な自己矛盾をさらけ出しているのである。当然のことながら、この著書の編

集に重大な問題があるといわざるを得ないのである。

なおこの講義の問題点は「久遠の凡夫」だけではない。「久遠実成」は註解（同書, p. 115)で次のように説明されている。

「【久遠実成】釈尊は実は五百塵点劫という久遠の過去に成道して以来の永遠の仏であるということ。法華經本門寿量品で明かされた」

だが「久遠元初」の説明が何もないのである。従って読者にはこの二つの違いが解らないようになっている。だが既に述べたように、新版法華經講義では、旧版の講義を書き換え久遠実成を無始と解釈するように仕向けているので、「久遠の凡夫」＝無始無終の永遠の根源仏・釈尊と解釈できるようになるのである。戸田先生の教えに弓を引いていることはいうまでもないし、2010年以前の池田先生の教えとも完全に食い違っているのである。参考として次の池田先生の講義を引用しておこう。

「しかし内証深秘の立場から論ずれば、大聖人はまぎれもなく久遠元初の自受用報身如来

であります。大型人の悟りの生命は、**久遠実成の釈迦を透かに越えた久遠元初の木仏の境地**そのものなのであります。もし大聖人が単なる釈迦仏の使いであるとすれば、釈迦仏法の力が消滅する末法の世に出現されても、何の意味もないことになってしまうでしょう」

（大白蓮華 1977 年 2 月号, 百六箇抄講義, p.22）

ここで池田先生がいう「久遠実成の釈迦を透かに越えた久遠元初の木仏の境地」こそが、戸田先生がいう「久遠の凡夫」である。釈迦などではないことは確実である。まとめておこう

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その 9

① 大量の綺麗ごとを並びたてる。「徹して戸田先生の仰せ通りに修行しました」「師弟共戦」（中略）今もその思いは変わりません。たとえ、遠く離れていても、心は瞬時に伝わります。また、時代を超えて、生命と生

命は響き合います。空間も、時間も、師弟を阻む壁にはならない」

②戸田講義の「久遠の凡夫」(戸田城聖全集3巻, 三世の因果)を参考文献の提示をせずに引用し、最も重要な「因果俱時の蓮華仏」をカット。「久遠の凡夫」を釈迦にミスリードさせている。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

そして、この解釈は次の教学書でも繰り返されるのである

その10 「人間革命の宗教」の諸問題

この教学書には次のような主張がある。

「一人一人が、それぞれの地域や立場で「柱」「眼」「大船」たる存在にと成長することが、そのまま、日蓮仏法の誓願に基づく、

人間革命の指標ともいえます。」（人間革命の宗教, p. 67)

同様のことを戸田先生は主張しておられたようである。以下はその文証である。

「かつては恩師戸田城聖先生は『青年は日本の柱である。青年は日本の眼目であり、青年は日本の大船である』と、私どもにお教えくださってられました」（会長講演集一卷, 立正佼成会を撲滅せよ, p. 21)

しかしながら、「柱」「眼」「大船」とは開目抄で説かれる「日本の主」、「日本の師」、「日本の親」、即ち仏の三徳を表したものであり、本仏のみが有する徳であるとされる。南条兵衛七郎殿御書, 旧版御書, p. 1494 にはこうある。「我等衆生のためには阿弥陀仏・薬師仏等は主にてはましませども親と師とには・ましまさず、ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏に・かぎりたてまつる」

ではなぜ本仏釈迦如来のみが備えている三徳を大聖人も備えているのか。それこそが教主交代であり、祈りの対象が、「南無釈迦牟尼

仏」(撰時抄, 旧版御書, p. 259)から、「南無日蓮聖人」(同書, p. 287)に移行したことを意味するのである。

事実、会長講演集一卷にて池田先生は、この主師親の三徳をもって、大聖人を人本尊と定義されているのである。以下がその講義になる。

「開目抄の根本義は、日蓮大聖人様が末法万年の救世主、御本仏であるという、人本尊の開顕ならびに、いっさいの全世界の不幸の根源は、政治でも経済でもなくして、邪宗邪義にある、「此れをしれる者は但日蓮一人なり」(開目抄 200 頁)すなわち苦悩の原因は邪宗邪義にあるのだというお教えが、開目抄の根本義であります」(会長講演集一卷, 立正佼成会を撲滅せよ, p. 21)

それではなぜ 人間革命の宗教を私が問題視するのか。理由は、この背後には「根本仏釈尊」を師匠として、誰でも三徳を備えた仏になれる。即ち、日蓮大聖人はその我々の先輩であり、親分程度の存在に過ぎない。その程度に大聖人を扱う思想が見え隠れするのである。

「大願」とは、万人の成仏という仏の偉大な願いであり、広宣流布という大いなる願いです。全民衆を救いたい—これこそが仏の願いです。法華経方便品には、釈尊自身の根本の誓願について「如我等無異」と説かれています。釈尊在世の弟子たちは、過去世に自身が常に師匠と共戦を続けてきたことを思い起こして、大いなる使命に目覚めました。さらに、本弟子たる地涌の菩薩は、久遠から釈尊と同じ広宣流布の願いを共有してきました。師と共に同じ誓いに立ち、自他共の幸福を実現しようと法を弘め、人々を励ましていく。この仏法の慈悲に連なる「大いなる願い」は、決して特別に選ばれた人だけが持つものではない。全ての弟子、ひいては、誰人もが本然的に胸中に抱いているものです」（人間革命の宗教, p. 72-73)

文脈から釈迦と同じ境涯（如我等無異）を大衆に得させるために、日蓮大聖人が立ちあがられたという「釈迦本佛論」になっている。ようするに仏の三徳も大聖人を筆頭にして誰でも得られることができますよ、という教えを説いているのである。この講義は更にこう続く。

「戸田先生は、よく、私たちのような凡夫が、偉大な「久遠の凡夫」になるんだよ、と言われていました。永遠にして宇宙大の境涯を築いていく。これが仏法の真髄です」（人間革命の宗教, p. 74)

文脈から「久遠の凡夫」を釈迦にしてしまっているのである。しかし既に述べたように、この「久遠の凡夫」とは「**因果俱時の蓮華仏**」（戸田城聖全集3巻, 三世の因果, p. 394）、即ち日蓮大聖人のことである。この教義書も又、戸田講義を不正に引用して意味を歪める引用（しかも二度）を行っており、極めて悪質である。さらに次の引用も悪質である。

「戸田先生は、こうも語られていました。
「（学会員は）『仏の使い』であります。如来につかわされた身であります。大聖人の分身であります。凡夫のすがたこそしておれ、われら学会員の身分こそ、最尊、最高ではありませんか」（人間革命の宗教, p. 76)

文脈から大聖人が如来（釈迦の使い）であり、その大聖人の分身として我々学会員が活動するという意味にとれるように引用している。しかし原本は、「われわれこそは「如来の使い」「大聖人の使い」として、確信してよろしいのであります」（戸田城聖全集 1 巻、如来の事を行ぜよ, p. 304）とあり、この如来とは大聖人のことを意味しているのである。読者をミスリードさせる引用法であり、これも悪質性が高いといわざるをえない。こうしたことをしでかしておきながら、次のような綺麗ごとが述べられている。

「現在も未来も共に苦楽をば分けあう縁不思議なるかな」これは恩師が第二代会長に就任された日に、私が頂戴した和歌です。師の心を受け継ぎ、必死に戦う中で、私は日記に留めました。「われ、永遠に、此の師と共に、生死、生死と」この共戦の誓いは、今も、否、永遠に変わりません。戸田先生は常にわが生命の中におられるからです」（人間革命の宗教, p. 186）

なお、日蓮大聖人の神格化という口実の下に、大聖人と我らを全く同じ存在として扱うのは、**法主は現代における日蓮大聖人**とか、戒壇本尊と不二の尊体と説く日顕宗のそれと全く同じ大謗法となる。**大聖人と我らが全く同じ存在なら、御書根本の精神など必要ない**ではないか。自分勝手に信仰すればよいという宗門の天魔同様の思想に繋がってしまうのである。戸田先生の警告を引用しておく。

「自分自身が本尊であり、お題目を唱えるものは等しく地涌の菩薩であって、日蓮大聖人とも変わりがないと考えることは、重大な増上慢のきわみであり、大謗法である(略)別して、日蓮大聖人様が御本仏であらせられ、われわれ凡夫は、主従、師弟、父子のごとく、あまりにもしたしくて、しかも、あまりにも厳然たる区別のある存在なのである」(戸田城聖全集 3 巻 p. 65、p. 67)

問題なのはこの類の自語相違だけではない。この教学書は恐らく、五百塵点劫を無始と説いた初めての書物ではないかと思われる。同書, p. 249 にはこうある。

「【無始の古仏】久遠の仏のこと。寿量品で説かれた五百塵点劫成道の仏をいう。「無始」とは、始まりがないこと。始まりがないほどの久遠から続いているということ」

文脈から、五百塵点劫は始めのない無限の過去と解釈するしかない。しかし観心本尊抄の現代語訳は「**五百塵点劫以前の昔に顕された三身であり、始まりもないほど古くからの仏なのである**」（人間革命の宗教, p. 237）

となっており、こちらは無始の古仏とは「五百塵点劫以前の仏」となっており、ここに自己矛盾をきたして論理的に崩壊させているのである。全く同様の自己矛盾が「教学研鑽・観心本尊抄第二版」でも起きており、そちらは「釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群」p. 89で論じているので、それを参照して頂きたい。私の推測だが、過去の観心本尊抄の現代語訳を確認せずに使いまわした結果、このようなおお粗末な自己矛盾をきたしたと思われる。

それにしてもこの書物は一体誰によって執筆されたのか、その責任の所在を明らかにする必要があると思うのは果たして私だけなのであろうか。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その10

①「釈尊」を師匠として、誰でも三徳を備えた仏になれる、という類の議論を展開。大聖人を悪しく敬う。

② 二つの戸田講義から「久遠の凡夫」「如来の使い」という言葉を、参考文献の提示をせずに引用（これで二回目）し、これらが読者には釈迦と解釈できるようにミスリード

③次のような綺麗ごとを並び立てる。「われ、永遠に、此の師と共に、生死、生死と」この共戦の誓いは、今も、否、永遠に変わりません。戸田先生は常にわが生命の中におられるからです」

④ 戸田先生の教えに背いて、「【無始の古仏】＝寿量品で説かれた五百塵点劫成道の仏」、即ち釈尊は無始無終の仏であるという議論を註解でひっそりと展開

⑤しかし観心本尊抄の現代語訳が「五百塵点劫以前の仏」となっているので、ここで自己矛盾させて破綻させている。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

このように、2010年5月以降における教学書では、今までの創価学会の根本的な教えを密かに反転させ、名目だけは御本仏日蓮大聖人といいながら、背後で釈迦をこり押しするものに満ち溢れているのである。三徳を備えた仏を釈迦とする御書解釈がまさにそれである。次はそれに関して議論しよう。

その11：勝利の經典御書に学ぶ13巻の諸問題

「「釈尊が舵を取る創価の船? 『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群」 p. 120-121 で筆者はこの書物の問題点をこのように指摘した。長くなるが引用しよう。

「これを受けて、大聖人は「今この日本国は釈迦仏の御領地 である」と確認されたうえで、そこに住む神々や人々にとって、釈迦仏(釈尊)こそが「主・師・親」の三徳を備えた「大恩の仏」である。私たちを教え導く任に当たられる仏は、十方世界のあらゆる仏の中でも、ただ釈迦仏だけであることを明かされています。(中略) とりわけ日本国の諸僧は釈迦仏の弟子として出家したにもかかわらず、根本の師匠と、その 究極の教えである法華経を捨てて、阿弥陀仏の弟子のように 振る舞い、人々に阿弥陀仏を祭らせ念仏を唱えさせている、 と喝破されているのです」(勝利の経典御書に学ぶ 13 卷, 弥三郎殿御返事, p. 55-56、大白蓮華 2012 年 10 月号)

これも通常の学会の講義であれば、一旦は文上の御書解釈をした後に、より深い文底の教

義が明かされるのである。この講義がそれである。

「大聖人は、寿量文底独一本門の正義を明らかにするにあたって、まず第一段階として、権実相對の立場から、法華經に導くため、権教の阿弥陀信仰を打ち破って、法華經の教主である釈尊を立てられたのである。したがって、ここでいう釈迦仏は、阿弥陀仏信仰を破るという目的から挙げられているのであり、大聖人の元意の辺は文底下種の釈尊即久遠元初の自受用報身如来こそ、末法一切衆生にとって主師親三徳具備の仏であられる」

(日蓮大聖人御書講義 33 卷, 弥三郎殿御返事, p. 87)

しかし、勝利の經典御書に学ぶ 13 卷にはそうした箇所はないのである。代わりに次のようになっている。

「法華經は、「師匠(仏)によって救われる弟子」から、「師匠と同じ誓願に立って人々を救う弟子」への一大転換を説いていること

を確認しておきたい。言い換えれば、共戦の弟子が出現してこそ、法華經の民衆救済の思想が完成するのです」（勝利の經典御書に学ぶ13巻, 弥三郎殿御返事, p. 69 70）

文脈から釈迦を根本の仏であり、大聖人を筆頭とする地涌の菩薩の師匠としているのは明らかである。」引用終わり

さてそれでは、この書物にはどのような形で戸田先生の講義が引用されているかと調べてみると、次の箇所が恐らく最重要の箇所であろう。

「「愚人にほめられたるは第一のはぢなり」との御聖言は（中略）法華經のためならばいかなる非難・迫害も恥ではない。愚人にほめられることこそ第一の恥であり、反対にいえば、聖人にほめられたるこそ第一の光榮なりとのご信念にもとづいて、法華經の肝心の広布のゆえに牢獄の露と消えられたのである。日蓮大聖人の仏法を信ずる者は、これこそ第一の亀鑑（＝模範）であると信ずるのである」（『開目抄講義』）」（勝利の經典御書に学ぶ13巻, 上野殿御返事, p. 26）

非常に珍しく、引用に出典元の明示が行われている。これは戸田城聖全集 6 巻, 開目抄講義, p. 459- 460 からの引用だが、実はすぐ手前に極めて重要なことを戸田先生が述べられているのである。

それが次の箇所である。

「本章は開目抄上下全体を三段に分けた最後の結勧にあたる。上巻の最初に一切衆生の尊敬すべきものとして主・師・親をあげ、いま本章にいたって「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」と、御本仏・人本尊は日蓮なりと御宣言になって当抄を終わられている」
(同書, p. 459)

この箇所をスクショしておいたので、引用された箇所と省かれた箇所を確認して頂きたい。

講義

愚人にほめられることが第一の恥である。日蓮が幕府のご勘気をこうむり流罪されれば、天台、真言の法師等は悦んでいよう。じつに彼らの心は無慚であり、奇怪である。

それ釈尊は娑婆世界に應誕して法華経を説き、羅什は秦に渡来し、伝教は中国へ留学したのも、すべて仏法のためである。また提婆菩薩や師子尊者は法のため身を捨て、薬王菩薩は臂を焼いて供養したてまつった。日本の上宮太子は手の皮をはいで経を写し、釈迦菩薩は肉を売って仏を供養し、楽法は骨を筆として法を書きとどめた。これらのことを天台は「時になうのみ」といっている。仏法はじつに時によるべきである。日蓮は時になつて折伏を行じ、いま流罪されていることは、今生の小苦であるからいっこうに嘆くことはない。後生には大楽を受けるのであるから、大いに悦ばしいのである。

本章は開目抄上下全体を三段に分けた最後の結勸にあたる。上巻の最初に一切衆生の尊敬すべきものとして主・師・親をあげ、いま本章にいたって「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」と、御本仏・人本尊は日蓮なりと御宣言になつて当抄を終わらせている。

「愚人にほめられたるは第一のはぢなり」との御聖言は、真の仏法を広布せんことを念願とする創価学会初代会長牧口常三郎先生が、常に座右の金言となされていた御信条であった。先生は御文のとおり、法華経のためならばいかなる非難・迫害も恥ではない。愚人にほめられることこそ第一の恥であり、反対に言えば、聖人にほめ

この戸田講義の文章の配置から、大聖人は「主・師・親」の三徳を備えているがゆえに、人本尊であり御本仏という戸田先生の最重要の講義の箇所を無視できようはずもない。勝利の經典御書13巻にも次のような綺麗ごとが大量に述べてあるので猶更である。

「私も戸田先生の心を受け継ぎ、この確信（本物の一人）で進んでまいりました」（同書, p. 33）

「戸田先生をお護りするためなら、私が師匠に代わって、一切の大難の矢面に立つ覚情を貫いてきました」（同書, p. 71）

戸田先生の講義を引用しつつ、戸田先生を賞賛し、そして下のような講義を平然と行うとは一体どういう神経をしているのであろうか。一体この本の編集体性はどうなっているのでしょうか？

「これを受けて、大聖人は「今この日本国は釈迦仏の御領地である」と確認されたうえで、そこに住む神々や人々にとって、釈迦仏(釈尊)こそが「主・師・親」の三徳を備えた「大恩の仏」である。私たちを教え導く任に当た

られる仏は、十方世界のあらゆる仏の中でも、ただ釈迦仏だけであることを明かされています」

(同書, p. 55)

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その11

- ① 佐渡以前の御書を用いて、釈迦本佛論「釈迦仏(釈尊)こそが「主・師・親」の三徳を備えた「大恩の仏」」を展開。
- ② 戸田講義を引用する（今回は参考文献の提示あり）が、直前の文脈にある「大聖人は「主・師・親」の三徳を備えているがゆえに、**人本尊であり御本仏**」という最重要箇所を完全無視
- ③ 次のような大量の綺麗ごとを並び立てる—「私も戸田先生の心を受け継ぎ、この確信（本物の一人）で進んでまいりました」「戸田先生をお護りするためなら、私が師匠に代

わって、一切の大難の矢面に立つ覚情を貫いてきました」

その１２：勝利の經典御書に学ぶ１５巻の諸問題

勝利の經典御書に学ぶ１５巻に学ぶで、特に問題となるのが次の箇所である。

「また「如来の事」とは、仏の大願である万人救済のための「妙法の弘通」をこの經文の心をふまえ、大聖人は、仏にかわって、法華經を一字一句でも唱え、人に語る者は「教主釈尊の御使」であり、一字一句でも供養する人は、福德を積むのであると仰せです」（勝利の經典御書に学ぶ１５巻、四条金吾殿御返事（梵音声御書）、p. 104）

既に述べたように、「如来の事」とは、戸田城聖全集１巻、如来の事を行ぜよ、p. 306の講義によれば、この如来とは大聖人のことであり、釈迦のことではない。更にいうなら、法華經を末法に供養したところで何ら功德はな

い。牧口先生は次のような言葉を遺されている。

「白法が出現すると、釈尊の親しく予言されたのが適確に実証され、『今末法に入りぬれば、余経も法華経も詮なし、ただ南無妙法蓮華経なるべし』、と日蓮大聖人が仰せられたのが現実に証明されてある」（牧口常三郎全集 8 卷, p. 69)

こうした先代の師匠たちの言葉を見せしめ、この教学書は次のように続くのである。

「学会員は皆、尊き「教主釈尊の御使」であるからこそ、リーダーはどこまでも「会員根本」「会員第一」で進んでいただきたい」（勝利の経典御書に学ぶ 15 卷, 四条金吾殿御返事(梵音声御書), p. 105)

文脈から、創価学会員がインドの釈迦の使いになっているのである。これはもはや従来の創価学会の教えではない。奇怪な新興宗教というべきものである。そしてさらにこう続く。

「大聖人は「日蓮は賤しき身ではあるが、教主釈尊から御命令を頂戴して、この国に来た」とも仰せです」（勝利の経典御書に学ぶ 15 卷, 四条金吾殿御返事(梵音声御書), p. 106)

御書根本の美名の下に、日蓮は名目だけ御本仏、その実態は身延同様の「日蓮大菩薩」論になっているのである。ただ単に牧口・戸田先生に弓を引いているだけではない。御書講義そのものも出鱈目を講義しているのである。次がその箇所である。

「三十二相とは仏の境涯を示すのであり、人格のうえに具わる内面的価値を表したものであるといえるでしょう。このことについて大聖人は「南無妙法蓮華經と他事なく唱へ申して候へば天然と三十二相八十種好を備うるなり」(御書一四四三頁)と仰せです。私たち凡夫も、南無妙法蓮華經の題目を唱えることで、自然と仏の三十二相 八十種好が具わると教えられています」(勝利の經典御書に学ぶ 15 卷, 四条金吾殿御返事(梵音声御書), p. 117)

「三十二相とは仏の境涯を示すのであり、人格のうえに具わる内面的価値」というのは、文底の法華經読みには当てはまるが、文上の法華經の教主である釈迦には当てはまらない。木絵二像開眼之事(旧版御書, p. 468)にはこうある。

「仏に三十二相有す皆色法なり、最下の千輻輪より終り無見頂相に至るまでの三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし梵音

声の一相は不可見無対色なれば書く可らず作る可らず、仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず又心法かけたり」

重要なのはこの箇所である—「三十一相は可見有対色なれば書きつべし作りつべし」。三十二相の内、三十一相までは彫刻で作ったり、絵で書いたりして現わすことができる、即ち釈尊の外面に現れた姿ということである。

「人格のうえに具わる内面的価値」なら絵や彫刻で現わすことは不可能である。従って、三十一相とは外面を顕すものであり、内面ではない。そして梵音声、ようするに釈迦の発する言葉のみは絵や彫刻で表すことができない、これが心法である。同御書, p. 469 にはこうある。「法華経を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体生身の仏なり」

ようするに、絵や彫刻で表すことのできない梵音声、即ち仏の御意である法華経を仏像に印し、開眼供養することで、「涅槃の後分には生身の仏と滅後の木画の二像と功德齐等」(同御書, p. 468)一生きていた時のブツダと仏像やブツダの絵とが、功德が全く同じになる、というのがこの御書の重要な教えである。池田先生は次のような講義を遺されている。

「法華經とは法本尊のことで、釈迦如来とは人本尊です。「人法一箇」を表しています」
(広布第二章の指針 9 卷, 仏界の生命動かす勤行, p24)

ようするに釈迦の三十二相のうち三十一相は、外面に現れる金ぴかな姿そのものであり、内面の姿などではないのである。そして現実世界にそのようなお化けのような者は存在しない。従って、現在の執行部が主張するような根本の仏などではなく、迹仏に過ぎないのである。真筆完備の御衣並単衣御書は、三十二相を備えた釈迦を次のように否定する。「応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて」(同御書, p. 971)とある。そしてこの「法華經の文字」とは二十八品の法華經ではなく、南無妙法蓮華經、即ち南無妙法蓮華經如来のことなのである。

以上の理由から、次の箇所も誤りである。
「大聖人は、この仏の梵音声が一切衆生を救う經典となったのであり、法華經の文字こそが仏の真意を書き表したものであることも明かされています」(勝利の經典御書に学ぶ 15 卷, 四条金吾殿御返事(梵音声御書), p. 118)

この誤りは、「仏の御心」という御文を、文字通り「仏の真意」と解釈し、大聖人の深い真意を全く理解していないことから来ている。法華経が「仏の真意」を現わすものならば、それを仏像や絵像に埋め込んで開眼供養して一体何の意味があるのか。開眼供養するか否かに関わらず、只の物体に過ぎないではないか。「生身の仏と滅後の木画の二像と功德齊等」とはならないではないか。そうではなく、この「仏の御心」とは、仏の生命と訳さなければならない。

日蓮大聖人御書講義 22 卷, 四条金五口殿御返事(梵音声御書), p. 318 はきちんとそのように訳されており、非常に優れたものになっている。戸田・池田先生の教えに忠実だったからこそ、このような講義が可能となったのであろう。それを引用しよう。

「釈迦仏と法華経の文字とはかはれども心は一つなり云云

すでに述べたように、文上脱益仏法の辺に約すれば、釈尊の生命は法華経であるという意である。経王殿御返事に「仏の御意は法華経なり」とあるのと、まさしく同意である」

それでは戸田先生の講義はどうなのか。

戸田先生は有名な経王殿御返事の御文「仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙

法蓮華經に・すぎたるはなし」(旧版御書, p. 1124)を次のように解釈されている。

「ここが、めんどろな読み方なのです。仏というのは、釈迦仏をいっているのです。釈迦如来は法華經をもって生命とし、大聖人様は、南無妙法蓮華經をもって生命となさっている。ここに、釈迦仏法と大聖人様の仏法との相違を明らかにお示しになっている。いまの邪宗の僧侶には、これが読めないのです。法華經だ、法華經だと思っている。これほどはっきりした違いが、読めてもよさそうなものだと思うのですが、勉強をしない者は読めない」

(戸田城聖全集 7 卷, 経王殿御返事, p. 597-598)

戸田先生も「仏の御意」を「仏の生命」と訳しておられる。「仏の御心」も全く同様に、仏の生命と訳さなければならない。仮にそのように訳さなければ、次の御文は意味のないものになるであろう。

「然れば法華經の文字を拝見せさせ給うは生身の釈迦如来にあひ進らせたりと・おぼしめすべし」

(梵音声御書, 旧版御書, p. 1122)

ようするに 勝利の經典御書に学ぶ 15 巻を書いた者は、南無妙法蓮華經 日蓮と大書された御本尊を、生身の大聖人と拝することができないとしか思えないのである。人法一箇を否定したその一念が、このような劣悪な御書解釈に繋がったと考えられるのである。

加えて、これも私の推測だが、この本の筆者は釈尊を三十二相という内面が輝く「菩薩仏」に仕立て上げようとしたのではないか。法華經の智慧にはこうある。「永遠の仏を説くにはどうすれば良いか」というと、『仏因』に『仏果』を認めなくてはならない」(法華經の智慧 5 卷, p. 212)。「この「因位(仏因の位)の仏」——それが上行菩薩です。『因果俱時の仏』です。上行菩薩が出現しなかったならば、無始無終の本仏は示せないのです」(同書, p. 212-213)。

ようするに、釈尊を無始無終の本仏に仕立て上げるためには、どうしても三十二相を仏の内面を顕すものに仕立て上げ、現実世界で説法教化する菩薩仏にする必要があるからである。しかしこれは不可である。開目抄にはこうある。「不輕菩薩は過去に法華經を謗し給う罪・身に有るゆへに瓦石をかほるとみへたり」

(旧版御書, p. 231)

又、佐渡御書にもこうある。「不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈雑言打擲せられしも先業の所感なるべし」（旧版御書, p. 958）
不輕菩薩とは釈尊の修行時代の姿だが、それ以前を辿ると、謗法時代にたどり着くのである。ようするに提婆達多のようなことをしでかし、その罪により罵詈雑言とされるのである。これでは「菩薩仏」などとはいえないではないか。池田先生も次のような講義を残されている。「釈尊の過去世である不輕菩薩でさえ罪業を持っていた」（池田大作全集 24 卷, 佐渡御書講義, p. 352）

従って、観心本尊抄の「無始古仏」を、釈迦に結び付けることは不可である。この仏はあくまでも始めのある仏であり、三十二相という金ぴかの外面を飾り、南無妙法蓮華經如来の脇士となる迹仏に過ぎないのである。では大聖人はどうなのか。謗法時代が原因で迫害にあったのではないのか。実はその考えは誤りである。法華經に説かれる予言を証明するために、あえて自ら難にあったということがいえるのである。証拠となる御文を以下に示す。

「釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を継紹して其の功德を受得す「須臾も之を聞く・即阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを

得」とは是なり」（観心本尊抄, 旧版御書, p. 247)

「我が仏界」とは文脈から大聖人お一人の仏界という意味である。一人称になっており、一人に限定しているところが極めて重要である。そして、「其の跡を継紹」、即ち、釈迦、多宝、十方の諸仏の跡を継承するとあることから、自分は仏であるという御自覚があったということである。そして、「須臾も之を聞く」、ごく短い間南無妙法蓮華經を聞くことで、「即阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得」ようするに究極の悟りを開いた、とあるのである。少年時代に虚空蔵菩薩に祈り、南無妙法蓮華經を悟られたのだから、釈迦のように何千年という修行時代や、謗法時代を経ずして究極の悟りを得たことを、この御文は仄めかしているのである。よって大聖人を宇宙生命と無限の過去から一体の根本仏として崇拜するのは、真筆御書に照らして当然である。

なお追加の議論であるが、勝利の經典御書 15 巻で、三十二相は仏の内面を顕す議論の文証として引用された御書は新池御書であるが、これは深刻な問題を抱えた文献である。問題の箇所が次の御文である。「建長寺・円覚寺の僧共作法戒文を破ることは大山の頽れたる

が如く・威儀の放埒なることは猿に似たり」
(旧版御書, p. 1442)

この御書は弘安三年に執筆されたとされるが、円覚寺が開山するのは弘安五年であり、この時点では円覚寺の僧侶は活動していないのである。又、円覚寺が言及されるのは全御書中これしかない。又、真筆も古写本も存在していないようである。これがこの御書の資料的信ぴょう性に対する大きな疑問点となるのは確実で、これだけで偽書とは確定できない（後加文か書写のミスの可能性もある）が、釈迦を本仏に格上げするために、一方で身延の大崎ルールを使用しておきながら、もう一方でこの信ぴょう性の低い御書を用いて釈迦を菩薩仏に繋げる議論は、余りにもご都合主義であり、不可であることはいうまでもない。

さて話は変わるが、この書物にはこのような事が述べられている。

「（戸田）先生の叫びを永遠に残したい。いつかレコードのような形で（中略）学会本部で皆と共に先生の講義の録音テープを聴きました。先生の凍とした声が響き渡ると、誰もが襟を正し、感涙し、敢闘を誓ったのです」

(勝利の經典御書に学ぶ15巻, 四條金吾殿御返事(梵音声御書), p. 105)

爾前經及び釈迦の文上の法華經を読むものを、
 どれほど激烈に戸田先生が批判されたか。そ
 れは戸田城聖全集 1 卷、無用の長物, p. 13-15
 に記述されている。余りにも強烈なので、こ
 こでは引用を控える。興味がある方は是非原
 本を手にとってみてほしい。勝利の經典御書
 15 卷の筆者は、それを聞く機会がなかった
 のであらうか。

そして、法即人、人即法という仏法の大原理である人法一箇を全く理解していない、或いはそれを否定する講義は勝利の経典16巻にもあらわれるのである。次はそれを議論しよう。その前に今までの議論をまとめておこう。

おかしな講義まとめ：その12

- ① 「学会員は皆、尊き「教主釈尊の御使」という釈迦本佛論を展開
- ② 三十二相が内面に現れるという教えを展開し、釈迦を菩薩仏（金ぴかの仏を超えた永

遠の仏)にしようと画策しているとは思えない議論を展開。しかも、教学要綱では大崎ルールを採用しておきながら、こちらでは文献に問題のある新池御書を使うというダブルスタ。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その13：勝利の經典御書 に学ぶ16巻の諸問題

この書物には次のような講義が掲載された。

「「法華經」とは単なる經典の名前ではありません。先ほど拝した「妙法蓮華經の種」と同じ意義であり、父母が子を生むのと同じく、諸仏を生む能生の法なのです」（勝利の經典御書に学ぶ16巻, 上野殿母御前御返事, p. 110）

僅かこれだけの文章の中に①法華經と南無妙法蓮華經を同じ法体とみなす。②人法一箇を認めず、文上の法華經である法勝仏劣を説く。

③法華經と南無妙法蓮華經を同じ法体とすることで、結果的に迹門と本門の一念三千、しかも釈迦に属するものしか得られないようにする。

という恐るべき誤りが混入しているのである。詳しい解説は、「「釈尊が舵を取る創価の船?『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群」 p. 57に譲るとして、この書物はどのように戸田先生の講義が引用されているかをみてみよう。次のような箇所がある。

「大阪へ向かう途中の羽田空港で、戸田先生が、万感こめて手渡してくださるのが、上梓されたばかりの『人間革命』の単行本でした。私は、**大阪への機中で真剣に読みました。**戸田先生ご自身の獄中記とも言うべき一節一節から、先生の闘争の魂が伝わり、胸中に「正義」と「共戦」の炎が明々と燃え上がりました」

(勝利の経典 御書に学ぶ 16 巻, 治病大小権実遠目, p. 8)

さてそれでは、この「人間革命」には何が説かれているか。重要な箇所を引用してみよう。それが次の箇所である。

「この時、巖さん（戸田城聖）は仏の三身の説・・・仏身を三つに分けて、法身、報身、応身とされていることを知らない。（中略）彼はただ仏の実体を汲取ろうとして思索に入り、応身の説は略分かるような気がしたが、無量義経で説かれている法身、報身の説は、いくら思索を重ねても領けない。思索を打切って題目を唱えだした声が独房に響き渡り、それが消えると、彼は死物狂いの思索に入っている。「仏とは生命なんだ!」」

（戸田城聖全集 8 巻, 人間革命, p. 500-501）

この箇所こそが、有名な「仏とは生命なり」という戸田先生の獄中での悟達の記述なのだが、ここで無視してはならない重要な教義は、**仏とは生命であるとともに、法身、報身、応身の三つから成り立っており、互いに切り離すことは不可能である**ということである。そして、これらが切り離された祈りの対象とは、法身如来である大日如来のように、劣る存在でしかないということである。開目抄, 旧版御書, p. 198 にはこうある。

「双林最後の大般涅槃經四十卷、その外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく法身の無始無終はとけども応身・報身の顕本はとかれず」

要するに応身・報身の欠けたものは劣る存在であり、祈りの対象としては不適格であるということがこの御文からいえるのである。かつて池田先生は次のように講義されていた。「南無妙法蓮華經は法であるが、同時に仏身なのです。人法一箇です。ここが大切な所です」(法華經の智慧 4 卷, p. 80)。

この主張を裏付ける重要な文証は本尊問答抄の御文「此の中には已に如来の全身有す」(旧版御書, p. 365)である。既に議論したように、応身・報身を含まない祈りの対象は、法身如来である大日如来のように劣る存在である。従ってこの如来を南無妙法蓮華經という名の法身如来とすることは不可能である。これこそが現在の創価学会がごり押ししている邪義であり、勝利の經典御書に学ぶ 8 卷や、この 16 卷にはその邪義のさきがけの教義が現れているのである。

かつて池田先生はこの御文を次のように解釈されていた。

「法華經の經卷にこそ釈尊の全生命があるのだから、別に生身の舍利を安置する必要はないというのである」(本尊問答抄に学ぶ下, p. 25)

それに続いて、日寛上人の六卷抄を取り上げて、次のように講義されている。「また文底秘沈抄では、「若しは経卷所住の処(中略)此の中には已に如来の全身有す」の文を久遠元初の自受用身における人法体一の明文とされている」(本尊問答抄に学ぶ下, p. 25)

ここでは説明されていないが、池田先生は当然のことながら、文上の法華経(釈迦が主人公)と文底の法華経(大聖人の法華経)を区別されていたということがいえる。この両者における法体の違いは、上野殿御返事, 旧版御書, p. 1546 の御文、「今末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし、但南無妙法蓮華経なるべし」から明らかである。加えて、この本尊問答抄に学ぶ下と同様に重要な講義が下山御消息に学ぶ一巻である。以下に引用しよう。

「その後に御図顕された御本尊の相貌によって大聖人の御真意は明瞭であるといわねばならない。すなわち、本門の釈尊を脇士となす本尊こそ、地涌千界の上首・上行菩薩の再誕として末法に出現された大聖人の顕される一間浮提第 未曾有の御本尊にほかならない。しかしながら、上行菩薩の再誕としての御立場は迹で、その本地は久遠元初自受用報身如来であられる。人に約して久遠元初自受用報身

如来とは即法に約して南無妙法蓮華經であり、御本尊中央の首題であられる。釈迦・多宝はその左右にあって脇士となっているのである。

その意味で、下山抄における「教主釈尊より大事なる行者」とは、まさに大聖人の御内証の御立場を示されたものであり、教主釈尊とは久遠元初の御本仏に対して脇士となる本門の教主釈尊を指している」（下山御消息に学ぶ一卷, p. 143-144）

これらの二つの講義から、本尊問答抄と報恩抄の極めて重要な本尊の義が明らかになるのである。釈迦の仏像を祀る必要はない。なぜなら、妙法蓮華經の宝塔の中に如来の全身がいらっしゃるから、というのが本尊問答抄の核心的な教えで、この宝塔の中にいらっしゃる如来こそが、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」（報恩抄, 旧版御書, p. 328）ということになる。インドの釈迦は本尊問答抄に説かれている「法勝人劣」の原理により有始有終の金ぴかの迹仏となるが、宝塔の中にいらっしゃる如来にはこの原理は当てはまらない。だから観心本尊抄でいう無始古仏になるのである。これらの御書は共に浄土房に与えられた御書であり、このように解釈することで、その真意が明らかになるのである。事実池田先生はそのように解釈されていた。文証を示そう。

「この御文において重要なことは、「本門の

教主釈尊を本尊 とすべし、(中略)釈迦多宝(中略)脇土となるべし」との語が示す内容である。ここでは、釈迦・多宝の二仏が本門の釈尊の脇土となると仰せられている。したがって、多宝と並ぶ「釈迦」とは本門の「教主釈尊」と同一ではないことが明らかである。これをいかに解すべきかで、釈尊を本仏と立てる他門流では苦しい解釈を重ねてきた。安国院日講も録内啓蒙 卷第十五の中でそれまでの解釈を列挙しつつ、結局は「祖意 測り難し、故に衆義並び存して後賢の研かくに備う」と述べ、自ら正解を放棄して後世に委ねざるを得なかったのである。この問題についても、下山抄で大聖人が御自身のことを「教主釈尊より大事なる行者」(三六一二頁)と仰せられた御真意を拝すれば明瞭となるのである。すなわち、教主釈尊(多宝と並び称せられる釈尊)よりも大事なる行者である日蓮大聖人こそが「本門の教主釈尊」にほかならない。すなわち、報思抄に仰せの「本門の教主釈尊」とは大聖人を指し、釈迦・多宝の二仏がその「脇土」となることは明らかである」(下山御消息に学ぶ一卷, p. 139)

仮に教学要綱のように、釈迦も日蓮も拝む対象でないならば、本尊問答抄で説かれる「宝塔の中におわす如来」という存在が問題となる。これを解決するには、宝塔の中の如来が出てきて宝塔の脇土となるという強引な解釈

をするしかないが、これだと池田先生が指摘したとおり、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」という報恩抄との矛盾は避けられず、論理的に崩壊してしまうのである。

かくして2010年以前は、池田先生は戸田先生の教えを受け継ぎ、南無妙法蓮華經即日蓮大聖人と捉えて疑わなかったのは確実である。

勝利の經典御書に学ぶ16巻―「南無妙法蓮華經が「諸仏を生む能生の法（の名前）」（同書, p. 110）

及び8巻―「（妙法蓮華經は）他の名号のように、一仏・一菩薩・一聖人・一善神の名前ではありません」（同書, p. 92）

の主張は、人と法が分離されていることから誤りといえるが、これらの誤りは、戸田先生の人間革命に説明されている「仏の三身の説」を無視することに由来するといってよいであろう。余りにもお粗末な講義ではないか。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その13

①「南無妙法蓮華經が「諸仏を生む能生の法（の名前）」という南無妙法蓮華經單法説を展開。

②戸田先生の「人間革命」を紹介して賞賛しつつ、南無妙法蓮華經單法説に矛盾する箇所「仏身を三つに分けて、法身、報身、応身」を無視

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その14：勝利の經典御書 に学ぶ16巻の諸問題その 2

この勝利の經典御書16巻は極めて問題の多い書物である。次の箇所もまさにそうである。

「**「心の病」、「時代・社会の歪み」を治すには、釈尊の真実究極の教えである法華經を根本とする以外にない。万人成仏の教えである法華經を否定する諸經への執着を捨てて、一切經を生かしていく法華經をこそ中心して用いよ、と教えられているのです。**その底流には、仏教は万人の幸福のために説かれた教えであり、その本質を見失ってはならないとの民衆救済への情熱があります。「浅深・勝劣」を論ず仏教の本義を求め、釈尊の真意を蘇らせるためです」（同書、治病大小権実違目, p. 15-16)

文脈から釈迦と法華經を中心に解説されてある。全文を読んでみて頂ければわかるが、大聖人の一念三千はどこにも説かれていないのである。更にこのようにある。

「法華經こそ**「心の病」を治す最勝の教え**であるとされたうえで、この法華經にも、前半の迹門と、後半の本門との間では、水と火との区別のように明らかな違いがあることを示されています（中略）そして今、**末法に入り、本門の大法を弘通する資格をもつ地涌の菩薩が出現して、本門を弘通すべき時がきている**—このように述べられています。本門の教えと、それを弘通する主体者が出現することには深い意味があります」（同書, p. 21)

この説明だと、自我偈に属する一念三千と、南無妙法蓮華經に属する一念三千が同じ法体になってしまう。これは小樽問答において、池田室長（当時）が破折しきった身延側の考えそのものである。そんな教義が、池田先生監修の下に出ているのは異常な事だと思わざるを得ない。小樽問答にはこうある。

「末法においては（法華經の）本門は流通分として用いられるにすぎないことなど、彼（身延側の人物）の念頭には影すら浮かばなかった」（人間革命9巻、小樽問答, p. 133）

なお、2010年以前に池田先生は治病大小権実違目を講義されており、ここではちゃんと第三の法門である、文底の一念三千が説かれている。

「本抄でいわれている「此れは本門の一念三千なり」の「本門」が釈尊の文上の法華經の「本門」ではなく、「文底の独一本門」の意であり、したがって「天台・伝教の迹門理の一念三千も、文上本迹二門の中の「迹門」ではなく、文上の本迹を一括して「迹門」と位置づけられた御文である」（池田大作監修、治病抄に学ぶ, p. 281）

なおこの書物では、この主張の文証を「本因妙抄」に依っているが、教学要綱では身延の大崎ルールを用いることで、この類の議論を無効化しようとしているようである。しかしながら、最近になって文底の一念三千を明快に説く御書が発見され、真筆御書に逃げ込むこの類の姑息な議論が通用しなくなっているのである。

この件について、私の著書「「釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群」 p. 207-209 で次のように議論したので、ここに引用しておこう。

「この御書（本因妙抄）を偽書とすれば、文底の一念三千は否定されるのかというと、それは大いなる誤りである。既に私の著書『創価学会教学要綱と、創価大学元教授・釈迦本佛論者の論文との比較検証』で様々な角度から検証したが、決定的なのは近年発見された次の御書（創価学会版御書未収録）である。

「天台大師は此法華經を二經口口口。所謂迹門十四品一經、本門十四品一經なり。迹門の大法は一切經に対しての大法なり。本門の大法と申は、迹門の円仏の大法に対して彼を少法と下ての大法なり。所謂天台云或小仏とゆる、或妙樂云、或迹門円人畜生とゆう。此等に勝ていかなる法門ありて、本門の極理尚

を残というや。答云、月支・漢土・日本国の
二千二百舟余年が間の寺塔を見るに、寿量品
の仏を造立せうる伽藍なし、精舎なし。」

(本迹門勝劣の事, 日蓮の真筆文章をよむ, p.
213-214)

ここでは明らかに三つの法門が説かれている。
「此等（迹門と本門）に勝て」という御文が
その決定打である。

1) 迹門の大法 2) 本門の大法 3) 本門の
極理＝寿量品の仏

御書・本迹門勝劣の事で述べられている「本
門の極理」とは、当然文底の法華經のことで
あり、この御書で述べられる「寿量品の仏」
とは、観心本尊抄の「寿量の仏」（旧版御書,
p. 248)に相当するのは必然である。観心本尊
抄では、釈尊は本尊の脇士（同御書, p. 254)
に過ぎないと説かれているので、この「寿量
の仏」をインドの釈迦と解釈する教学要綱(p.
78 79)は、創価学会の全書物の中で犯した最
大最悪の邪義ということがいえよう。なお、
追加の情報として、2015年11月発刊の新・
人間革命 27巻, 激闘の章, p. 320-321には従
来通り、迹門、本門、文底と三つの法門が説
かれており、2015年5月発刊の大白蓮華の

池田大作先生講義と完全に矛盾してしまう。幸いにも、新・人間革命シリーズには釈迦の邪義は出てこないようである。次にその箇所を引用しておこう。

「月を「本」とすれば、池に映った月は「迹」である。また、「門」とは法門のことである。この「本」と「迹」をもって、法華經二十八品を立て分けると、前半十四品は「迹門」となり、後半十四品は「本門」となる。法華經の前半は、初めて菩提樹の下で成道した釈尊の所説を記した經文であるからだ。その釈尊は、仏が衆生を救うために顕した仮の姿、迹仏にすぎないのだ。一方、法華經の後半が「本門」となるのは、釈尊が五百塵点劫の久遠の昔に成仏していたという、仏の本地、真実が明かされた法門であるからだ。久遠以来、仏は、この娑婆世界で永遠に戦い続けている――これが本門の教えである。伸一は力説した。日蓮大聖人の法華經文底から見れば、南無妙法蓮華經が「本」であり、文上の法華經は、迹門、本門ともに『迹』となるのであります。それは南無妙法蓮華經こそが、末法流布の大法であるからです」
(新・人間革命 27 卷, p. 320-321)」引用終わり

なお、新・人間革命 27 卷は 2015 年発刊、勝利の經典御書に学ぶ 16 卷も同じく 2015

年発刊である。同じ時期であり、同じ池田大作先生監修でありながら、一方の一念三千の解釈が小樽問答時における創価学会側と同じなのに対し、もう一方は身延側と同じ解釈になっているというのは異常な事態であるとしかえないのである。

なお、勝利の經典御書に学ぶ、・治病大小権実違目, p. 16 では、戸田先生に関して次のように言及されている。

「戸田先生は、「この御書には、一字一句にも、大聖人の御心がこもっております」と本抄を講義されたことがあります」

では 治病大小権実違目講義で戸田先生はなんといわれていたのか。この箇所が重要である。

「本門といえは釈尊一代の經文はそのまま迹門にして、そして日蓮大聖人様の独一本門の法華經をもって本門とする。独一本門の御本尊様というあの本門です。本門は本門でも、内容が違うのです。そこを、いま文上で本迹相對して、大聖人様がおしたためになって議論しているのです。本迹相對しているけれども、法華經文上の迹門、本門を論ぜられている。そのなかに文底ができています」

(戸田城聖全集 7 卷, 治病大小権実違目講義, p. 661-662)

当然のことだが、『池田大作監修・治病秒に学ぶ』と全く同じことが説かれているのである。そして、「独一本門の御本尊様」とは、御書・本迹門勝劣の事で述べられている「本門の極理」であり、「寿量品の仏」であると拝せよう。即ち、勝利の経典御書に学ぶ16巻の講義は、真筆御書に照らして誤りの講義、五老僧門流の講義をしているのである。さらに戸田先生の講義には次のようにある。

「本門は、久遠の時に釈尊が仏になった。それ以来ずっと弟子を育ててきた。二十六回か八回か仏に生まれてきて、その間、全部自分で弟子を育ててきたというのです。ところが、**われわれになると釈尊に関係してなかったのです**」（戸田城聖全集7巻, 治病大小権実違目講義, p. 664-665)

この本の筆者は、戸田先生の講義から一体何を学んだのであろうか。今までの議論をまとめておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その14

① 「「心の病」、「時代・社会の歪み」を治すには、**釈尊の真実究極の教えである法華經を根本とする以外にない**」と、文上の法華經を説く。

② 戸田先生の治病大小権実違目講義に言及しているが、戸田講義の重要箇所「**法華經文上の迹門、本門**」の対比、及び「**（我々は）釈尊に関係してなかったのです**」は全て完全無視

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

この書物も当然編集体制に大きな問題があるといえよう。そして、今述べた戸田先生の講義も当然のことのように無視され、釈迦と深い関係のある地涌の菩薩という邪義が再び次の教学書で繰り返されるのである。

その15：勝利の經典御書に学ぶ17巻の諸問題

以下の講義は、諸法実相抄の文脈それ自体に照らして問題のある非常にお粗末なものである。

「そして「日蓮と同意」、すなわち大聖人と同じ心で広宣流布に戦う人は「地涌の菩薩」であり、「釈尊久遠の弟子」にほかなりません。私どもも、何ものも断ち切ることのできない、永遠の生命の絆で結ばれた宿縁の師弟として、共に広宣流布の誓いに生き抜く同志であります」（勝利の經典御書 に学ぶ17巻、諸法実相抄, p. 83-84）

しかし、釈迦の久遠の弟子という主張は、次の御文を考えた場合破綻するのである。

「妙法蓮華經こそ本仏にては御座候へ、經に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親

の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返つて仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり」(旧版御書, p. 1358)

この御書の主張は明快で、妙法蓮華經&凡夫(地涌の菩薩)こそが本仏(法即人、人即法の法一箇)で、釈迦が迹仏(脇士)という主従関係を説いている。それならば釈迦が久遠の昔から地涌の菩薩を指導してきた師匠という師弟関係は根幹から崩れてしまうではないか。

御書には次のようにある―「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事に疑はんや、經に云く「我久遠より来かた是等の衆を教化す」とは是なり」(同御書, p. 1360)

この教主釈尊をインドの釈尊と解釈することは、迹仏となる存在なので不可である。この釈尊とは、報恩抄で説かれる「本門の教主釈尊」であり、文底の教主釈尊でなければならない。事実、2010年以前の池田先生の講義にはちゃんとそうある。

「「釈尊久遠の弟子」の「釈尊」とは、一往は法華經本門の教主釈尊であります、再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来であり、末法御本仏日蓮大聖人であります。

日蓮大聖人は、久遠よりこのかた、地涌の菩薩を教化しこられたという意味です」（池田大作全集 24 卷, 諸法実相抄講義, p. 77)

文脈からこのように解釈せざるを得ないので、当然釈迦を久遠の仏とし、御書の文底読みを否定する身延派には極めて都合の悪い御書となる。だから彼らは大崎ルールを盾にして、この御書を偽書扱いし、その内容を見做すのである。この態度は決して褒められたものではないが、都合の良いところだけ切り取って、さも釈迦が久遠からの師匠のようにみせかける現在の創価教学よりは幾分マシなものである。しかし、大崎ルールに逃げ込んだところで、次の御書は真筆が残っており、無視することは不可能である。

「釈迦仏を御使として・りやうぜん浄土へま
いりあわせ給へ」

（上野殿母尼御前御返事, 旧版御書, p. 1576)

なぜここでは釈迦が使いの存在に過ぎなくなっているのか。そもそも釈迦仏とは題目の脇士であり、十界の己心の仏界を擬人化した存在に過ぎず、他の諸天善神同様にその実態はないのである。鬼子母神や十羅刹女（イランの神話の女神）や、梵天帝釈（インド神話の神々）、八大竜王（古代インドの神話）或いは天照大神（日本神話）と同様に、三十二

相の金ぴかの姿をした架空の存在といえるのである。だから、釈迦は我々とは全く縁のない存在となる。こうした架空の存在を仏像化したのが身延の本尊であり、その正体は、世界中の神話をごちゃ混ぜにした極めて低劣な多神教に過ぎないのである。そして、それにすり寄っているのが今の創価学会の教学の実態であり、極めて嘆かわしい。

さてそれでは、勝利の経典御書に学ぶ17巻は、戸田先生の講義をどのように引用しているのだろうか。次のような箇所がある。

「戸田先生は一九五一年(昭和二十六年)、第二代会長に就任されて間もなく、大論文「**創価学会の歴史と確信**」を発表されました。そこには、**不滅の学会精神が綴られています**」
(勝利の経典御書に学ぶ17巻, 諸法実相抄, p. 91)

さてそれでは、この論文の中で戸田先生は何と言われているか。重要なのはこの箇所である。

「また自分は、文底独一の教理を説いていると深く信じているが、教本には文上の法華經を用いている。この二つの罪(もう一つの罪は、邪宗をのさばらせた罪)は、御本仏の許

すべからざるものである。私は大難をうけたのである。立つべき時に立たず、つくべき位置につかず、**釈迦文上の法華經をもてあそぶ者として、大謗法の罪に私は問われたのである。**ありがたや、死して無間地獄うたがいなき身が、御本尊の功德はありがたく、現世に気づくことができたのである」
(戸田城聖全集 3 卷, 創価学会の歴史と確信・上, p. 114)

さてそれでは勝利の經典御書に学ぶ 17 卷は何を説いているのか。次のような箇所がある。

「法華經の地涌の菩薩も、**久遠の師弟の絆に深く感謝しながら、どこまでも師と共に未来を向いていました。躍動感に満ちあふれていました**
いく躍動感に満ちあふれていました。
戸田先生は、「創価学会の歴史と確信」の中で、こうも言われています。「創価学会のごとき団体が、過去七百年の間に、どこにあったであろうか」「時は、まさに来れり。大折伏の時は、まさに来れり」と」(同書, 諸法実相抄, p. 106)

この引用は戸田城聖全集の 3 卷, p. 122 からであるが、原文には次のページにこのような記述があるのである。

「末法の御本仏は「南無妙法蓮華經」の御本尊とあらわれて、日本民衆および全世界の民衆を救う礎を、たてられたのであった」

(戸田城聖全集 3 卷, 創価学会の歴史と確信・上, p. 123)

大聖人即南無妙法蓮華經の御本尊という人法一箇が説かれているのである。さてそれでは、勝利の經典御書 17 卷の「久遠の師弟の絆」とは大聖人と我々の関係と説かれているのかと確認すると、そうではないのである。調べていくと次のような箇所当たる。

「この地涌の菩薩の師匠とは誰なのかと調べると、次のような記述に行き当たる—「在世の弟子たちと異なり、虚空会に集った菩薩たちは、惡世の娑婆世界の広宣流布を誓うが、最終的には、**釈尊に退けられてしまう**（中略）この大難の嵐に負けず、広宣流布の戦いを続けられるのは、**久遠の仏と一体不二で修行してきた地涌の菩薩しかないのです**」（同書, 諸法実相抄, p. 94-95)

文脈から、久遠の師匠を釈迦にしているのである。しかも大量のページを割くことで、読者には久遠の師弟が釈迦との師弟なのか、大聖人の師弟なのかを分かりにくくしているのである。これは意図的にこのような文章を書いている可能性が高い。そして、戸田先生の

罰の体験を無視して、堂々と文上の法華經の世界觀、釈迦の弟子の地涌の菩薩を説いておきながら、戸田先生の論文を、「不滅の学会精神が綴られています」「大論文」などと賞賛する態度は、自語相違も甚だしいではないか。このようなことをしておいて、次のような講義を行っているのである。

「仏法では、「人の振る舞い」という究極の道理を説いています」（勝利の經典御書に学ぶ, 八風抄, p. 52)

一体何の冗談なのか？この書物も当然ながら、編集に問題があるとしかれないのである。まとめておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その15

① 諸法実相抄の文脈（凡夫（大聖人とその弟子）こそ本仏、釈迦は迹仏）を完全無視して「（地涌の菩薩は）「釈尊久遠の弟子」」「久遠の仏と一体不二で修行してきた地涌の菩薩」という文上の法華經を説く。

② 戸田先生の『創価学会の歴史と確信』を「大論文」「不滅の学会精神が綴られてい」

ると賞賛する。しかしそこに記載されている「釈迦文上の法華經をもてあそぶ者として、大謗法の罪に私は問われた」という戸田先生の罰の教訓を完全無視。

③「仏法では、「人の振る舞い」という究極の道理を説いています」と、人の振る舞いに関して言及しているが、おまいうと思うのは私だけではあるまい。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

この諸法実相抄は、教学書『未来の希望「正義の走者」に贈る』でも取り上げられているが、ほぼ同様の御書の文脈を無視した講義を行っているのである。今度はそれを取り上げよう。

その16：『未来の希望 「正義の走者」に贈る』の 諸問題

この教学書には次のような問題のある講義が掲載されている。

「私たちが唱える南無妙法蓮華經の題目とは、最極の真理の名前です。宇宙と生命を貫く根本の法則です」(未来の希望「正義の走者」に贈る, 諸法実相抄, p. 14)

既に述べたように、この御書は「妙法蓮華經こそ本仏」と同時に「凡夫は体の三身にして本仏」と説かれる。ようするに妙法蓮華經即凡夫であると説いているのであり、ただ単に「最極の真理の名前」とするのは、明らかにこの御書の文脈を無視しているのである。2010年以前の池田先生の講義には次のようにある。

「南無妙法蓮華經とは、日蓮大聖人の御生命そのものであり、ゆえに大聖人は、十方三世の諸仏を動かしていく当体であられる」(池田大作全集24巻, p. 諸法実相抄講義, p. 41)

今までの創価学会は、南無妙法蓮華經即日蓮大聖人という教えを説いてきた。それが2010年以降、異変をきたすのである。上にあげた講義などはその典型で、御書の文脈を曲げてまでこのような議論を展開しているのである。更に問題なのが次の箇所である。

「大聖人は「『日蓮と同意』であるならば『地涌の菩薩』である（注7）」と教えられています。地涌の菩薩とは、**悪世に妙法を弘めることを託された最も尊い菩薩たちです**」（未来の希望「正義の走者」に贈る、諸法実相抄, p. 18）

この文章で最大の問題は、「悪世に妙法を弘めることを託された」とあるが、誰から託されたのかが一切説明されていないことである。更にこのようにある。

「地涌の菩薩は、仏に等しい偉大な菩薩です」（未来の希望「正義の走者」に贈る、諸法実相抄, p. 20）

ここでいう仏とは誰なのか、それも何も述べられていないのである。しかし、先ほど引用した「『地涌の菩薩』である（注7）」の注7の箇所を読むことで、隠された地涌の菩薩の主人ともいえる存在が明らかにされる仕掛けになっている。（注7）（同書, p. 30）にはこうある。

「釈尊が悪世において法華經を弘め、人々を永遠に幸せにしていくために呼び出した菩薩たち」

ようにするに、釈迦の弟子日蓮、釈迦と最も縁の深い地涌の菩薩という、身延流の教義、釈迦本佛論になっているのである。しかもこの御書の文脈とは完全に矛盾する解釈である。この御書では「仏は用の三身にして迹仏」と述べられているのだから、その迹仏であるインドの釈迦が地涌の菩薩の棟梁になることはない。釈迦の弟子日蓮という世界観をこの御書から導き出すことは不可能である。従って、この御書で述べられる「本門寿量品の古仏たる釈迦仏」（旧版御書, p. 1359）とは、南無妙法蓮華經如来、或いはと久遠元初の自受用報身知来でなければならない。事実、戸田先生はそう解釈しているのである。

「上行菩薩が現れて、弘めたもうべきところの南無妙法蓮華經という言葉をば、日蓮はほこれ弘め、しかも、その上行菩薩御出現したもうときに、作り顕すべき久遠元初の古仏たる釈迦、多宝如来、あるいは涌出品に現れる地涌の菩薩の姿をば、ほぼこれを作ったということは、自分としては非常にありがたいことに思えてならない。行きすぎたように思うと。これは御自身のことをいっておられるのです。」（戸田城聖全集 6 卷, 諸法実相抄講義, p. 679）

池田先生もかつて同様の解釈をされていた。表現こそ違えども、その内容は戸田先生の講義と全く同じといってよいだろう。

「上行再誕というだけでは、日蓮大聖人の本地を明らかにしたことにはならない。今この文に「本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏」うんぬんとある御本尊の御図顕の持つ意味を知らなくてはなりません。釈迦、多宝、更に、久遠元初の無作三身如来である南無妙法蓮華経という仏の生命をあらわすためには、御自身の内に、その仏の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書一一二四頁)と仰せられているのであります。人法一箇の御本仏であるがゆえに、人法体一の御本尊を御図顕されたのであります」(池田大作全集、諸法実相抄講義、p. 60)

さて、諸法実相抄のどこをどう読めば人法一箇が否定され、単法本尊へと退化し、迹仏の釈迦が地涌の菩薩の棟梁になるのであろうか。釈迦本佛論の教えを説くために、身延派はこの御書を偽書としているのは、まあ当然の態度であろう。御書の文脈を無視して都合の良いところのみを切り取り、さも釈迦が本仏のように見せかける(しかも明言を避ける)という態度は、極めて誠実さを欠いた講義であ

り、この書物も当然作成時における編集の問題が指摘できるのであろう。今までの議論のまとめをしておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その16

① 諸法実相抄の文脈（妙法蓮華經こそ本仏・凡夫は体の三身にして本仏、釈迦は迹仏）を無視して、「私たちが唱える南無妙法蓮華經の題目とは、最極の真理の名前です」と単法論を展開。

② 同じく諸法実相抄の文脈を無視して「釈迦と最も縁の深い地涌の菩薩」という文上の法華經論を展開。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

その17：『世界広布新時代への指針』の諸問題

この教義書には戸田先生に関して次のように述べられている。

「「大難を乗り越え、戸田先生が、いよいよ会長に就任されることを決意された一九五一年（昭和二十六年）の春。その三月に、先生が私に、厳粛な面持ちで講義してくださった御言の一つが、「諫曉八幡抄」〈注1〉でありました。」（同書, p. 6）

さてそれでは、戸田先生はどのような講義をされたのか。その時の講義が文字として遺されているので、重要な箇所を引用しよう。

「仏法が中国より朝鮮、朝鮮から日本にきた仏法流通の相で、「日は東より出づ」とは、末法にいたって、真の仏法がインドへ流通するとの大聖人の御予言である。しかりとすれば、日本の仏法とは何を指すのか。いうまでもなく、大聖人の大確信たる末法の仏法たる「南無妙法蓮華經」の七字の法華經が、朝鮮へ、中国へ、インドへと流通すべしとの御

おおせである」(戸田城聖全集3巻, 朝鮮動乱と広宣流布, p. 85)

ここで戸田先生は7文字の法華經の述べているが、諫曉八幡抄には「**月支の不妄語の法華經を迹に**」(同書, 旧版御書, p. 588)と、はっきりと法華經全体が迹門となることが述べられているので、7文字の法華經こそが末法において本門となることは明らかであり、詳しくはもう一度述べるが、戸田先生の解釈は正しいといえる。

ところがこの教義書は、戸田先生の講義を無視するのみならず、御書の文脈を無視して、法華經の法体＝南無妙法蓮華經の法体という邪義を堂々と持ち込んでいるのである。私の著書「**釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした異様な書物群**」p. 59-61でこの本の問題を次のように指摘した。長くなるがその箇所を引用しよう。

「ここでは「**仏が在世に法華經を説かれたのはただ八年である**」として、月の光に譬えられています。一方、末法の「**長き闇**」を照らす太陽もまた法華經です。日月は共に法華經の比喻であり、込められた願いも娑婆世界の一切衆生の救済で、その心は同じです。そのうえで本抄に、日月の明るさの違いが提起

されているのは、まず前提として、釈尊出世の国であり、法華經の故郷である月氏国（インド）において、残念ながら仏教が既に滅んでしまっていたという認識があります」（世界広布新時代への指針, p.16、大白蓮華 2015 年 5 月）

そしてこの解釈は、日蓮本佛論を諫曉八幡抄を通して説く須田氏を、池田名誉会長の名の下に否定する議論としても使われている。次がそれである。創価男子部教学室の発言は以下。

<https://www.sokayouthmedia.jp/answer/2825023.html>

「この御文も、教えを説いた人ではなく、説かれた教えに対する言及である。しかも、それは教えの勝劣に焦点があるのではない。この御文について、池田先生は、「ここでは『仏が在世に法華經を説かれたのはただ 8 年である』として、月の光に譬えられています。一方、末法の『長き闇』を照らす太陽もまた法華經です。日月は共に法華經の譬喩であり、込められた願いも娑婆世界の一切衆生の救済で、その心は同じです」（「大白蓮華」2015 年 5 月号「世界を照らす太陽の仏法」）と述べている。そのうえで先生は、こ

こで日月の明るさの違いが提起されているのは、当時のインドや中国で仏教が失われていたことを表しているとして、「だからこそ、太陽の如く一切衆生の苦悩の闇を破る法華經の智慧の大光を、再び中国、インドの大地に還していく。仏法の人間主義の生命を蘇らせ、永遠に全民衆の心を潤していく。これを『仏法西還』というのです」と講義している。須田氏はこの御文には「日蓮が釈迦仏に勝る存在であることが示されている」と主張しているが、師の深い洞察に照らして、見当外れな解釈であるといえる。」引用終わり

しかし、諫曉八幡抄を拝するならば「今八幡大菩薩は本地は **月支の妄語の法華經を迹**に日本国にして正直の二字となして賢人の頂きにやどらんと云云」（同書、旧版御書, p. 588）と、インドの法華經それ自体が迹門であると述べられている。その直後に「經文の如くんば南無妙法蓮華經と申す人をば大梵天・帝釈・日月・四天等・昼夜に守護すべしと見えたり」（同書, p. 588）とあるので、本門という言葉はないが、文脈から南無妙法蓮華經が本門であることは明らかである。さらに本文には「日は光明・月に勝れり」（同書, p. 589）とあるので、インドの法華經＝月＝劣・日本の南無妙法蓮華經＝日＝勝が文脈から確定する。又、インドで仏教が滅びたので、その光明は月で、日本は広がりつつあ

るので太陽とするような解釈も誤りである。月＝「在世は但八年なり」＝8年しか闇を照らせない・日＝「五五百歳の長き闇を照す」＝ほぼ永遠に闇を照らせる、としか解釈の余地はなく、これは既に議論した、「供養有者過福十号」（大聖人を供養する功德は、釈尊を供養する功德よりも百千万億倍勝る）という日興門流の御本尊の讃嘆文と矛盾するものではない。又、教えを説いた人の勝劣ではないという考えも同様に誤りである。「此れ偏に日蓮が尊貴なるに非ず法華經の御力の殊勝なるに依るなり、身を挙ぐれば慢ずと想い身を下せば經を蔑る」（聖人知三世事, 旧版御書, p. 974-975）即ち、法の高低浅深は即、仏の位に繋がるのである」引用終わり

そもそも池田先生は釈尊の月の仏法と、日蓮大聖人の太陽の仏法の違いを次のように解説されていた。

「宗教の質が違うというか、ある意味で、それまでの「月の仏法」は、自身が仏になることが最終目標でした」（中略）ころが日蓮仏法では、成仏はたやすいことだと言われている。南無妙法蓮華經の大良薬があり、受持即觀心の御本尊があれば、確かに、誰人も仏界を涌現する。そこまでは「信」があれば、やすやすと実現することは確かです。しかし問題は、どう「持っていくかし」「持ち続ける

か」という、「持つ」ことの内容です」(御書の世界3巻, 仏法西還 p. 138-139)

又、御書にはこうある。

「応化非真仏と申して三十二相八十種好の仏よりも法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給いて仏在世に仏を信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人は無一不成仏如来の金言なり」(御衣並単衣御書, p. 971)

ここでは三十二相の金ぴかのインドの釈尊が否定され、法華經の文字こそが真の仏であることが述べられている。この法華經の文字とは「南無妙法蓮華經如来」のことであり、「本門の教主釈尊」(報恩抄, 旧版御書, p. 328)或いは「寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊」(三大秘法稟承事, 旧版御書, p. 1022)のことである。そして、インドの釈尊の法華經では成仏できない人もいると述べられているのに対し、「仏の滅後に法華經を信ずる人」ようするに御本尊を信じる人は百発百中仏になることが明確に述べられている。この真筆御書に照らしても、今のべた池田先生の発言は全て正しいことが証明できるのである。いつからイン

ドの法華經も日本の法華經も差がなくなったのであろうか。『世界広布新時代への指針』の出鱈目はこれだけではない。戸田先生の講義を無視し、諫暁八幡抄の文脈を歪めて解釈するのみならず、戸田先生の講義を歪曲させて引用しているのである。既に私の著書「「釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群」 p. 137-142 で取り上げたが、より詳しく分析すると、更にその悪質さが鮮明となるのでもう一度取り上げることにする。その前にまとめをしておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その17

① 諫暁八幡抄の文脈（八幡大菩薩は本地は月支の不妄語の法華經を迹に）を無視して、月も日も共に法華經に喩えられる（法華經と南無妙法蓮華經の法体は同じという身延派同様の教義に変更したいと思われる）という暴論を展開。

② 「（戸田）先生が私に、厳肅な面持ちで講義してくださった」と、戸田先生の諫暁八

幡抄講義に言及しているが、重要事項「末法の仏法たる「南無妙法蓮華經」の七字の法華經」を完全無視

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その18：『世界広布新時代への指針』の諸問題その2

この教義書は次のような形で戸田先生の講義を取り上げる。しかしいつものことだがその参考文献は提示されていない。

「この時、先生は、新年の勤行を終えると、参加者の方に向き直り、甚深なる仏法の奥義を語り始められました。講義のテーマは「三妙合論」でした。三妙とは、「本因妙」「本果妙」「本国土妙」です。すなわち、釈尊の久遠成仏の「本因（根本の因）」が妙であり、その成就した仏の境涯の「本果（根本の果）」が妙であり、その仏が居住する「本国土（根本の国土）」が妙であるということです。。この三つが法華經寿量品に合わせて説

かれているということが三妙合論です〈注
2〉」

(世界広布新時代の指針, p. 112-113)

この戸田先生の講義を探してみると、戸田城聖全集5巻に収められていることが判明する。ここで『世界広布新時代への指針』で無視されている重要な教義が述べられている。法華経は釈尊を主人公とする文上と、日蓮大聖人を主人公とする文底の二重構造から成り立っており、文底の教義を説かなければ全く意味がないどころか、かえって害を及ぼすということである。戸田先生の原文の講義にはこうある。

「同じ寿量品といっても、釈尊の時代に功德のあった寿量品と、現代のわれわれに偉大なる生命力と幸福を与える大聖人の寿量品との二つがあり、天地雲泥の相違があります」

(戸田城聖全集5巻, 方便品寿量品講義, p. 380)

ようするに世界広布新時代の指針では、文底の三妙が完全に無視されているのである。この教義書は次のように続く。

「先に「**本果妙**」について言えば、寿量品の「如是我成仏已来、甚大久遠」が依文です。釈尊が成就した仏果一仏の大境涯が永遠であることを示しています。

次に「**本国土妙**」は「我常在此娑婆世界、説法教化」が依文です

この文について、戸田先生はこう強調されていました。「仏は現実の世界以外には、いっらしやらないということです。五濁〈注3〉悪世の世の中にいてこそ、真実の仏なのであります」と。仏は成道後も、この娑婆世界にいるという画期的な宣言です。

そして、私たちにとって重要な「**本因妙**」の依文が、「我本行菩薩道、所成寿命、今猶未尽、復倍上数」です。この経文には、久遠の釈尊が成道した「本因」（根本の修行）が明かされています」

（世界広布新時代の指針, p. 112-113)

これらは全て文上の法華経であり、釈迦中心の世界観である。しかし原文には文上の解説に続いて文底が説かれており、それは次のようになる。

（**本果妙**）「我実成仏已来」—これは、仏の本体であります。すなわち、文底よりこれを論じますと、御本尊にあたります（中略）、

文底からこれを論じますと、大宇宙即御本尊であり、南無妙法蓮華經の生命というものは、「我実成仏己来」我仏を得てよりこのかた、仏になってよりこのかた大宇宙とともにある、と読むべきが文底であります」

（**本国土妙**）「しかも娑婆国土以外には、ほんとうの仏はいらっしゃらないのであります。娑婆に仏がおらなかったならば、そんな仏は迹仏であり、権仏であります。娑婆世界におられる仏こそ、真実の仏であります」

（**本因妙**）「その仏になるには、みな菩薩の道を行じたのであります。「我本行菩薩道」であります。しかし、これを文底より論じてゆくところに、本果妙の釈尊の仏法と本因妙の教主釈尊の仏法との相違が、はっきりしてくるのであります。」（戸田城聖全集5巻，方便品寿量品講義，p. 431-432）

そしてこれから、最重要部分である本因妙の箇所を、これから戸田先生は詳しく解説されるのである。それが次の箇所である。

「ところが日蓮大聖人になりますと、仏自体の立派な姿を現じられないのです。すなわち、仏になる本因を論じ、仏になる本因を行ずるのであります。ですから本因妙の仏という以外にないのであります。大聖人が生まれなが

らにして御本尊の体を現し、御本尊の行を行じられたならば、それは菩薩道でなくなるのであり菩薩道というのは、菩提薩埵と申しまして、仏になる道を行ずるのをいうのであります。御書のどこを拝読いたしましても、われ仏になって、霊山でおまえらを救ってやるとか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になれるだろうと書いてはいないのであります。日蓮大聖人の御行動は、本地内証の位においては仏でいらせられても、行ずるところは菩薩であります。その菩薩を一括して、すなわち文上でいえば、五十段の本因初住の文底にあるところの南無妙法蓮華經という、仏の本体を直接信じて、われわれは仏になるのでありますから、大聖人の仏法は本因の妙なのであります。ゆえに大聖人を本因の仏と称し、寿量文上の仏をもって本果の仏と称し、ここに本果妙と本因妙の区別があるのであります」(戸田城聖全集5巻, 方便品寿量品講義, p. 432)

ところがこの重要な講義は、次のように書き換えられ、これで説明が終了しているのである。

「大聖人は、御内証は御本仏であります、仏自体の立派な姿を現きれることはなく、凡夫の立場で、仏になる本因の菩薩道を説き、行じられた。ゆえに、大聖人は、本因の仏と

なります。御書のどこを拝しても、大聖人は、
「私は、既に仏なのだから、みんなを救って
やろう」などとは、おっしゃっておりません。
大聖人が生まれながらにして御本仏の体を現
し、御本仏の行を行じられたとしたならば、
それは菩薩道ではなくなってしまう」(世界
広布新時代の指針, p. 115、大白蓮華 2019 年
1 月)

戸田講義において最重要の箇所はこの部分で
ある。

「本地内証の位においては仏でいらされて
も、行ずるところは菩薩であります」

そして、次のように「日蓮大菩薩論」を否定
している。

「御書のどこを拝読いたしましても、われ仏
になって、靈山でおまえらを救ってやるとか、
これだけの難を忍んだので、私はそのうちに
仏になれるだろうと書いてはいないのであり
ます」

ところが引用された文では、巧妙に意味が逆
転しているのである。

「御書のどこを拝しても、大聖人は、
「私は、既に仏なのだから、みんなを救ってやろう」
などとは、おっしゃっておりません」

これだと、鎌倉時代には大聖人は仏ではなく菩薩であり、菩薩道を修行して仏になったという、戸田先生が否定した「日蓮大菩薩論」である。冒頭の「大聖人は、御内証は御本仏」というのは、古い信者に対しての一種の目くらましでしかなく、鎌倉時代に菩薩道を修行し、その結果現在創価学会員から崇められる御本仏となった、という意味になる仕掛けである。

更に原文にあった「御本尊」を全て「御本仏」に書き換え、現在の創価学会の独自教義、本尊＝祈りの対象・本仏＝祈りの対象でない、に置き換えていることも見逃してはならない書き換えである。

最後に、重要な語彙の定義「大聖人を本因の仏と称し、寿量文上の仏をもって本果の仏と称し、ここに本果妙と本因妙の区別があります」を削除し、本果の仏（修行時代→仏）という始まりのある仏・本因の仏（仏因に仏果を認める故に無始の仏）（法華經の智慧5巻, p. 212）という、池田先生が法華經の智慧5巻で説明されていた、永遠の仏を説くための素晴らしい講義も完全に無視され、低劣な講義に成り下がっているのである。

かつて池田先生は文上の法華經の三妙合論を、「浅薄な義」と一蹴していたのである。その重要講義を引用しよう。

「本門寿量品が大切なのは、この三妙合論等の説法があるからであろうか。むろん、しかりである。しかしながら、これは文上の領域で論じたものであり、一往の浅薄な義である。より一重立ち入って論ずるならば、実に、この寿量品の文底にこそ、事行の一念三千の南無妙法蓮華經が秘沈されているから大切なのである。」（御義口伝講義下, p. 32）

なぜ、かつて「浅薄な義」と断言していたものののみを取り上げ、重要な文底の三妙合論を無視したのであろうか。此れでは読者に対してあまりにも不誠実ではないのか。

今までの議論をまとめておこう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしな講義まとめ：その18

①戸田先生の「三妙合論」の講義に言及するが、参考文献を示さない。

②原文は、文上の三妙と文底の三妙が言及されるが、この講義では文上の「本因妙」「本果妙」「本国土妙」、かつて御義口伝講義下、p. 32で「浅薄な義」として一蹴していたもののしか示さない。

③ 原文：「御書のどこを拝読いたしましたしでも、われ仏になって、霊山でおまえらを救ってやるとか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になれるだろうと書いてはいないのであります」（内証は既に仏だが、菩薩行を行じる）を次のように改竄

「御書のどこを拝しても、大聖人は、＼私は、既に仏なのだから、みんなを救ってやろう」などと、おっしゃっておりません」（未だ仏ではなく菩薩行を行う大菩薩、将来仏になる予定）。意味を180度反転させる。要するに生身の大聖人を「御書根本」の美名の名の下に、身延同様の日蓮大菩薩に下して悪しく敬っている。これは学術的にみて

falsification としかみなせなであろう。悪質性が高い引用である。

④ 大量の綺麗ごとを並び立てて読者を煙に巻く。

「妙法流布に生き抜く最極の人生を教えてください、くださった戸田先生に、私はお仕えしました」(同書, p. 84)

「戸田先生が未来のために構想されたことは、もれなく、わが生命に刻みつけてきました」(同書, p. 104)

「私の夢は、戸田先生の夢を実現することです」(同書, p. 105)

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

その19：『世界の青年と共に新たな広布の山に登れ』の諸問題

この書物も「御書根本」の名目の下に、文上の法華經の世界觀である『釈迦の弟子日蓮』、

『釈迦の弟子地涌の菩薩』を執拗に説いているのである。その箇所を引用しよう。

「地涌の菩薩は、第二に、仏が久遠に成道して以来の直弟子であり、ずっと一緒に戦ってきました。いわば永遠の師弟共戦の旅を続けているのです」

「久遠より「大地の底にかくしおきたる真の弟子」の偉大な姿です。とともに「五百塵点劫よりこのかた御弟子とならせ給いて一念も仏をわすれずまします大菩薩」と仰せの通り、久遠の仏と強い絆を持っています。そして末法に願って生まれる甚深の宿縁と使命を持った菩薩なのです」(同書, p. 65)

そして戸田先生の講義を参考文献の提示をせず、次のように引用する。

「ゆえに戸田先生は、今まさに「化儀の広宣流布」のために、地涌の菩薩が必ず躍り出てくる時であるとし、親しく同志に呼びかけられました。「地涌の菩薩の皆さん、やろうではないか」と」(同書, p. 65)

これはどこから引用されたものかと探してみると、戸田城聖全集4巻, 大聖人様とのお約束, p. 362-364 であることがわかる。

この戸田先生の講義のタイトルそれ自体が示しているように、久遠の過去以来「**大聖人様とのお約束**」で地涌の菩薩は末法に出現しているわけであり、釈迦とのお約束ではない。この点をこの講義は歪めているのである。更に戸田先生の講義に重要な箇所がある。

「もし出てこなければ、大聖人様とのお約束を破ったことになり、御本尊様に申しわけがない」(同書, p. 364)

文脈から大聖人即御本尊様である。この重要な発言も『世界の青年と共に新たな広布の山を登れ』は完全に無視しているのであり、悪質である。又、この教学書にはこうある。

「現代において、大聖人の「地涌出現して弘通あるべきことなり」との御聖訓のままだに、妙法を世界中に弘めてきたのは創価の師弟だけです。戸田先生が獄中で「**我、地涌の菩薩なり**」と覚知され、私たちに伝授して下さった通り、なんとありがたく、なんと尊い使命でしょうか」(同書, p. 99)

何度もいうが、戸田先生が獄中で得た悟りとは「久遠の過去以来「**大聖人様とのお約束**」」(戸田城聖全集4巻, p. 362)である。インドの釈迦などではない。この本は平然とこのような欺瞞を吐いているのである。

又、この本にはこうある。

「戸田先生が「大白蓮華」の創刊号において筆を執られた巻頭論文も「生命論」でした。生命をどう説くのか。永遠性をどう明かすのか。そこに宗教の価値が問われます」（同書, p. 35)

では戸田先生の生命論にはどのように説かれているのであろうか。生命論にはこのようにある。

「仏を中心として展開する釈尊の一念三千は、本迹ともに理上の法相であり、凡夫の当体本有のままにおいて身につける大聖人の直達正観事行の一念三千こそ、もっとも生命の実体をより本源的に説き明かされているものと拝する」

即ち、生命論を釈迦の理の一念三千しか説いていない『世界の青年と共に新たな広布の山に登れ』は、未熟で不完全なものであり、この類の教えを広める宗教に価値はないと断言できるであろう。なおこの教学書には最後の講義にこうある。

「若き日より、戸田先生をお護りするためにわが身をなげうち、一日一日、悔いを残さな

いとの決心で一心不乱に戦ってきました」
(同書, p. 149)

このような劣悪極まる講義を遺したこの本の
筆者は、永遠に人生に悔いを残すであろうと
思うのは果たして私だけであろうか。

以下はまとめである。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

おかしい講義まとめ：その19

① 釈迦の弟子地涌の菩薩という文上の法華
経を説く

② 戸田先生の講義を参考文献の提示をせず
に引用する

③ 久遠の過去に大聖人と約束した（釈迦で
はない）という引用元の戸田講義の重要箇所
を完全無視する。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

その20：勝利の經典御書 に学ぶ19巻の諸問題

この教学書に次のような箇所がある。

「私は誓いました。「師弟ノ道ヲ、学会永遠ニ、留メオクコト」**久遠の師匠から、久遠の弟子に妙法流布の誓願と使命を付嘱すること**は、法華經の最重要のテーマです」（同書、p. 91）

この付嘱こそが法華經における最重要のテーマとのことだが、誰から誰に対して付嘱されたのか、この点が極めて重要である。今まで戸田先生の講義を見てきたことからわかるように、末法の御本仏日蓮大聖人から、我々に対して付嘱されたというのが、元来の創価学会の教えであった。ところがそれがコッソリ

変えられているのである。それが続きの箇所である。

「この師弟の原理を末法今時に移して、釈尊、そして日蓮大聖人の御遺命である広宣流布の大願を遂行するために出現したのが、わたしども創価学会なのであります」（同書, p. 91）

文脈から、釈尊から日蓮大聖人に付嘱され、それを末法の現在に移したという釈迦本仏論が講義されている。加えて少しこの文章の少し手前に、

「日蓮大聖人は、釈尊から上行菩薩に託された妙法の血脈を万人に聞かれました」

（同書, p. 87）

とあるので、これで釈迦本佛論を説いていることが確定してしまう。そしてこの項は、次のようはことが平然と述べられているのである。

「「師弟ノ道ヲ、学会永遠ニ、留メオクコト」

戸田先生から直々に「生死一大事血脈抄」の講義を受けました」（同書, p. 90）

ではその戸田先生の生死一大事血脈抄の講義には釈迦から日蓮大聖人への血脈相承はなんと説かれているのか。それが次の箇所である。

「多宝如来と釈迦如来の二仏が宝塔品のなかでうなずきあって、そして南無妙法蓮華經という御本尊を上行菩薩に渡した。これが**法華經の表**であります」（戸田城聖全集 7 卷, 生死一大事血脈抄, p. 455）

ここで重要なのは「法華經の表」という戸田先生の発言である。ようするに釈迦から上行に付嘱されたという教えは文上の法華經に他ならない。では文底の法華經はどうなのか。戸田先生の講義の続きにはこうある。

「宝塔の中に、あなた方の体のなかに釈迦、多宝の二仏がおすわりになって、上行菩薩という方と呼ばれた。これがまた問題なのです。そこまでやかましくいうと、いつになっても講義が終わらないことになりますが、四菩薩を常樂我淨に配されますが、上行菩薩という方は**常樂我淨のなかの我**という存在です。それに向かって**妙法蓮華經の五字**を授けられたというのです。ですから遠遠劫より離れざる血脈、生命なのです。南無妙法蓮華經という生命なのです」（戸田城聖全集 7 卷, 生死一大事血脈抄, p. 456）

実は、2010 年以前、この釈尊から上行への付嘱を完璧に説いた池田先生の講義があるので、それを上記の戸田先生の講義と比較してみよう。

「釈尊より上行菩薩として付嘱を受けたのは、外用の立ち場であり、さらに、深く御内証の辺より論ずれば、日蓮大聖人は、釈尊をはじめ、十方三世の諸仏を出生し、これらの仏の一同に帰一していくべき、久遠元初の白受用身の再誕であられる。この立ち場より論ずれば、あの靈鷲山会の儀式は、教相の辺、文上の辺は論外として、観心の辺、文底の辺より論ずれば、全く久遠元初の儀式であり、**釈尊より口決相承したという、この釈尊は、久遠元初自受用身如来であらせられる。上行菩薩として付嘱を受けたとは、生命論からいえば、上行とは我をあらわし、三世常住に続きゆく生命の本質に、久遠元初自受用身如来の生命を受け継がれたと拝すべきか**」（御義口伝講義下, p. 258）

これらの講義は全く別の御書に關してのものだが、釈尊から上行菩薩に付嘱されたというのは文の表に現れる教えであり、その文の底に秘められた真意は、上行菩薩とは自分自身（我）を表し、己心にある文底の教主釈尊から南無妙法蓮華經を授かったという教えであり、両者に完全に共通しているのである。観心本尊抄に次のような有名な御文がある。

「一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠を裹み末代幼稚の頸に懸

けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護し給わんこと太公周公の文王を摂扶し四皓が恵帝に侍奉せしに異ならざる者なり」（旧版御書, p. 254-255)

妙法蓮華經の内に一念三千の珠を裹むとは、御本尊の主題の「南無妙法蓮華經 日蓮」の左右に一念三千を顕す諸天善神を配置して御本尊を完成させ、それを「末代幼稚の頸に懸けさしめ給う」、即ち、末法の一切衆生にこの御本尊を授与するという意味である。従ってこの「仏」とは大聖人に他ならない。従って、2010年以前の戸田先生の講義も、池田先生の講義も、御書に照らして全く正しいということがいえるのである。

「師弟ノ道ヲ、学会永遠ニ、留メオクコト」という言葉は（池田大作全集 36 卷、若き日の日記, p. 195)に収められた言葉だが、この若き日の誓いを、忠実に池田先生は果たされていたことが、これらの二つの講義の比較から読み解けるのである。

そもそもこの日記の同日日には、「六時、本部にて講義。「諸法実相抄」学会ノ使命、折伏法ノ徹底アリ」（同書, p. 195)とあり、この諸法実相抄から「釈迦の弟子日蓮」という概念を導くことは不可能である。

勝利の經典御書 19 卷のこのお粗末な講義は
一体なんであるのか。
そして重要な観点は、インドの釈迦は本尊そ
れ自体を作成していないという事実である。
文字曼荼羅を顕したのは大聖人その人であり、
従って先ほど引用した観心本尊抄の御文の
「仏」とは、大聖人と読む以外になるのであ
る。しかしあの御文を、インドの釈迦から一
切衆生に文字曼荼羅と一尊四士（釈迦の仏
像）の二つの形態の本尊を授与した、と読む
のが身延流であり、これとほぼ同じ解釈に近
づいているのが 2010 年以降の創価学会の教
義書なのである。「師弟（破壊）ノ道ヲ、学
会永遠ニ、留メオクコト」とでもいうべき酷
い書物群である。今までの議論をまとめてお
こう。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

おかしな講義まとめ：その 20

- ①「久遠の師匠（釈迦）から、久遠の弟子
（日蓮）に妙法流布の誓願と使命を付嘱する
ことは、法華經の最重要のテーマ」と、文上
の法華經を説く

② 「師弟ノ道ヲ、学会永遠ニ、留メオクコト」という若き日の日記を掲載し、戸田先生の生死一大事血脈抄に言及する

③ 「法華經の表」（文上の法華經）のみを言及して、この戸田講義で取り上げられた文底の法華經の世界觀を完全無視する。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：
：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

戸田・池田講義書き換えから読み解く現在の創価学会の新教義

ここでは、戸田・池田講義を何の説明もなく書き換えた内容に焦点を絞り、そこから現在の創価学会の教義の背後にあるものを暴いていく。なぜ私が書き換えた部分に焦点を当てるのか。それは、「この箇所の戸田の考えは誤りだ」「この部分の池田の考えも誤りだ」という、これら2010年以降に作られた書物の編集者たちの本音が出てしまっていると考えられるからである。そしてそこに、牧口・戸田・池田先生と受け継がれてきた日興門流

の根本教義の転覆と破壊が隠されていると思われる。まずはこれから取り上げよう。

その一

「御書のどこを拝読いたしましでも、われ仏になって、靈山でおまえらを救ってやるとか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になれるだろうと書いてはいないのであります」（戸田城聖全集5巻、法華經寿量品講義, p. 432)

大聖人は既に仏だが、菩薩行を行い、凡夫と共に歩む、と戸田先生は御書を解釈されている。これを巧みに書き換え、意味を180度反転させ、参考文献の提示をせずに改竄した文章が以下になる。

「御書のどこを拝しても、大聖人は、＂私は、既に仏なのだから、みんなを救ってやろう＂などとは、おっしゃっておりません」（世界広布新時代の指針, p. 115、大白蓮華 2019年1月)

ようするにこの本の作者は次のようなことをいっているのである。

御書のどこを読んでも大聖人は仏だなどと述べられていない。単なる大菩薩であり、これから修行することで将来仏になる（死んで成仏したから現在御本仏）

これほど戸田先生を見下す増上慢の講義はあるまい。しかも「戸田先生が未来のために構想されたことは、もれなく、わが生命に刻みつけてきました」（同書, p. 104）などと記述しているのだから、開いた口がふさがらないのである。まとめるとこうなる。

新教義その1）「日蓮大聖人は御本仏などではなく（そのような主張は御書のどこにもない）、単なる日蓮大菩薩。でも、難に負けずに仏法を弘めて現在は既に成仏してるから御本仏（名目だけ）」

これがどうやら創価学会の新教義のようだ。なお、この低劣な主張の破折は、既にこの書物、及び「釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群」で述べているので、これ以上は破折する価値なしである。

なお、実は同様の思想が宮田論文にも現れているので、参考までにここに引用しておこう。

<https://miya33x.littlestar.jp/qanda-shukyogakkai.html>

「大聖人自身は、自分を本仏だとは自認していなかったのであり、むしろ久遠実成釈尊を「円仏」「純円の仏」と呼んでおり、「本仏」という用語は使用していませんが、久遠実成の釈尊を根本の仏であると認識されていたということです」

「創価学会では、日蓮大聖人を『末法の御本仏』として尊崇しています。」とあり、日蓮大聖人自身が日蓮本仏論を持っていたという立場ではなく、創価学会の信仰のあり方として日蓮本仏論を採用するという立場を明示しています」

「大聖人自身は、自分を本仏だとは自認していなかった」「創価学会の信仰のあり方として日蓮本仏論」これは偽装日蓮本佛論そのものであり、身延の日蓮大菩薩論よりも劣る不正直な議論であり、純粋な創価学会員に対する騙しと批判されても文句はいえないであろう。

その二

新版法華經講義では、旧版の重要箇所委が次のように書き換えられている。

旧版法便品・寿量品講義二卷, p. 25-26
「日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持されていた」

「日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經と一体となられた」（新版方便品・自我偈講義, p. 186）

旧版では、日蓮大聖人は永遠の過去から南無妙法蓮華經を所持されていた根本の仏ということ述べているのである。しかし新版では、「一体となられた」即ち、日蓮大聖人は遠い過去では南無妙法蓮華經を所持しておらず、それを釈迦から渡されて一体になったという文上の法華經論に変えられているのである。更に問題なのは、釈迦から渡されて一体になったのであるから、ここで大聖人を祈りの存在とする教義は絶えるのである。

この件に関して、かつて池田先生は次のように述べられていた。

名誉会長： 「（釈迦から南無妙法蓮華經を）「渡された」というところが、誤解を招きやすい。上行菩薩は本来、もともと、南無妙法蓮華經の当体です。もともと持っておられる法であるが、末法に南無妙法蓮華經を弘めていく資格というか、立場を確かに認められているという「証拠」を示す儀式なのです」

（法華經の智慧 5 卷, p. 216）

この本の編集者らは、この池田先生の講義を宗門教学のレッテルの下に否定したいのだろうか？しかも読者に対しては何の説明もないのである。この改変から、創価学会の次のような新教義像が浮かび上がるのである。

新教義その2）日蓮大聖人は根本仏釈迦から南無妙法蓮華經を渡され、それと一体になった大菩薩（現在は一応成仏したので御本仏）。我々の先輩に過ぎず、祈る対象ではない。

なお、同じような思想が宮田論文に現れているので、それを参考としてあげておこう。

<https://miya33x.littlestar.jp/qanda-shukyogakkai.html>

「妙法五字は大聖人の独創ではなく、久遠実成釈尊から継承したのだという立場です。」もし妙法五字が大聖人の独創ならば、それは釈尊と無縁であり、仏教ではないと批判されるのは当然のことです。大聖人はあくまでも仏教という立場を保持しつつ、独創的な妙法五字の修行を主張するために、上行所伝という立場を採用されたと思われます」

その三

「文底」とは、**經文の本義**を示しています。末法の一切衆生を救済する**根源の法**を明示しているのです。」

これは新版法華經講義, p. 176 に何者かが挿入したものであり、原版である旧版二卷, p. 13 には存在しない。僅か一行の文であるが、ここに恐るべき邪義が述べられている。「文底」＝經文の本義であり、そこに**根源の法**が**明示されている**のであれば、文底の南無妙法蓮華經とは、既に法華經の文の上に顕在化された法でなければならない。

要するに、文の底に秘められた教義など存在しない。御書の文底読みなど誤りだ、という意図がここから読み解けるのである。事実、月も日も共に法華經に喩えられる（第三の法門を無視）、釈迦が船頭する創価の船、仏法は釈迦で僧宝は日蓮大聖人、南無妙法蓮華經は釈迦の所有物。大菩薩である大聖人に渡された等の2010年以降の怪しい教学書の主張は全て、この天台の法華經、文上の法華經がベースになっているのである。なお、戸田先生は文底を説かない講義を次のように痛烈に批判されていた。

「大聖人の南無妙法蓮華經は三大秘法の大法であるから、文底の南無妙法蓮華經を唱えない者は、たんに南無妙法蓮華經と唱えたところが、生命を浄化しようはずがない。生命を浄化できないとすれば、**なんの価値もない宗教**である。いな、大聖人の開目抄におおせのごとく邪宗と呼ぶ以外にはない。邪宗なら、大聖人のおおせのとおり**仏敵であり、人類の敵である**」（戸田城聖全集3巻、幸福論，p. 38-39）

「何の価値もない宗教」「仏敵であり、人類の敵」これこそが、文底を説かない教学書の真の正体である。文底を説かないとどうなるかということ、その13で議論したように、池田先生がちゃんと言及されている。「安国院

日講も録内啓蒙 卷第十五の中でそれまでの解釈を列挙しつつ、結局は「祖意 測り難し、故に衆義並び存して後賢の研かくに備う」と述べ、自ら正解を放棄して後世に委ねざるを得なかった」（下山御消息に学ぶ一卷, p. 139）

ようするに御書の解釈に深刻な矛盾が生じ、理路整然とした御書解釈が完全に不可能になるのである。教学要綱も同様の矛盾を抱えており、一例としてあげるなら、釈迦は「永遠の仏」（同書, p. 28）と説いておきながら、「釈尊をはじめとして、あらゆる仏は『法華経』によって仏となった」（同書, p. 81）などというお粗末な自己矛盾をさらけ出している。文底を説かない故に生じた自己矛盾である。

ちゃんと文底を説いている！この批判は誹謗中傷だ！などという連中がいるかもしれない。たしかにそのような記述が新版法華経講義に存在している。旧版二巻, p. 16 に次のような講義がある。「寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華経を御自分の魂とし、その御生命を御本尊として顕されたのです」。そして新版, p. 179 にもこの記述が掲載されている。これで何が起きるかという、ここに自己矛盾させて、教学要綱同様に内部で論理的に崩壊させているのである。このように内部で自

己矛盾（しかも複数）させるとは、なんというお粗末な教学書なのか。これは要するに、新版法華経講義を新たな創価学会に教義に適応させるために、大量に改変した結果、過去の創価学会の教義との整合性が破綻したからであろう。同様の自己矛盾が、「人間革命の宗教」や「教学研鑽のために 観心本尊抄（第2版）」にも存在する。なんとお粗末なものを作成する連中なのか。この程度の連中だからこそ、偉大な戸田先生の講義をあざ笑うような引用を行うのだろう。まともな思考能力と信心があるならば、そのような行為は決しておこなわないのである。

新教義その3）文底読みなど存在しない、それは宗門教学に過ぎない。御書は文字通りに解釈すべき。釈迦の弟子日蓮、釈迦が船頭する創価の船、南無妙法蓮華経は釈迦の所有物、仏宝＝釈迦、一尊四土（釈迦の仏像）は辛うじて許される（謗法ではない）等

なお、文底読み否定の思想が宮田論文に現れているので、それを参考としてあげておこう。

<https://miya33x.littlestar.jp/paper15-3.html>

「文底読み」という学術的な専門学会では認められない独自の解釈方法を採用しているの

で、私も反論のしようがないところがあるので今回は割愛させていただく」

文底読みを否定する宮田教授だが、この結果どうなったかというと、安国院日講氏と全く同様の問題を解決できないで、矛盾していると白状している（実は教学要綱も全く同様の矛盾を抱えている）のである。

<https://miya33x.littlestar.jp/paper15-2.html>

「もし後文の『釈迦』が前文の『本門教主釈尊』と同一対象を指すならば、**本尊とされた対象が脇士になるという論理的矛盾が生じる**」（宮田論文「『本尊問答抄』について」3-5 まとめ）

そして次のような暴論を吐いて終了しているのである。

<https://miya33x.littlestar.jp/paper15-3.html>

「4－2－8 「一体表裏観が基本思想」

「日蓮だって必ずしも整合的な思想展開をし

ているわけではないと想定するほうが、学者としてはふさわしい態度かもしれない。」
引用終わり

その四

新版法華經講義, p. 212 で次のような文章がある。

「「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すということではありません。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”です」

これを別の言葉で表現すれば、「久遠元初は久遠実成よりもさらに前を指すということではない。生命の根源の時だ」、即ち久遠元初＝久遠実成＝生命の根源の時＝無始無終となる。

一方で、オリジナルの旧版法華經講義二巻 p. 61 にはこうある。「「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すという**だけ**ではありません

。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば「生命の根源の時」です」

これを別の言葉で表現すれば、「久遠元初は久遠実成よりもさらに前を指すことに加え、生命の根源の時だ」、即ち、久遠元初＝生命の根源の時＝無始無終、久遠実成＝有始有終となる。

「だけ」を「こと」と二文字変えることで、意味を180度転換させているのである。学術的には改竄(falsification)とみなされる危険を伴うのではないか。同様の行為は「教学研鑽のために 観心本尊抄（第2版）」にもみられ、オリジナルの第一版を一字だけ改変することにより、意味を180度変えているのである詳しくは『創価学会教学要綱と、創価大学元教授・釈迦本佛論者の論文との比較検証』p. 155に譲る。

新教義その4) 久遠実成を始まりのある時間と考えるのは間違い。久遠実成は無始無終。釈迦は無限の過去から続く永遠の仏で、無始の古仏。日蓮は釈迦から題目を渡された有始の仏。

なお、同じ思想が宮田論文に掲載されているので、それを紹介しておこう。

<https://miya33x.littlestar.jp/paper15-3.html>

「五百塵点乃至」はその前の引用文の「我実成仏已来」を指す、すなわち「五百塵点劫」を指すと読解するのが素直な読みであると思っている。（ただし学問とは無関係な信仰に基づく宗派的な読み方を否定するものではない。）「無始の古仏」とは『法華経』を引用しているこの文脈では久遠実成釈尊のことであると解釈するしかないだろう」引用終わり

「釈迦は無限の過去から無限の未来に続く永遠の仏」であると、マレーシアの『イスラム国際大学』で講演した原田会長



2025年8月25日、聖教新聞に問題のある記事が掲載された。原田会長がマレーシアの『マレーシア国際イスラム大学』で、次のような講演をおこなったようである。その発言にこうある。

「本日は師・池田先生から学んだ人間主義の哲学の一端をお話させていただきます。
一、法華経では、釈尊が今世で初めて仏になったのではなく、無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」であることが明かされました」

この発言の何が問題なのかというと、このような思想は戸田先生の講義にはどこにも存在してないのである。具体的にその文証をこれから示そう。

①「この五百塵点劫以前のわれわれを觀するに、そのときは、晴れぼれした世界で、自由自在に何不自由なく、清く、楽しく遊んでおり、そのときの人々も、みなうるわしき同心の人々であったのだ」（戸田城聖全集一卷、価値創造, p. 342)

私見：五百塵点劫以前（当初）とあるので、久遠元初のことを戸田先生はいつているのである。五百塵点劫の時点で釈迦は成仏したのであるから、釈迦は有始有終の仏に過ぎない。

②「久遠即末法ということは、五百塵点劫を久遠と名づけるのではない」（戸田城聖全集二巻、生命の不思議をめぐって, p. 427)

私見：ここで戸田先生ははっきり言われている。「五百塵点劫は久遠ではない」と。釈迦は永遠の仏という概念はここでも見いだせない。

③「五、法華經本門の釈迦仏・・・五百塵点劫久遠実成の釈迦仏〈末法の衆生に縁のなき仏〉

六、文底下種の釈迦仏・・・久遠元初の自受用身 即日蓮大聖人(末法の御本仏)」

（戸田城聖全集 5 巻, 立正安国論議義, p. 75)

ここで戸田先生ははっきり言われている。**釈迦は末法の衆生には無縁である**と。これを徹底的に無視しているのが、2010年以降の創価学会の教学書なのである。

④「己来とは久遠元初いらい、すなわち 無始無終をさすのであります。日蓮大聖人は、釈尊が第一番に成道した五百塵点劫のもっと以前から、すなわち始めがない久遠元初から、種々の因縁、種々の譬喩を説かれてきたのであります」

(戸田城聖全集 5 巻, 妙法蓮華経方便品第二の講義, p. 299)

ここで戸田先生ははっきり仰られている。大聖人は無始無終の仏であり、釈尊は有始有終の仏である、と。これ以上分かりやすい講義もないであろう。

⑤「インドの釈迦如来の本地というものは、この次にやりますが、五百塵点劫に仏になったというのですが、日蓮大聖人のは、その以前に久遠元初という時に、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開かれたとおっしゃっております。釈迦如来のように修行をしたのではない、我が身が地水火風空、すなわち大宇宙それ自体の生命であるとお悟りになった、その時に定まってしまったのであります (中略) **教相のうえの釈迦如来は、**

五百塵点劫という区切りがまだあります。それでは、まだ生命に区切りがあって、ほんとうのものではないのであります」

(戸田城聖全集 5 巻, 妙法蓮華經如来寿量品 第十六の講義, p. 345)

私見：ここでも戸田先生ははっきりと仰られている。大聖人は無始無終の仏であり、釈尊は有始有終の仏であると。そしてその理由を、釈迦は長い長い修行をしてやっと仏になれたが、日蓮大聖人はそのような修行期間なしに、即座に悟りを得て仏となった存在であると、三世諸仏総勘文教相廃立の御文「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」(旧版御書, p. 568)を文証として議論されているのである。

現在の創価執行部は、身延の大崎ルールを用いて三世諸仏総勘文教相廃立の御書それ自体を否定したいのだろうか？しかし、この御書を否定したところで、既にその 12 で議論したように、観心本尊抄で全く同じ内容がみいだせるので、都合の悪い御書を全て偽書扱いする身延の大崎ルールに逃げ込んだところで、戸田先生の講義は正しいと証明できるのである。誤っているのは 2010 年以降の怪しい教学書である。

⑥「五百麗点劫の当初という時代があります。南無妙法蓮華經という仏は、五百塵点劫の当初、無始無終という時に御出現になったのであります。ですから、この本門の文上の仏といえども、久遠元初の自受用報如来の垂迹した迹仏ということになるのであります」（戸田城聖全集5巻、妙法蓮華經方便品第二の講義、p. 353）

私見：当初というのは古語で、それ以前という意味である。従って釈迦は有始有終の仏であり、迹仏であると戸田先生は仰られているのである。ここでもう一度、新版法華經講義、p. 212 を思い出してほしい。

「「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すということではありません。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”です」

旧版「A いうだけではありません」
新版「A いうことではありません」

二字をこのように書き換えることで、意味を反転させて戸田先生の講義を破壊しているのである。破壊しておいて、次のようなことを平然と述べているのである。

「本講義は、**第二代会長戸田城聖先生の講義も十分に踏まえながら**、二十一世紀の現代世界に向かって、**仏法**の人間主義を展開する内容となっており、「**師弟合作**」の法華經講義であるといえる」（新版法華經方便品・自我偈講義, p. 1-2)

この箇所は、次のように書き換えたほうが正解であろう（毒）。

「**第二代会長戸田城聖先生の講義も十分に否定しながら**、二十一世紀の現代世界に向かって、**仏法**の人間主義を展開しない内容となっており、「**師弟破壊**」の法華經講義であるといえる」

⑦「**釈尊の本地は五百塵点劫であるが、日蓮大聖人の本地は五百塵点劫のそのかみの久遠元初、すなわち無始の昔である。日蓮大聖人は久遠元初いらいの御本仏である。その南無妙法蓮華經仏からみると、五百墨点劫の釈尊も然燈仏もインドの釈尊も、すべて本仏たる南無妙法蓮華經仏の分身仏あるいは垂迹仏である**」

（戸田城聖全集 5 卷, 方便品寿量品講義, p. 460)

この戸田先生の講義はもはや説明不要であろう。他にも、同書, p. 424, p. 463, p. 495-496、戸田城聖全集 6 卷, p. 509, p. 510, p.

520, p. 521, p. 533, 戸田城聖全集 7 卷, p. 60, p. 188-189, p. 190-191, p. 232, p. 288-289, p.460, p. 608-609。

戸田城聖全集合計 2 2 箇所、**「大聖人は無始無終の仏であり、釈尊は有始有終の仏」と述べられているのである。原田会長のいう（釈迦は）「無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」」などという教えはどこにもない。仮にそのような教えを池田先生が説いたのであれば、池田先生は戸田先生に対して反逆したことになろう。それでは池田先生が戸田先生に反逆した講義はあるのか？それを探してみよう。**

①「釈迦仏法は、己心の永遠の生命観。五百塵点劫の生命論では、有始有終です。完全無欠の生命の尊厳とは、いいきれない」（会長講演集 1 2 巻, p. 298)

私見：きちんと戸田先生の教えを継承しておられる。釈迦が永遠の仏などとは述べていないのである。

②「釈尊の久遠論は、まだ、有始有終であり、日蓮大聖人の久遠論は無始無終であられる」（御義口伝講義上, p.512)

③「しかしながら、五百塵点劫という時を限定し、その時以前には仏ではなく、菩薩道を修行したと説いている。しかもその仏も色相莊嚴の理想仏の姿であった。これすなわち、五百塵点劫の仏は、作られた仏であり、垂迹の仏であることを示すものであり、無始無終の仏とはいえないのである。したがって、そこに、成仏の本源があるのでもなければ、成仏の実体があるのでもない。真実の無始無終の仏は、文底に説き明かされるのである」
(御義口伝講義下, p. 45)

私見：これらの御義口伝講義はちゃんと戸田先生の思想が受け継がれており、釈迦が永遠の仏などという講義は存在しない。他にも、同書, p. 48, p. 65, p. 162, p. 246, にも同様の議論がされている。

他にも「人」とは五百塵点劫の当初の古仏である久遠元初の白受用報身如来で「法」とは寿量文底独一本門の南無妙法蓮華經である」(池田大作全集 7 2 巻, スピーチ, p. 60)

及び、

「この經文を挙げて、「観心本尊抄」では「我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古仏なり」(二四 七ヅ)と仰せです。〈通解〉妙法蓮華經を受持する我等の己心の釈尊は五百塵点劫以前に法報応の三

身を成就した仏であり、無始無終の古仏である。 名誉会長 これは「永遠の法」である妙法蓮華經と一体の「永遠の仏」が、己心に現れたことを言われているのです。すなわち、久遠元初自受用身であり、「日蓮がたましひ」（一一二四頁）です」（御書の世界 2, p.159)

等が存在しているのである。

外部に対する講義として次のようなものも存在する。しかしである—「更に（法華經）後半では、無始無終の久遠の仏を説くことによって、生命の永遠性を示すのであります」（池田大作全集 2 巻, 記念講演, p. 281)

ここで池田先生がいう「無始無終の久遠の仏」とは日蓮大聖人を暗示していることは明白であり、釈迦などではないことは、御義口伝講義から明白である。そして、なぜ釈迦が永遠の仏などではないかと明快に説ききったのが、法華經の智慧である。

「しかし永遠性といっても、完全に永遠ではない。どこまでも『有始(始めがある)』の仏です。だから無始無終の宇宙即妙法と一体とは言えない。『すき間』がある」（法華經の智慧 5 巻, p. 277)

「では永遠の仏を説くにはどうすれば良いか」といって、『仏因』に『仏果』を認めなくてはならない」(同書, p. 212)。「この「因位(仏因の位)の仏」——それが上行菩薩です。『因果俱時の仏』です。上行菩薩が出現しなかったならば、無始無終の本仏は示せないのです」(同書, p. 212-213)。

詳しくは法華経の智慧5巻に譲るが、これほど完璧に、なぜ菩薩仏であられる日蓮大聖人が金ぴかの仏である釈迦よりも上の位であるのかを説ききった講義はなく、見事なものではないか。戸田先生もきっと賞賛されていると思う。さて、どこに原田会長がいう「釈迦は無限の過去から無限の未来まで常に存在する永遠の仏」などという池田先生の講義があるのであろうか。

調べてみると、初めて五百塵点劫を無始と解釈し、戸田先生の教えに背いた教義が登場するのは、大白蓮華 2017 年 9 月号、しかも本文ではなく、註解にひっそりと登場するこの箇所ではないかと思われる。なぜ今までの説明を 180 度覆したのか、その説明もないのである。

①「【無始の古仏】久遠の仏のこと。寿量品で説かれた五百塵点劫成道の仏をいう。「無

始」とは始まりがないこと。始まりのないほどの久遠から続いているということ」（人間革命の宗教, p. 249, 大白蓮華 2017 年 9 月号, p. 17）

しかも観心本尊抄の現代語訳では「五百塵点劫以前の昔」（人間革命の宗教, p. 237）として、ここで自己矛盾させて潰れているのである。なんとお粗末な教義書であろうか。2010 年以前で、このようなお粗末な池田先生監修を名乗る教義書を私は一冊も知らないのである。

次に釈迦が無始無終の仏であるという概念が登場するのは、2022 年発刊の新版法華経講義ではないかと思われる。だがこの教学書は極めて問題の多いものである。旧版法華経講義二巻, p. 61 「久遠よりもさらに前を指すというだけではありません」の「だけ」を、新版法華経講義では「こと」に書き換えて次のように提示。

②「「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すということではありません。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”です」（新版法華経講義, 2022, p. 212）

この改変により「久遠実成」が「久遠元初」と同様の意味を持つようになり、読者には何の合理的な説明もなく、密かに釈迦が無始の仏に格上げされているのである。
これが創価学会の教学書に二回目に登場する「無始無終の仏・釈尊」という概念になる。

③ 「釈尊の本来の真実の境地（本地）は、無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」」（教学要綱, p. 28）

釈迦を無始無終の仏と言い出したのは、どうやら実質的には教学要綱が初めてのようだ。

④ 池田大作先生監修創価学会教学部. 現代語訳 観心本尊抄（第1版）（2018, p. 100）
「五百塵点劫以前の昔」

しかし、池田先生が亡くなられた後、2024年7月発刊の二版では「五百塵点劫の昔」創価学会教学部. 現代語訳 観心本尊抄（第2版）（p.48）. 聖教新聞社. Kindle 版 と書き換え。この改変により、五百塵点劫＝無始となり、釈迦が無始無終の根本仏と読めるように変えている。

これらの主張は、池田先生のこの講義で完全に破折されてしまう極めてお粗末なものである。

「永遠といえども、いまだ五百塵点劫というように時を限定しているゆえに、いかにその時が長遠であっても、これでは 本当の無始無終の生命観にはならない」(御義口伝講義上, p. 215)

こうしたお粗末な講義を池田先生がする道理はなく、誰が責任者であるのかが問われるだろう。

2010 年以前に「永遠の仏釈尊」 「釈迦の弟子日蓮」と記述され た教義書の諸問題—2010 年以降 との決定的な違い

2010 年以前にも、池田大作先生監修の書物の中に、「永遠の仏釈尊」或いは「釈迦の弟子日蓮」という類の記載は登場する。具体例は次の箇所である。

①「娑婆世界〈注2〉の仏であり、かつ永遠の仏である久遠実成の「釈迦仏」から伝えられる法でなければ、娑婆世界の人を生死の苦から救う正当の法とは言えません。寿量品に

示されるように、釈尊自身が「永遠の妙法」と一体化した「永遠の仏」である」（2008, 生死一大事血脈抄講義, p. 33-34）

②「上行菩薩が、久遠以来の釈尊の弟子として抜かれて、身に「永遠の法」を所持している菩薩である」（同書, p. 36）

③「寿量品では、釈尊が久遠五百塵点劫という過去遠遠劫に成仏して以来、永劫の未来まで、すなわち実質的には無始無終にわたり、仏の生命が続くことが説き示されています」（同書, p. 86）

これらはどう考えるべきであろうか。まず①と②であるが、p. 36 にきちんとこう説明されている。「**法華經の教相**からいっても、上行菩薩が、久遠以来釈尊の弟子・・・」。即ち、これは文上の法華經の世界観ですと、きちんと池田先生は言及されているのである。

③に関しては無始無終とは述べつつも、「**五百塵点劫以前**のわれわれを觀ずるに、そのときは、晴ればれした世界で」（同書, p. 55）と、久遠実成以前の世界観がきちんと、戸田城聖全集一卷という参考文献を提示しつつ、述べられているのである。一方で既に述べたように、勝利の經典御書に学ぶ8巻(p. 71)及び同11巻, p. 14巻では、参考文献の提示が

行われず、「**五百塵点劫以前**のわれわれを
観ずるに、そのときは」の重要箇所がカット
され、「晴れ晴れした世界」から引用されて
おり、まるで違う引用法となっている。「実
質的には無始無終」と池田先生はおっしゃら
れているが、これは文底の法華經に来て初め
てこのように解釈できるのであり、五百塵点
劫以前を説かない釈迦の仏法ではこのように
解釈することは不可能である。この件に関し
て、同御書の講義で戸田先生がこのように講
義されているので、これが良い参考になるだ
ろう。

「**天台学を学んだ最蓮房では五百塵点劫より
知らないのです。その五百塵点劫より！知ら
ない、その人に向かって、法華經を離れて説
明のしょうがないものですから、教相の段か
ら説明**なされまして、みな仏道を成ずるとい
う法華經と、久遠実成と申しますれば、釈迦
仏法では第一番成道の釈尊をたてます」（戸
田城聖全集 7 卷，生死一大事血脈抄講義，p.
460）

なお結論をいうならば、2008 発刊の生死一
大事血脈抄講義も法華經の智慧等同様に、日
蓮本佛論をちゃんと説いているのである。そ
れらの文証を示しておこう。

①「一人一人が妙法の当体として、**日蓮大聖人即御本尊**の生命が赫々と湧現し、妙法と一体の生命活動を繰り広げているのです（同書、p. 92）

私見：人法一箇を池田先生はここで説いている。これにより根本仏であり祈る対象である日蓮大聖人という根本教義が確定する。

②「大聖人は仰せです。「されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華經なり」（御書七五一頁）ここに「**本法所持**」とあります。**南無妙法蓮華經を修行する地涌の菩薩は、すでに妙法を所持しているのです。**であるがゆえに、一人から一人へ、生命から生命へという妙法の弘通が可能なのです」

私見：釈迦から大聖人に南無妙法蓮華經が渡されたというのはあくまでも文上の法華經の世界観であり、本来は無限の過去から妙法を所持していたのである。そのことを池田先生は御義口伝を通して解説されている。これは次の書き換えとは対象的であり、2010年以降の教学書の異常さを端的に表しているといってよいだろう。

「日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持されていた」（旧版法便品・寿量品講義二卷, p. 25-26）を「日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經と一体となられた」（新版方便品・自我偈講義, p. 186）と書き換え。

③「本果妙の仏から本因妙の仏へ」（同書, p. 189)

私見：これには深い説明はもはや不要であろう。詳しくは池田先生の講義を読むべきであり、日蓮勝・釈迦劣となっているのは明白である。

④「さらにまた、釈迦・多宝によって象徴される「本果妙の仏法」は、因の立場にいる現実の人間にとっては、**はるか天空の本果を仰ぎ見るしかない教法**です。それに対して、「本因妙の仏法」では、上行菩薩が先駆けて身をもって体現した「因果俱時の妙法」を弘めるのです」（同書, p. 192)

私見：この講義は、大聖人を根本の仏、自受用報身如来、或いは人法一箇とみるのは『宗門教学』であり、『大聖人の神格化』であるとする現在の創価学会執行部を直撃しているのである。皮肉なことは、本果妙の仏法であ

り教主である釈迦を根本の仏とみなすことこそが、仏の神格化であり、五老僧の教えであるとなせよう。

『釈迦の久遠の弟子、釈迦から遣わされた使徒地涌の菩薩』という教えの誤りと、その正体

この説明は、既に私の著書、『『創価学会教学要綱と、創価大学元教授・釈迦本佛論者の論文との比較検証』, p. 150 で既に述べたのだが、極めて重要なのでここに引用しておこう。

「彼ら（教学要綱編集者及び身延派）は「釈迦の弟子日蓮」或いは「釈迦の使い日蓮」という概念を述べた湧出品の略開近顕遠が、大聖人の一品二半から外されていることが念頭にならないのではないだろうか。即ち、そう記述された一品二半は大聖人の法華経に含まれていないのである。

戸田先生は次のように講義されていた。

「（弥勒菩薩が）この大菩薩だけは知らない」といえば、仏の説くには「これが私が仏になったとき、いちばん先に教えた弟子だ」

といました（中略）ここからが天台の一品二半の前半品になるのであります。日蓮大聖人は、この部分を一品二半に入れておりません」（戸田城聖全集5巻、方便品寿量品講義，p. 329）

従地涌出品の略開近顕遠と動執生疑は、開目抄にはより具体的に次のように説かれている。「此の大菩薩は彼等にはにるべくもなき・ふりたりげにまします定めて釈尊の御師匠かなんとおぼしきを令初発道心とて幼稚のものども・なりしを教化して弟子となせりなんど・をほせあれば・大なる疑なるべし」（旧版御書，p. 212）

略開近顕遠は、戸田先生の講義の解説に沿うならば、開目抄の次の箇所相当する —

「令初発道心とて幼稚のものども・なりしを教化して弟子となせりなん」、即ち、釈迦の弟子日蓮、釈迦の使い日蓮という教学要綱で盛んに主張されている内容である。しかしこの箇所が大聖人の法華経から消えるとなると、残るのは動執生疑の次の箇所のみとなる。

「此の大菩薩は彼等にはにるべくもなき・ふりたりげにまします定めて釈尊の御師匠かなんとおぼしきを」 引用終わり

つまり、天台の法華経と大聖人の法華経では主人公が入れ替わっているのである。従って、久遠から釈尊が育ててきた偉大な弟子・地涌

の菩薩、などと説くことは天台の法華經、即ち五老僧の邪義となるのである。これこそが、2010年以降にあらわれた怪しい教学書群の正体である。戸田先生は次のような鋭い言葉を遺された。

「広宣流布の最後の敵というのは内にこそある。城者の裏切りが城を破るのだ。あの五老僧を見たまえ。五老僧は過去の話ではない」
(戸田先生『人間革命』第12巻, p. 319)

最後に

最近創価学会では、過去の都合の悪い戸田先生、池田先生の教学を全て『宗門教学』『大聖人の神格化』というレッテル貼りの下に切り捨てようとしている。しかしそのような行為を、五老僧の姿を通して池田先生は厳しく批判していたのである。それが以下のスピーチである。

「（日向は）大聖人の教えを守り、弘める立場にありながら、かえって先師の教えをゆがめ、勝手に改変するとは。まさに「天魔」のなせるわざであり、「師敵対」「七逆罪」と

いう極悪の僧である、と。史実には、重要な教訓がある。その一つは、師匠の死後、師敵対する人間は、どんな文証があっても、『それにはもっと深い意味があるのだ』などと言って、自己を正当化する」という行動パターンである。仏法上、師敵対の罪は重い。仏法の生命を殺すととになるからである。私の師匠が何を書いているように、今は私の言うことを聞け」と、自分の邪見を通そうとする。都合の悪い文証を出されると、「それは一面的な読み方。真意(至極)は別にある」とごまかす」

(池田大作全集 78 巻, スピーチ, p. 439)

釈迦も日蓮も同じ位の仏（そもそもこの主張は教学要綱の p. 78 「それらの釈尊よりも優れた仏格（仏の位）を持つ「寿量の仏」」という記述と矛盾する）という主張をしておいて、過去の池田先生の講義の文証「日蓮大聖人は、釈尊よりも百千万億倍すぐれた御本仏である。大聖人に相対すれば、(釈尊は)迹仏である」(『御義口伝講義』上 p. 770)等を出されたら、「それは大聖人の神格化なので、現代では通用しない教えだ」「それは宗門教学だ」「それはもはや現代にはあわない月のような教学だ、科学の進展と同様、教学も常に最先端をいくものでなければならない」等々ともっともらしい理由を並べる行為。これらこそが、池田先生の言う「都合の悪い文

証を出されると、「それは一面的な読み方。真意(至極)は別にある」とごまかす」五老僧そのものの行為ではないのか。こうした主張の下に、過去の教義、しかも根本の教義を何ら説明もなく変えることは決して許されることではなく、創価学会の内部に生まれた五老僧の所為と断じて間違いないだろう。最後に池田先生の遺言ともいうべき言葉を引用して、この論文を終わろう。

「戸田先生が厳しく言われた通りである。『敵は外部にある ように見えるが、最も悪質な敵は、内部に出る』。だから、毒を撒き散らす内部の敵とは戦わなければならない。放っておいたら、毒がいつしか充満し、皆の純粋な信仰が破壊されてしまうからだ。ゆえに師敵対の輩とは断固、戦い続けるしかない」(池田先生「大白蓮華」 2008.5 p.56)

参考文献

- 池田大作『御義口伝講義』上 創価学会(1967年)
——『御義口伝講義』下 創価学会(1968年)

- 『池田大作全集』全 150 巻 聖教新聞社
1988 年-2025 年
- 『会長講演集』第 1 巻 聖教新聞社 1961
年
- 『会長講演集』第 1 2 巻 聖教新聞社
1965 年
- 『人間革命』第 2 巻 聖教新聞社(1966
年)
- 『人間革命』第 2 巻 ワイド文庫 聖教新
聞社(2014 年)
- 『人間革命』第 9 巻 聖教新聞社(1975 年)
- 『人間革命』第 12 巻 聖教新聞社(1993
年)
- 『広布第二章の指針』第 9 巻 聖教新聞社
(1977 年)
- 『広布と人生を語る』第 3 巻 聖教新聞社
(1982 年)
- 『広布と人生を語る』第 10 巻 聖教新聞
社(1987 年)
- 『下山御消息に学ぶ』第 1 巻 聖教新聞社
(1991 年)
- 『本尊問答抄に学ぶ』下 聖教新聞社
(1991 年)
- 『治抄抄に学ぶ』 聖教新聞社(1997 年)
- 池田名誉会長の法華経方便品・自我偈講
義第 1 巻 聖教新聞社(1995 年)
- 池田名誉会長の法華経方便品・自我偈講
義第 2 巻 聖教新聞社(1996 年)
- 池田名誉会長の法華経方便品・自我偈講

義第3巻 聖教新聞社(1996年)
——『新・人間革命』第27巻 聖教新聞社
(2015年)
——『法華經の智慧』第4巻 聖教新聞社
(1998年)
——『法華經の智慧』第5巻 聖教新聞社
(2000年)
——『御書の世界』第2巻 聖教新聞社(2004
年)
——『御書の世界』第3巻 聖教新聞社(2005
年)
——『生死一大事講義』聖教新聞社(2008年)
——『勝利の經典「御書」に学ぶ』全22巻、
聖教新聞社、2011年-2016年刊
——『人間革命の宗教』聖教新聞社(2019年)
——『世界広布新時代への指針』聖教新聞社
(2020年)
——『新版 法華經——方便品・自我偈講義』
聖教新聞社(2022年)
——『未来の希望「正義の走者」に贈る』聖
教新聞社(2022年)
——『誰もが輝く「人間主義の世紀」へ!』
聖教新聞社(2022年)
——『広布共戦の師弟旅』聖教新聞社(2023
年)
——『世界の青年と共に新たな広布の山に登
れ!』聖教新聞社(2024年)
——『我らは地涌の菩薩なり』聖教新聞社
(2025年)

——『幸福と価値を創造する仏法』 聖教新聞社(2025年)

——『御書と師弟新版』(2025年) 聖教新聞社 (Kindle 版)。

『大白蓮華』 聖教新聞社 1977 年 1 月号

『大白蓮華』 聖教新聞社 1977 年 2 月号

『大白蓮華』 聖教新聞社 2008 年 5 月号

『大白蓮華』 聖教新聞社、2010 年 1 月号-
2024 年 12 月号 (通巻)

戸田城聖『戸田城聖全集』全 8 巻 聖教新聞社
1981 年-1990 年刊

牧口常三郎『牧口常三郎全集』第 8 巻 第三文
明社(1984 年)

——『牧口常三郎全集』第 10 巻 第三文明社
(1983 年)

小林正博 (2014) 『日蓮の真筆文書をよむ』
第三文明社

中村誠 (2025) 『『創価学会教学要綱』の意
味するもの— 牧口・戸田・池田三代会長の書
物 50 冊余りとの比較検証』 Kindle 版

(Amazon Kindle Direct Publishing)

——(2026) 『「創価学会教学要綱」と創価大
学教授・釈迦本 仏論者の論文の比較検証』

Kindle 版 (Amazon Kindle Direct
Publishing)

——(2026)『釈尊が舵を取る創価の船？『創価学会教学要綱』を中心にした 異様な書物群』検証 Kindle 版 (Amazon Kindle Direct Publishing)

聖教新聞 (2025) 「マレーシア国際イスラム大学思想・文明 研究所での宗教間交流行事」
『聖教新聞』2025 年 8 月 25 日 付, 5 面。

創価学会教学部編『編年体 日蓮大聖人御書』
創価学会(1973 年)
『日蓮大聖人御書全集 新版』創価学会(2021 年)

日蓮大聖人御書講義全 38 巻 聖教新聞社

1968 年-2003 年 刊 創価学会

『創価学会教学要綱』創価学会 2023 年
1980 年 創価学会教学部 編著『世界広布の翼を広げて——教学研鑽のために「観心本尊抄」』聖教新聞社

2018 年 創価学会教学部 編著『世界広布の翼を広げて——教学研鑽のために「観心本尊抄(第二版)」』聖教新聞社

創価学会教学部 編 (2018) 『現代語訳 観心本尊抄』聖教新聞社

創価学会教学部 編 (2024) 『現代語訳 観心本尊抄(第二版)』聖教新聞社 (Kindle 版)

創価学会男子部教学室 (2024) 「不適切な御書解釈の数々と 曲解に基づく批判を斬る」

『男子部教学室論考』創価青年部 メディア掲

載記事 <https://www.sokayouth-media.jp/answer/2825023.html>

宮田幸一（2016.10.7）．宗教学会発言へのQ&A．取得先：<https://miya33x.littlestar.jp/qanda-shukyogakkai.html>

——（2011）．漆畑正善論文「創価大学教授・宮田幸一の『日有の教学思想の諸問題』を破折せよ」を検討する(3)．URL:
<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper14-6.html>

——（2011）．『本尊問答抄』について．

『法華仏教研究』第12・13・14号（上・中・下）に分けて掲載．（2011年9月10日公開・同年9月28日、2012年1月30日、2月18日、2013年10月4日付加）．取得

<https://miya33x.littlestar.jp/paper15-2.html>, 又は
<https://miya33x.littlestar.jp/paper15-3.html>。

Weblio 辞書 (2026) ‘本仏’ . Available at: <https://www.weblio.jp/> (Accessed: 17 August 2026).

